
キングの買い物

56

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キングの買い物

【Nコード】

N3073H

【作者名】

56

【あらすじ】

体売る少年の前に現れた男。その男のせいで、闇の中で安定していた少年の生活が歪み始める。BL苦手な方はご遠慮下さい。15禁です。

深海魚の夜（前書き）

作者の文章力の低さゆえ、性描写は少なくなると思います。それを期待していた方ごめんなさい。でも、どう転ぶか分からないため、念のため15禁にさせていただきます。

B Lに御理解頂けない方、B Lって何よ？って方はご遠慮下さい。

深海魚の夜

一、二、三、四、五、六。
一、二、三、四、五、六。
一、二、三、四、五……。

やっぱりあそこだけ一つ足りない。

小さな落ち着いたシャンデリアから垂れ下がる、キラキラと光る飾り。一番手前の部分だけ、六個ずつ着いているはずのガラス玉が一つ足りない。

それに気付いてしまっただけで、このシャンデリアがひどく安っぽい物に見えてしまう。

キラキラ光る飾りもガラス玉なんかでは無く、プラスチックに違いない。光り方が不自然だ。

でも、その方が相応しいのかもしれない。この場所にも、自分にも。

そんな事を考えていると、口の中を気持ち悪く這い回っていたものが抜けて、ようやく長いキスが終わった。

「え……。もう終わり？」

とりあえず、取って付けた決まり文句を甘えた声で囁いておく。

それに気を良くしたのか、相手の男が満足そうに目を細めた。

「続きは週末。なっ？ ユーキは明日も学校だろ？」

それがわかっていいるなら、平日の夜にわざわざ呼び出すのはやめろ。

でも、おかげで今晚の夕飯は真っ当なものにありつけた。

俺はローテーブルに置かれた皿に視線を落とす。

「週末まで三木さんに会えないなんて……さみしくて死ぬかも……」
出来る限り小さな声で呟いて、男の袖をつかむ。

自分でも、心の片隅にも思っていないような嘘が、よくもこう口からポンポンと次々に出てくると思う。

本当に寂しいのは、週末までの夕飯がコンビニ弁当に変わる事だ。まあ、ご馳走してくれそうな客は携帯にいくらでも登録されているから、実際はそう寂しくない。

「おまえ外では散々偉そうな口きいてる癖に、なんで俺の前だとそういう事言うんだよ。帰りづらくなるだろ——」

なんでと聞かれれば、そう思わせる事が相手を落とすのに一番効果的だったからだ。

困ったと口で言いながらも、嬉しそうな笑みを見せて俺の頭を撫でてくる。

俺は、しばらくこの三木という男をメインに仕事をするつもりでいる。

父親が政治家とっていたか、とにかく大学生とは思えない程、良い身なりをしている。ただ、趣味の悪い茶髪のせいで社会人には見えず、いいところホスト、見方によってはただのヒモとか遊び人の類だ。

早くソファから腰を上げてくれる事を祈りつつ、寂しそうな素振りを見せて三木の腕に抱きつく。

途端に隣の部屋から色っぽい喘ぎ声が聞こえた。若い男の声だ。いいかげんにしろよ。俺は舌打ちを噛み殺した。

こう言ってはなんだが、俺は中性的な母譲りの容姿のおかげで、割と儲けさせてもらっている。体を売って金にしているとはいえ、日々の生活には困らないし、むしろその辺の高2の同級生に比べれば、ずっと豪華な暮らしをしている。

だからいくら金のためとはいえ、こんなカラオケボックスを改装した、ゲイバーの奥の、狭くて汚い個室で、客と寝ようとは絶対思わない。

俺はもっぱら待ち合わせと、軽食をすませる程度に使っている。

バーだからフルコースとはいかないが、どこからかママが拾ってきたシェフ崩れの男は、俺の舌を満足させるだけの腕をもっている。特にデザートは、よく連れて行かれる会員制レストランのそれよりずっと俺の口には合っている。

隣から聞こえる喘ぎ声に興奮したのか、三木が「じゃあ、もうちょっただけ」と、また唇を合わせてくる。

せつかくさっきので終わりだと思ったのに。

最後に食べたビスキュイショコラの味はすっかり消え、代わりに三木が吸っているキャスターの味しかない。

三ツ星レストランのディナーも、有名ホテルのルームサービスも、自分の口の中に長く後味を残す事無く、いつもこうやって消えていくのだから、勿体無くてしかたない。

三木の腕に力が入り、ソファーに押し倒されてしまった。

こんな誰の体液が付いているかもわからないソファーが背中に触れるなんて、いいかげん嘔気がしてきた。

適当に相手に合わせて舌を動かしながら、窓に目をやると、艶めかしく透き通った白っぽい深海魚がゆるゆるとガラスに映っている。制服の半袖から伸びた自分の腕だ。

深海魚は尾びれとも胸びれともつかない二本の白い触手をヌメヌメと動かし、深海の海草にまとわりつくように、茶髪に指を絡ませる。

そして光を一切反射しない真っ黒な目で、俺を見つめてこう言う。

お前の居場所はここだ。暗くて冷たくて、光の届かないこの深海だ。血迷って瞳に空を映そうものなら、体はぐちゃぐちゃに爆ぜてしまう。ずっとここにいろ。ずっとこの闇の中に、と。

キイイという小さい音をたてて、もともと少し開いていた部屋の

ドアが動いた。三木はキスに夢中でまったく気付いていない。

半分ほどドアが開くと、廊下の眩しい光が部屋に入りこみ、影で誰かが立って、こちらを見ているのが分かる。

部屋の中は照明が落としてあり、薄暗いため、明るい廊下の光が逆光で誰なのか見えづらい。

俺は舌を絡めたまま、眉間に皺を寄せて、目を凝らした。

立っているのは男だ。よれよれの安すそうなスーツを身にまとい、髪はボサボサ、三十前くらいの歳だろうか。

男同士がキスをしているのを見るのが初めてなのか、怪訝そうな眼つきで、見てはいけないものを見たかのように唾然として立ち尽くしていた。

明るい所で見れば健康的であろう、爽やかな顔立ちが、格好とは不釣合いに、汚れを知らない純粹な青年を表している。

そいつは、光を乱反射させる、まぶし過ぎる水面から、まるで覗き込むようにこちらを見つめていた。

特定の、それも売春や薬にまみれた汚れた人間しかいない、この無法地帯に、こんな明らかに汚れた事は何も知りませんと顔に書いてある人間がいる理由は、一つしか思いつかない。

こいつ、キングの買い物か……。

それはまるで、今まで元気よく、明るい浅瀬でサンゴ礁に戯れて泳いでいた熱帯魚が、海流に吞まれて、今から引きずりこまれる深海の闇を初めて目に映した様だった。

俺はゆっくりと落ちてくる熱帯魚を深海から見上げて、自分以外の男と舌が繋がったままニヤついた。

ようこそ深海へ。

もう明るい水面には戻れないよ。

深海魚の夜（後書き）

拙い文章ですが読んで頂いてありがとうございます。

初BL作品ですが……。

もともと18禁で登録していたお話ですが、やっぱり18禁とか書く技術ねえな、ということので15禁であらたに登録しました。感想など頂けると天にも上る程喜びます。

でも苦情や中傷等は御容赦を。

キングの買い物

バタンツ！

男は俺と目が合ってから一瞬の間をおいて、ドアを派手に閉めて姿を消した。

暗闇の中で、男とキスしながらニヤつく奴と目が合ったのだから、相当気分を害したのだろう。

都合の良い事に、ドアの閉まる音に気付いた三木が、唇を解放してくれた。

「誰かいたのか？」

ドアの方を振り返って聞く三木に、俺はニヤついたまま答えた。

「キングの買い物だよ」

「キングって、このオーナーの事か？」

姿勢を戻して、ソファーに座りなおす。

「そう、ここの経営者。まあ経営してるのは、ここだけじゃないらしいけど」

ここ「DEEP BLUE」はその筋の者には有名なバーで、オーナーは通称キングと呼ばれている。

「キングは飽きっぽい性格だからね。二三ヶ月に一回は、ああやって新しい人間を買ってペットにしちゃうんだよ」

「ふうん。ずいぶん暇なんだな。キングって奴は」

三木は煙草を一本くわえると、俺に煙草の箱を向けた。

俺は有難く一本もらい、口にくわえて、三木と自分の煙草に火をつけた。

「でも、如何にも汚れを知りませんって、真面目そうな顔の男だったよ。ノンケってやつ？ 俺達がキスしてるのに驚いてたし。ああいう顔が歪んで、汚れていくのを見るのが好きなんだろうな——キ

ングは」

可哀想だな——と言いながら、口の端が上がってしまっている事は、自分でも分かっていた。

キャスターの香りが口の中だけでなく、皮膚にも染み付いていく。キングが二三ヶ月に一度買う人間は、決まってさっきの男のような、爽やかな汚れた事に手を染めていない様なタイプだ。そんな人間を、このバーの奥で見掛けたら、それはキングの買い物だと思っ
てまず間違いない。

さっきの男の眼差しが頭をよぎる。

今まで光を反射させていたであろう瞳に映る、深海の闇。

「半年後には、本当に海の底かもな……」

口から煙を吐き、過去に買われていった連中を思う。

今はどうしているのだろうか。恐らくもうこの世にはいない。そんな気がする。

こんな場所に出入りしていると、嫌でもそんな勘が働く。

売春だけでなく、時折薬や人間が売り売られていく場面に遭遇する事も珍しくない。そうになると「ああ、こいつはもうすぐ消える」と感じる事がたまにある。

自分が消えずにここにいられるのは、危ない話は聞こえない振り、見ない振りをして、うまく避けてきているからだ。

三木の携帯がメールを着信を伝える。

携帯の画面に目を通した三木は、「そろそろ行くよ」とソファを立った。

ドアの前で三木を見送った後、部屋に置きっぱなしにされていた皿やグラスを片付ける。

トレイを持って廊下に出ると、両手にグラスを持ったバーテン姿の男がこちらに近づいてきた。

「悪い、ユーキ君。置いておいてくれてよかったのに」

「吉野さん。いいですよ、これくらい。今日は野木は？」

いつもはカウンターの途中でシェイカーを振っている吉野が食器を運んでいるとは、平日にも関わらず、この店はずいぶんと混み合っているらしい。

この店が大盛況ってことは、犯罪も大盛況ってことか。世も末だな。

「今日は野木君休みなんだよ。試合前の最終練習って言ってたかな――」

野木というのは、俺と同じ高校の同級生だ。二年で弓道部の副主将というホープの地位を得ておきながら、こんな店でウェイターのバイトが出来ているのは、弓道部という自分で練習時間を決めれる、個人主義色の強いマイナー運動部のおかげだ。

吉野は俺が持っていたトレイを受け取り、自分の持っていたグラスをカチャカチャとトレイの上に置いた。

廊下の奥から人の足音がした。

目を向けると、さっきの男がこちらに向って歩いて来ていた。

キングの買物。

俺の目を追って振り向いた吉野が、男に気付き、少し顔を強張らせた。そして避けるように、そそくさと俯き加減で反対の方向へ姿を消した。

未だに怪訝そうな眼つきの男と目が合うのは二度目だが、今度はひと睨みして、わざと視線を壁に外して、隣を通り過ぎようとした。キングの買物。興味を引かれる話題ではあるが、そんな危ない物に近づく気は更々無い。

さっきの事があるため、すれ違い際に一瞬緊張が走ったが、何事も無く通り過ぎる。

少しホッとした瞬間、右手に痛みがはしった。
目を移すと男の右手が俺の手首を強い力でつかんでいる。

「君は……、君は学生なのか……？」

男が眉をひそめたまま、かすれた声で呟くように問いかけた。
一瞬ハッとする。

俯いて、自分の胸元に目をやる。

せめて校章が刺繍されているネクタイは外すべきだった。ネクタイさえ外せば、制服と気付きにくいいため、この格好で来る時はいつもそうしていた。

「あんた、警察かなんか？」

まさかとは思ったが、先に口に出た。

こんな場所に警察がいるはずがない。いたとしたら、高校生がいることよりも、もっと取り締まるべき犯罪が渦巻いている場所だ。

「いや、警察では……」

男が気まずそうに声を更に弱めた。

俺は人の良さそうな顔を見つめて鼻で笑った。

今まで間違いを犯してこなかった真っ当な人間の考えそうな事だ。
高校生が売春しているのを知って、黙っておけなかったのか。

「俺の客が制服好きだから、昔使ってたのを着て来ただけ」
嘘だけ。

「そ、そうか。変な事聞いて、すまない」

男が少しホッとした顔をして、つかんでいた手の力が弱まったので、腕を振り払った。

体格が違う分だけ、力の強さの解釈に差が出る。本当に痛かった。
俺は右の手首をさすりながら、男を睨み上げた。

体は大事な商売道具だ。

「お兄さん、キングに買われた人でしょ？」

男は身に覚えがあるらしく、一瞬驚いて顔をしかめた。

「俺の心配より、自分の身の心配した方がいいんじゃない？ 男同士

のキスで、気持ち悪がってたらキングの相手なんか務まらないよ？」
右手の痛みがイラつきを増幅させて、勝手に相手を弱らせる事を口走る。

「まあ二三ヶ月の辛抱だけど、心も体もぐちゃぐちゃになるには充分すぎる時間だよね。でもお兄さん格好良いし、キングに捨てられても、体売れば良い暮らししてけるかもね。俺も相手してもらおうかな。」

自慢の営業スマイルで言った。

「生きてれば、だけど」

キングの買い物（後書き）

最初なだけに、少しダラダラとしますが……
出来ればもっとテンポ良く書きたい。
読んで頂きありがとうございました。

裏シノ

「生きてれば、だけど」

良いタイミングで、先程まで使っていた部屋の隣のドアが開き、知っている顔が現れた。

黙ったままの男を残して、俺は何も無かったかのように少年に声をかけ、連れ立ってトイレへ向った。

トイレの前で振り返ると、男はまだこちらを見つめて、立ち尽くしていた。

「シノ、おまえな――。隣の部屋で変な声あげんなよ！」

洗面所に着いてすぐに、先程部屋で聞こえた喘ぎ声の張本人を責めた。

シノは俺の同級生で、野木と同じ隣のクラスの奴だ。俺がこの商売を始めたきっかけになった人物でもある。

「ご、ごめん。あんな事するつもりじゃなかったんだけど……」

あんな事ってどんな事だよ。思っても聞きたくは無い。

「お前のせいで、危うくこっちまで、あんな事になりそうだったじゃねえかよ！」

そう言いながら、水道水で口をゆすぐ。こんな事であの男の味、もといキャスターの味が落ちる訳では無いが。

「ごめん……」

少し言葉を強めすぎたのか、シノは鏡の中で俯いたまま口を歪めた。

「マジで危うかったんだからな！ 勘弁してくれよ。あんな所で」

シノは水を止めると、何も言わずに、俺の腰に手をまわして横から抱きついてきた。

不貞腐れたように、俺のカッターシャツに顔を埋めてくる。

「……ちよつと言い過ぎた。泣くなよ――」

俺は手をハンカチで拭いて、シノの癖つけのある髪に、ポンポンと二度掌を落とした。

「悪かったよ。もう、離れろ！」

シノの肩をもって、体から引き剥がそうとするが、なかなか離れない。

癖毛に手をやり、無理やりシノの頭を押し返すと、余計に額を二の腕にくっつけて顔を隠してしまった。

「じゃあ、数学の課題写させてくれる？」

出た。裏シノ。

「あれぐらい簡単なんだから自分でしろよ！」

「さすが学年成績トップは頼りがあるな――。この前、酔い潰れて送っていったタクシー代と、ベッドに運んでパジャマに着替えさせてあげた分の貸しが、数学と英語の課題で返ってくるなんて。」

本当は合わせ技で美術の創作課題もお願いしたいけど、ユーキの絵は見れたモンじゃないし、また次の機会まで貸しにしとく」

顔を埋めたまま、早口でごにゃごにゃとほざいている。

いつのまにか英語の課題が増える。

こいつに貸しを作ると、こういう事になる。もう、その辺のキャッシングローンなんかより、ずつといい仕事をして、えげつない取立てをくらう。

「待て待て待て待て！ 英語の課題はマジめんどいから無理！ レポート用紙三枚だぞ！？」

「ちよつとくらい手伝うよ」

「お前の課題だろ――が！」

「じゃあ、何で返してくれるの？ 体？」

急に声のトーンがぐつと落ちたシノに、ほんの少しばかりゾツとする。

二の腕から覗く細められた眼差しが、ジットリと鋭さを増してい

た。

「そ、それは、ちょっと……」

一見気の弱そうな幼い顔付の友人は、俺なんかより実はずっと大人で、取引上手で、本気で怒らすとマジで怖い。

今まで本気で怒らせた事はないが、チラホラ覗く黒い本性と、一気に気温を氷点下まで下げる事のできる眼つきがそれを教えている。「嘘。ユーキは可愛いけど、好みじゃないし、エッチ下手そうだから、返すなら体以外にしてくれ！」

顔を上げて、真面目な表情で懇願された。

「なんだよ！ それ」

友人の俺自身に対する評価と、俺の絵のセンスに対する評価を今更ながら知って傷つく。

それに、自分より背が低く、童顔の男に可愛いと言われてしまった。俺のプライドがヒリヒリする。

「まあ、英語の課題、文章は僕が作るから、ユーキは英訳だけしてくれればいいよ」

ニコニコと笑いながら、俺の服で両手を丁寧に拭いた後、そう言うって体を離れた。

自分も、学校と客相手の時とでは、全然違う人格になっている気がするが、こいつには勝てない。

こっちが文句を言ったはずなのに、結果英語と数学の課題を背負わされてしまった上に、性行為と絵のセンスの無さを批判されて、プライドが痛い。

俺は舌打ち一つして、シノが手を拭いたせいで濡れたシャツを、気休め程度にハンカチで拭いた。

「じゃあ、明日も学校だし、一杯だけ飲んで帰ろうか！ ユーキのおごりで！」

俺の手を繋いでトイレを出るシノを睨みながら、もう一度舌打ちをする。

まあいつもの事と言えば、いつもの事。

こうやって、お互い本性をさらけ出せる事が楽で有難い。たぶんシノも同じように思っているから、何だかんだで俺の隣にいるのだろう。

現に学校での俺達に対する評価は、無口で真面目な大人しい優等生と、人懐っこくて可愛い卑し系マスコットキャラの二人だ。

その晩、俺とシノは一杯ずつだけカクテルを飲んだ。もちろん、俺のおごりで。

「はい。おはようございまーす。」

教台に出席簿を置く音がした後、いつも通りの若い女の明る過ぎる声がする。

いつもより女子のざわつく声が耳につくような気がした。

「みなさんも知ってのとおり、副担任をして下さっていた岡田先生が産休に入られたため、今日から新しい先生に副担任をして頂きます。ちょっと、そこ！ ユミ達うるさいよ！ 先生、お願いします」

開いていた世界史の教科書をパラパラとめくった。

歴史上の興味のある人物について、英語でレポート用紙三枚に書いて来週中に提出という課題を思い出す。

シノはああ言ったが、やはり人物選びから全て俺がしてしまおう。シノが人物を選んで、文章を書くのを待つよりは、俺が一からしたほうが絶対早い。

だいたい、一度でレポートが通らずに、再考察で返却されて来てしまったら、手直しがややこしくって、面倒くさ過ぎる。だから、間違いなく一度で合格になるレポートを、俺が書いた方が良いに決まっている。

「えー。今紹介に与りました、今日から副担任をさせて頂く事になりました。椎名といいます。」

軽く息を吐き、教科書を閉じた。

顔を上げ、眼鏡のフレームに触れて位置を直し、目を細める。

初めて見る男が、黒板の前で話している。
二十代後半だろうか、爽やかな顔立ちに、少し日焼けした健康そうな肌色。

安っぽいスーツと清潔感のある髪型。

汚れを知らない瞳。

明らかに俺とは住む世界が……

……違う。初めてじゃない。

見たことあるぞ、こいつ。

昨日……そう、昨日見た。

昨日の夜……深海から見上げた。

キングの買い物。

裏シノ（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

ふゝ。

先生と生徒か……在り来たりな設定で本当にごめんなさい。

初BLに怖気づいて、こうなってしまいました。

でも、裏シノ出せてちょっと嬉しかったです。

ブログの方にイメージ画や、BL以外の作品も置いてあったりします。

よろしければどうぞ↓<http://fnol6.blog54.fc2.com/>

なめんな！56！という方はスルーをお願いします。

去年の後悔

「えっと、まゆずみ 幸也 ゆきや 君？」

教室のドアを開けて中を覗くと、椎名は既に椅子に座っていて、こちらを見上げた。

「はい。遅くなってしまつて申し訳ありません」

俺は俯いたまま、中に入ってドアを閉めた。

新しく就いた自分のクラスの副担任が、自分が売春拠点にしているバーのオーナーのペットだと知つて以来、俺は副担任が教台の前に立つたびに、俯いて目を合わさないよう存在を消すため、息が詰るような学校生活を送っていた。

もちろん同じバーに出入りしている、隣のクラスのシノと野木には即日話したが、あの性格のシノは「え——そうなんだ。僕あの先生ちょっといいなあって思つてたのに残念。キングと好みかぶつてるのかな——ショック……」と、こっちの予想とは違う部分で、勝手にショックを受ける始末。

野木は、その点賢明で「まずいな……」と一言漏らし、神妙な面持ちになった。

弓道部の大会が迫っている今、副主将の自分があんな店でバイトしている事がばれたら、自分だけでなく、弓道部自体の存続に関わるかもしれないと考えたのだろう。

俺は野木に両親がいない事を知っている。生活を安定させるだけの収入があり、尚且つ部活が出来る仕事を、俺は他に思いつかない。あいつは俺と違って、生活の為にあそこで働いているのだ。

そうこうしている内に、週末を向えた。

隣のクラスは、椎名が受け持っている数学の授業以外では、顔を

合わせる事がないため、安泰らしい。

しかし、担任が生活指導教員を掛け持ちしている俺のクラスでは、日々副担任である椎名との距離が縮まってゆき、ついに土曜の放課後に、新しい副担任に学園祭の運営について教えてほしいと、担任の女から死刑宣告のような言葉が告げられた。

こんな事なら、去年実行委員の会計なんてものを引き受けるんじゃないかった。でもあの時は、今ほど体が忙しく無かったし、俺の表面だけを見て信頼を寄せてくる奴等の推薦もあり、断れなかった。今更後悔しても、もう遅い。

「悪いね。せつかくの土曜の放課後に呼び出して。新任早々学園祭の運営担当に当てられてしまっただね。資料も少ないし、困ってたんだよ」

俺は「はあ」と小さく返事をして、椎名の向かいの席に座った。気付いているのだろうか。俺があの日、売春していた奴だって事に。

シノによると「スーツを着てる奴等の顔がみんな同じに見えるように、制服を着てない奴からしたら、制服を着た連中なんて、みんな同じ顔に見える」らしい。前半の例えが既に俺には当てはまらないため、まったく信憑性は無い。

だがあの夜に比べて、今はワックスで尖らしていた髪を、何も付けずにストレートにしているし、何より学校では眼鏡をかけている。今日までの反応を見る限り、椎名はあの夜の少年が俺だとは気付いていない。

いや。気付いていて、気付かない振りをしているのか。どちらにしろ、まずいのはお互い様だ。もっと自信を持ってい

恐る恐る顔を上げて、上目遣いで相手を覗く。

椎名は人懐っこそうな、明るい笑顔で視線を合わせてくる。

「これ、家のパソコンに残っていた、去年の資料です。参考になるかと思って……」

持って来たクリアファイルの中身を渡す。

「助かるよ」と言って、しばらくプリントに目を通しながら、感心したように「へー」とか「なるほどな——」と呟いている。

「これ君が一人でやったの？　すごいな——。さすが学年トップだ。牧内先生が自慢したい気持ちもよくわかる」

牧内というのは、担任の女教師の事だ。

ちょうど椎名と同じ世代で、クラス的女子が「付き合っちゃえば？」と騒いでいた。牧内の方も満更でも様で、顔を赤くしていたな。

「いえ。俺一人ではなくて、他のメンバーの力も借りて作った資料です。牧内先生は俺を買被りすぎです。きっと褒めて伸ばしてくれ様として、そんな事仰って下さるんだと思います」

謙そんなから、プリントを受け取り、一枚ずつ簡単に説明した。

「うん。だいたいの形は掴めたけど……これだけの事をまとめるなんて、俺にできるかな——」

椎名は苦笑しながら、プリントを見つめた。

「椎名先生は、着任して間もないから、そう思われるだけだと思います。もう既に生徒からもすごく人気ありますし、きっと椎名先生となら、みんな喜んで協力してくれると思いますよ」

この教室に入って、初めて顔をゆるめた俺に、椎名が目細める。新任の若い男性教師に、クラスの女子共が沸き立っているのは事実だ。

「黛君にそう言われると、ちょっと自信出るな。君は今年は実行委員会に入らないのか？」

「はい。俺には荷が重過ぎます。もっと人をまとめれる生徒は沢山いますので……」

「そうか。君がいてくれると、俺も心強いんだけど」

少年のような透き通った瞳で、俺を覗き込む。

「……すみません」

冗談じゃない。これ以上学校に時間を縛られるのはごめんだ。

思いの他スムーズに事が運び、ホッとした。

やっぱり気付いていない。

シノが言ってた事も、あながち間違いではないのか。

「この資料は使って下さい。役に立ってくれると、俺も嬉しいです
し」

俺はそう言って、椅子から立ち上がり、プリントをまとめた。

全ての資料をページ順に並べるのに、少し手間取った。

その間の沈黙が重苦しい。

椎名は俺を見ている。前髪に痛いほど視線を感じる。

「おまえは、いつからあの店に出入りしているんだ？」

先程までとは全く違う、低い突き刺すような声に、教室の空気が
一気に凍りつく。

声でわかる。

さっきまで前に座っていた教師の人格ではない。

深い闇の中から聞こえるような、静かにどこまでも響く声。

恐怖で体が動かない。

近づいてはいけないと、俺の本能が教えている。

あのバーの奥の個室で、時折身を襲う警告と同じだ。

触れるだけで、深くまで引きずり込まれる恐怖。

悪寒で肌がじっとりとしてくるのが分かる。

しかし、ゆっくりと上げた視界に入ってきたのは、さっきからず
っと目の前に座っている副担任の優しく、悲しそうな表情だった。

先程よりも、椅子に深くもたれ掛かり、足を組んでこちらを睨んでいる。

俺は気付かれない様に、薄く開けた口から深く息を吸い込み、吐き出した。

自分でも、なぜ怯えたのか分からない。

「お兄さん、教師だったんだね。気付いてたなら、最初から言ってくればよかったのに」

鼻で笑って、一度崩れかけた自分を立て直す。

こうなる事は想定内だったのだから。

「いつから体売ってるんだ？」

苦しそうな表情の椎名が問う。

先程怯えた後遺症で、息を吐くと体が少し震える。

「そっちこそ、キングのペットのくせに、こんな所に居ていいと思ってるの？　ここ学校だよ？」

「今は俺じゃなくて、お前の話をしているんだ」

椎名は鋭い眼差しで目を細めた。あの夜と同じだ。

「じゃあ、職員会議で報告すればいい。生徒が売春してるのと、教師が人生売って人に飼われてるのと、どっちが問題になるか、試してみます？」

また鼻で笑って見下ろす。

「俺のことはいい。まだ若い学生が、間違った道を選んで、俺のようになるのを見ている訳には……」

ドンッ！！

いい加減イライラして机を叩いた。

「勘違いされてもダルいんで、はっきり言っときます。俺は生活に困って、嫌々体を売ってるわけじゃない。だからこの商売を辞めるつもりも無いし、今の安定した生活を崩す気も無い」

両手をついて身を乗り出した。

「椎名さん。あんたに俺は救えない。俺は救ってほしいとも思わないし。自分の人生も守れないような奴に、俺の人生をどうこうされたくない。あの時も言っただろう？俺の心配より、自分の心配しろって」

しばらく教室が静まる。

苛立って、思ったことを連続で吐き出したため、息が上がった。

「黛……」

説き伏せるように、椎名が静かに口を開いたので、上がった息を落ち着けて、プリントをクリアファイルにしまい込む。

「もういいですか？俺、週末は客とクルージング旅行なんです。いっぱい遊んで、いっぱい美味しい物食べさせてもらって、好きなもの買ってもらって、いっぱい体売って、いっぱい稼いで帰って来ます。理由は言わなくてもわかると思いますけど、この商売すごく体力いるんで、帰って準備して早く休みたいんです。だからもういいですよ？先生」

クリアファイルを椎名の前に乱暴に放って、早足で教室を出る。椎名はあの時と同じように、何も言わずに、俺を見つめている。

教室を出て、靴箱に向う廊下で、シノにメールを打った。

『やっぱバレてた。最悪』

去年の後悔（後書き）

予想外な日に更新出来て嬉しいのです。

でも読者解析がまだ復旧してないので、みなさまに読んで頂いているのかちょっと不安。

実は本当に読者数ゼロなんじゃ!?

一人でも多くの人に読んで頂いて、皆様の貴重なお時間を夢中に出れば、心から嬉しく思う56であります。

双頭の獣（前書き）

性描写が含まれますので、苦手な方・義務教育中の方はご遠慮下さい。

双頭の獣

『やっぱバレてた。最悪』

このメールの返信を、一日遅れでシノから着信した時。

俺は背中から震度5の揺れに襲われていた。

あまりの揺れで、ベッドから一望できる夜景は、シャッターが開きっぱなしの写真のように無数の光の線になり、正しい遠景を網膜に焼き付けることができない。

ベッドがきしむ音、シーツが擦れる音、肌がぶつかる音、潮が満ちるように緩やかに大きくなっていく水音。

その全ての音が、揺れと同時に身体に反響するたびに、うつ伏せになった頭上で縛られた両手首に痛みが走る。

一定の律動で激しく、ぐるぐると廻る視界と、自分の荒い息音のせいで、携帯の着信音はひどく静寂に感じた。

「俺が見てやるよ」

突然振動は止み、ベッドサイドテーブルの携帯に、背中から手が伸びる。

「まさか浮気なんてしてないだらな？」

震源の男が、俺を携帯を手に取り開ける。

先程までの余韻は微塵も感じさせず、余裕の声でニヤつく三木を、肩越しに振り返る。

自分の肩と背中が、小さな内出血の痕でまだらになっていた。

「するわけないじゃん」

だって、付き合ってもいない。

三木とは対照的に、俺はさっきまでの余震が身体から離れず、息が上がって、声がかすれている。

菅原^{すがわら} 志乃^{しの}？」

「同級生」

「ああ。隣のクラスの奴か。えっと――、『問題ないだろ。放つとけばいいよ』だってさ。……何が問題ないんだ？」

やっと身体から波紋が消え、何とか普通に喋れるようになった。

「この前言ってた、キングの買い物……キングのペットがさ――、俺のクラスの新しい副担任だったんだよ」

「まじで？ そりゃちょっとひくな――」

三木は興味無さそうに驚いてから、携帯を閉じて、枕元に投げた。

今朝早くから車に連れ込まれ、日中は殆んどを船の上で過ごした。三木の父親が所有するというクルーザーに、三木の兄とその友達と俺達の4人で乗り込み、海へ出た。

再び身体の内側から、こだまし始めた揺れと、徐々に大きさを増すぴちゃぴちゃという水音を感じながら、昼間見た海面のうねりを思い出す。

一定のリズムで身体ごと大きく揺さ振る、あの波にのまれている様だと思った。

その律動は、脳の奥まで反響し、正常な思考を奪う。

自分は今何をしているのだろうと、考えさせないようにする。

何のために息をして、何を思い描いていたのか、思い出させないようにする。

そんな事を考えていたら日が暮れる、楽しければいいじゃないかと、失笑するもう一人の自分が現れる。

そうやって揺れに乗じて、少しずつ劇薬を脳に染み込まされる。

楽しくて、美味しくて、気持ち良くて、もっと気持ち良くなるために少し苦しくて、そうやって一日が終わっていい。そんな日常に明け暮れて、波に身を任せて、侵食されていいと思わせる。

純粹に心から、本当に楽しい一日だったと思う。

クルージングの後、三木のよく使う、このホテルの部屋の風呂に二人で入ってから、町へ出た。車で名所と呼ばれる場所をドライブした後、ずっと前からねだっていた時計を買ってもらった。

それから、このホテルの最上階のレストランでフルコースを食べた。あの時窓から眺めた夜景は、今とは違い、ちゃんと自分の網膜に静かに形をとどめていた事を思い出す。

縦揺れは、だんだん四肢の先端にまで伝わり、全身で共鳴して、一つの波長をどんどん大きくしていく。

拘束された両手首が、更に鈍痛を増す。

震度3――5――6――。

口から全ての空気と熱を吐き出して、真空になった身体からは、乾いた短い吐息しか出てこない。

自分以外の別の男の声が、激しい息遣いの合間を割って、口から漏れ出す。

苦しさで快樂を含ませた、女のような艶めかしい喘ぎ声。

教室にいれば学校モード、客の隣にいれば接待モード、男と寝る時はベッドモードの自分に、自動で切り替わる。

アンドロイドの様に都合良く、場面に応じて自分の性格が切り替わるように身体を造り替えてくれた、今までの幾人もの男に、俺は感謝している。

どれが本当の自分なのかは分からないが、少なくとも今妖艶な声

をあげている自分は、本当の俺では無いと思いたい。

もう一人のベッドモードの俺は、すごい速さで、麻痺した身体の隅々まで染み渡り、四肢の自由を俺から奪い取る。

もっと早く登場してくれていれば、よかったのに。

先程から、もう何回も意識が飛ぶ寸前の状態を体感した。いつそ意識を無くした方が楽だと思うのに、三木がそうもさせてくれない。ベッドモードじゃない俺は、刺激に対して強く造られていないし、そこから快楽を見い出す事も難しい。案外デリケートなのだ。

もう一人の自分に、ほぼ全ての器官を奪われ、眼球を動かして視界を移動させる自由だけが残った。

仕事熱心なもう一人の俺は、体の自由を手に入れた事を喜びながら、首元にキスを繰り返す背中の中を男を喜ばせようと、言葉を発する。

「んんっ……やあ。……おかしくなる……許してえ」

煽る様に、わざと羞恥に頬を熱くして、独り言のように呟く。

体が繋がっているせいで、相手の興奮が手に取る様に伝わってくる。

「ん？何？聞こえない」

わざとらしく耳元に唇を付けて、低く囁く三木の声を聞き、ベッドモードの俺は更に喜ぶ。

「ん……。……三木さんの意地悪」

聞こえないくらい言葉を残し、さっき奪い取ったばかりの俺の表情を操作して、目を潤ませた、泣きそうな顔を演じさせる。

「もっと、はっきり言ってくれないと分からないよ」

三木が笑いながら、また首に唇を落とす。チクリとした小さな痛みに、また一つ所有権の証が、身体に刻み込まれたのを感じる。

もう一人の俺と、背中で存在を感じる男の鼓動は徐々に高まっていき、自分の身体の熱で骨から溶かされそうな恐怖を覚える。

許された自由でもう一度、窓に目をやる。

白い輪郭だけで、下半身が一つの双頭の獣の姿が、光の筋を映し出す黒いガラスに重なって見える。

ベッドに這いつくばり、取り憑かれたように獲物にむさぼり付いている。

あの獲物は俺自身か。

違う。俺はむさぼり付いている方か。

双頭の獣に食されている姿の見えない獲物は、俺が目背けたい、忘れたいものの様でもあり、触れる事さえ出来ない、尊いものでもある様に感じる。そして、それはもう残りが少ないような気がした。獣の動きが激しくなるほどに、俺の神経は冷静さを増し、それを通り越して深く沈み、冷たく凍っていく。

突然振動が止まり、双頭の獣の身体が、二匹に別れたと思った途端、視界がひっくり返った。

明るすぎる照明の中に、好きでも嫌いでも無い、男の顔が現れる。三木は、俺を仰向けにさせて、涙とよだれでぐちゃぐちゃになった顔を丁寧に舐めてくれた。

ベッドモードの俺は、一匹だった身体が離れてしまった事をひどく悲しんだ。

仕事しよーぜ！ ユーキ、テメー。と侵食されつつある俺の脳の中で、悪態をつき、三木の足に自分の足を誘うように絡める。

三木は面白そうに笑うと、俺の右ひざを折り曲げ、胸の辺りまで持ち上げた。

「柔らかな身体だな……」

胸元にある自分の下肢が、血管が透けるほど白い上に、汗でヌメヌメとしていて生々しかった。まるで、深海魚の尾ひれのように。

「どうしてほしい？ ユーキが自分でおねだりしてごらん」
優しく麻酔のような言葉を、耳に直接吹き込まれる。

脳は瞬時に麻痺して、もうベッドモードの自分と、そうじゃない自分との区別がつかない。

俺はベッドモードの方だったかもしれないと、思い始める。

さあ、今からが本当の夜だと、身体がうずき始める。

俺の声なのか、もう一人の自分の声なのかすら分からない声を、自分では無い者の意思で口に出す。

そいつは目を閉じた俺の身体の中によく反響するように、ゆっくりとかすれた声で、嘔気のする、病んだ言葉を選び、吐く。

「三木さん……ユーキのこと、もっと愛して、めっちゃくちゃにして……壊して……」

笑う口元。

「おおせのとおりに」

双頭の獣（後書き）

初濡れ場にて、直接的な表現は避けました。というか逃げました。それでもいやらしさが伝わるように努力したのですが……。口の中がジャリジャリする……。

人にいやらしさを伝えようとしてる自分の腐食ぶりに呆れるばかりの56です。

来訪者

三木に業務終了を告げるキスをして、車のドアを閉めた後、自分の部屋に帰ってみると置時計は朝の六時半を表示していた。

今日は月曜だが、もともと午前中は学校に行く気は無かった。

想像していた通り、疲れきった身体は内出血している両手首をはじめ、あらゆる場所が痛んだ。

手早くシャワーを浴びた後、缶ビールを半分飲み、シノに午前中は授業休むとメールを入れてから、ベッドに潜り込んだ。

目を覚ますと、部屋の明るさでもう昼だと分かった。

運よく身体の痛みが取れて、余程気分が良かったら、昼から授業に出ようと考えていたが、やはり身体は痛いというより、油を注していない鉄の様に動こうとすると関節がきしみ、重たかった。

眠る前よりだるさを増した身体で寝返りをうち、ため息をついてから、もう一度睡魔の誘惑に乗る。

夕方に再度目を覚ますと、昼間の身体の不調に加えて、悪寒がする事に気がついた。

海の潮風が身体に合わなかったのか、背筋がゾクゾクとして、頭痛もする。

やはり夜行性の人間が下手に一日太陽の下なんぞに出るもんじゃない。

ベッドから這い出て、クローゼットの中をあさり、風邪薬が入った紙袋を取り出す。

風邪薬は薬局で売っている物ではなく、ずっと前にシノから貰った病院で処方される薬だ。

具体的にはよく知らない粉末を飲むために、冷蔵庫に水割り用のミネラルウォーターを取りに行こうと思ったが、歩くのがしんどい

ので、手元にあった飲み残しの缶ビールで流し込んだ。
煙草に火をつけると、鼻に抜けるメントールが心地よかった。

玄関のチャイムが鳴った。

時計に目をやると十八時半。ちょうど学校が終わったころだ。

野木かシノ。

野木は今部活とバイトで忙しいから、恐らくシノだ。

働かない頭と、重たくきしむ身体を無理やり引き摺って、玄関のドアを開ける。

コンビニの袋を下げた、副担任の椎名が立っていた。

思いも寄らぬ来訪者に、ぼんやりとした頭は事態をのみ込めず、しばらくその場に立ちすくんだ。

「悪いな、急に。……どうだ？ 体調の方は」

少し気まずそうに椎名が第一声を口にする。

今だ状況がよく把握できていない俺は、とりあえず軽く頷いた。

「お前の家に電話したら風邪だと言うんで、学校の帰りに寄ると言ったら、一人暮らししてるからと住所を教えられた」

ようやく理解できたと同時に、軽く舌打ちをする。

家に電話したという事は、出たのは恐らくあいつだ。

高校に入学して実家を出て以来、家族とは出来る限り距離をおいてきた。向こうも俺とは関わりたくないらしく、最低限の生活費を送る以外は繋がりを持たず、欠席の理由を問う電話が家にかかってきても、風邪の一言で済ましていた。おかげで俺は、大人しく真面目な優等生に加えて、身体が弱いというキャラまでクラスで獲得している。

いつもなら欠席理由が分かれば終わりなのに、一人暮らしの部屋まで訪ねて来る教師がいるとは思わなかった。

「どうして高校生で家族もいるのに、一人暮らしなんてしてるんだ？」

さりと一番聞かれたくない所を突いてきた。

俺は返事の代わりに、面倒くさそうに溜め息を吐いて、目をそらした。

何も答えない俺の首元に椎名の視線が止まる。

なんだって俺は、よりによって副担任の前なんかで、キスマークのよく目立つVネックのシャツなんて着ているんだろうと自分に腹が立つ。

「風邪は大丈夫です。……わざわざありがとうございます」

ドアを閉めようと試みるが、案の定椎名の手によって押さえられた。

「言いたく無いなら言わなくていい」

慌てる声に、ドアを閉めようとしていた手を緩める。

「わかった。もう黛の事はこれ以上聞かない。お互い詮索しない事にしよう。それならいいだろ？ でも、せめて生徒の体調を気遣う教師の役割ぐらいは果させてくれ。夕飯まだだろ？」

そう言って、手に下げていたビニール袋を前に差し出した。

しかたなく椎名を部屋に上げたものの、今の俺の部屋は、副担任の機嫌を損ねるのに十分な惨状だった。

せつかく身体を売った金で、上増しして家賃を払っている洒落た1LDKのマンションだが、今は酒宴の残骸と、煙草の吸殻で酷い有様だった。

その高校生らしからぬ部屋に入るなり、副担任は明らかに気分を害した顔をしている。

酒の空き瓶や空き缶は、殆んどが先週この部屋で飲んだ野木とシノが残していった産物だ。俺は体調によっては下戸くらい酒に弱いので、部屋の残骸にあまり責任はない。

今更ながら、酒飲みで、学校を休んでも見舞いに来ない薄情な友

人を恨む。

「葉飲んだのか。……まさかビールで？」

テーブルの上を見て言った椎名に、余計なお世話だと言わんばかりに、無言で葉の袋をゴミ箱に放り込む。

手を伸ばして、白い線を天井まで描くように煙を上げていた煙草を灰皿に押し付けて火を消した。

さすがに教師の前で、酒瓶の山を見せ付けた上に、煙草は吸えない。

少し不安がよぎり、椎名の顔を見上げると、眉をしかめているが、視線の先は煙草ではなく、袖からノゾク、縛られた痕が色濃く残る、俺の内出血した手首だった。

またか、と浅く息を吐き、急いで袖を上げて隠した。

「冷蔵庫どこだ？　これ入れとくよ」

キッチンに行こうとする椎名から、ビニールの袋を奪い取り冷蔵庫へ急ぐ。

一人暮らし用の小さな冷蔵庫の一番下の段に袋を詰めて、立ち上がった。

何故、流し台が揺れているんだろうと思った。

殆んど使わないコンロも、換気扇も、目で追えないくらい一瞬激しく横に揺れた。

次の瞬間、目の前が白一色になり、立っていられず、よろめいてその場に座り込んだ。

「大丈夫か！？」と慌てる椎名の声。

大丈夫じゃなかった。

こちらに向う足音。

その足音が止まるのを確認する事も出来ないまま、俺は意識を手放した。

来訪者（後書き）

前回の続きを期待して下さい。方ごめんなさい。

一気に旅行終了まで話が飛びました。

精神的な内面を書く話と、ストーリー展開をメインに書く話とのギャップがありすぎる気が……。これも、まあ技術の無さなのですが。56としては、ストーリーが決まっているだけに、勢いで何とか7月中の完結に突っ走りたい気分です。

「展開早くて着いてけん！落ち着きなさい。56よ」という方おられましたら教えて下さいませ。

微熱（前書き）

この小説は15禁です。性描写が無い場面でも教育上不適切な内容なため15歳未満・義務教育中の方の閲覧を固くお断りさせて頂いております。ご了承下さい。

微熱

気がつくと、自分が目を開けているかも分からない真っ暗な闇の中だった。

しばらくそのままじっとしていたが、気を失う前の事を思い出して身体を起こした。どうやらベッドで眠っていたらしい。

椎名が見舞いに部屋を訪ねて来て、買ってきてもらった夕飯を冷蔵庫に入れたまでは覚えている。

ちょうど枕元に置いてあった自分の携帯が手に触れたので、掴んで開けた。

驚いた事に、白く発光する画面は深夜の一時を表示していた。

更に驚いたのは、帰ったと思い込んでいた副担任が、隣でテーブルに突っ伏したまま眠っていた事だ。

「いっ……!!」

正直これには心臓を吐くかと思うくらい度肝を抜かれて、言葉に成らない音が口から漏れた。

携帯に着信履歴が一件あったので、シノかと思い確認してみたが、また違った。

17..30 椎名篤樹

しいな……何と読むのだろう。あつき……?

携帯をいじってみると、どうやら勝手に椎名篤樹という人物の携帯番号とメールアドレスが登録されている。

どう考えても隣で寝息を立てている男の仕業だろう。

生徒の携帯を勝手にいじるなんてどういう神経してんだ。

携帯で眠っている背中を照らすと、テーブルの上に置いてある椎

名の物らしき携帯電話を見つけ、悪戯心に手を伸ばした。

開けてみると、シンプルなカレンダーの待受け画面が表示された。マンションの駐車場に住み着いた野良猫の写メを待ち受けにしていた自分が恥ずかしい。

勝手に登録されているであろう自分のアドレスを消すため電話帳を開こうとしたが、ちゃっかりロックが掛かっており、暗証番号の入力を要求された。

このヤロウ。ふざけやがって。

俺は諦めて、気持ち良さそうに丸まる背中を睨みながら携帯を閉じた。

自分の携帯でもう一度、椎名の顔を照らす。

副担任とはいえ、なぜここまで訪ねて来たりして、こんな深夜まで一緒にいてくれるのだろう。

バカなのだろうか。

それとも売春をしている生徒がそんなに気になるのか。まあ、その気持ちは分からないでもない。

その上俺は椎名がキングの買い物だという事を知っている。誰かに喋らないか監視しているのだろうか。

だいたいキングの買い物が、こんな時間にこんな場所で寝ていいのだろうかと気に掛かる。キングは案外寛大なのか、それとも帰ってからお仕置きとか言ってベッドに連れ込まれるのだろうか。

腐った頭が勝手に妄想を始めそうになったので自己規制をかけた。でも万が一椎名がそんな目に遭うのなら、自分のせいである事は間違いないので複雑な心境になった。

先生ごめん……。

一生口にしなないであろう言葉を心の中で小さく呟いた。

僅かに眉をひそめたまま、寝息を立てている。

そんな表情のまま眠らせる程、俺は心配をかけたのかと思うと胸

の中の空間がキュッと縮まった。

実際初めてDEEP BLUEで会って以来、この顔が表情を緩ませる場面をあまり目にした覚えが無い。

それどころか、椎名がこの部屋に来てからろくに会話もしていない。

青白い光の中で少し苦しそうな表情の顔は、起きている時よりずっと幼い印象を与えた。

長い睫毛に、整った目鼻立ち。温かそうな吐息を吐き出す薄い唇。その口から放たれる、少し鼻にかかった優しい声を思い出す。

なぜそんな事を思いついたのか、気がつけばその息吹の漏れる薄く開いた隙間を、自分の唇で塞いでいた。

気がちがったのか。

熱のせいなのか。

携帯をいじられた腹いせなのか。

キングの所有物に触れるスリルなのか。

キングの買物に対する興味本位なのか。

ただの悪戯なのか。

ただの……。

どれでも無い様な気がする。

いい加減、自分も焼きが回ったと内心呆れたが、どうしても唇を離す事が出来なかった。

それどころか、柔らかさと温もりと体内から漏れ出してくる熱い呼吸を、自分の身体で感じ取ろうと必死に目を閉じて唇を動かした。

ふと薄目を開けると、薄暗い中で驚いた表情の漆黒の二つの瞳に

射抜かれた。

途端に深海から海面に引きずり上げられるような恐怖を覚えて、後ろに仰け反り、腰から床に倒れこんだ。

いつから目を覚ましていたのだろう。

これ以上ないというくらい、自分の鼓動がけたたましく体内で鳴り響いている。

椎名は身体を起こすと、いつのまにかテーブルの上で震えていた、着信を知らせて光る携帯を取り、耳にあてがった。

「もしもし……」

落ち着き払った椎名の声を耳にして、俺も忘れていた呼吸を取り戻す。

立ち上がり電気をつけた。

部屋が明るい蛍光灯の光に満ちると、今までの暗闇での出来事が夢だったかの様な感覚に陥り、幾らか安心する。

闇は人を狂わせる。おかしくする。別の人格を呼び覚ます。

「いや、今教え子の所なんだ。……すまない。すぐ帰るよ」

いつも通りの険しい顔つきのまま電話を切る。

今の着信はキングからだろうか。

一度しか見た事がない、キングの横顔を思い出してゾツとする。

DEEP BLUEの奥の廊下を曲がった突き当たり。裏口と向い合わせの部屋がキングの部屋だ。

突き当たりなので誰も通りかかる事は無く、キングに関係ある者しか立ち入らない空間。

キングは裏口から出入りするため、キングの顔を知る者はバーの店員でも殆んどいない。

DEEP BLUEに出入りするようになって間もない頃、何も知らない俺は恐れ多くもキング専用の裏口から出ようと、奥の廊下を曲がった。

裏口の前に男が一人立って、携帯をいじっていた。

三十半ばの落ち着いた雰囲気的眼鏡をかけた男だった。

少し長めの髪を後ろで括り、派手ではないが高価であろう品のある生地のスーツ。

でもその眼鏡を覗き込んだ瞬間、表現しようがない恐怖に襲われ、息をするのを忘れて震え上がった。

本能が危険を感じし、脳内で非常ブザーが鳴り響いている。それなのに、身体は血の気がひいて、じっとりと冷や汗が滲む。

これ以上近づけば殺されるような、そんな気がした。

眼鏡の奥の恐ろしく冷たい瞳が、携帯からこちらに視線を移すのを、俺は見れずに後ずさりした。

覚えているのは指先の震えと、今すぐ引き返さないといけないという衝動と、乱反射する眼鏡のレンズ。

あれ以来、奥の廊下には絶対に近づかないようにしている。というより、近づけない。

今椎名が切った電話の相手が、キングかもしれないと思うだけで、背筋が凍りつく。

「もう大丈夫か？」

何も無かったかのような椎名の優しい問いかけに、ホッとして頷く。

キングの記憶からの開放感なのか、さっき暗闇でキスしていた事に対する反応が何も無い事に対してなのかは分からないが、力が抜けてベッドに腰を掛ける。

いつのまにか部屋の中の酒瓶や空き缶が大方片付いていた。

ガシヤンガシヤンと酒宴の残骸物を入れたビニール袋が三つ、椎名の手に掛かる。

「これは俺が捨てておくよ。朝から高校生がこんな物捨てる姿は誰も見たくない」

そんな事なくても、ちゃんと前日の夜に捨てに行くのに。まあ捨てる手間が省けたので、特に止めもせず黙っておく。

帰る椎名を玄関まで追って行く。

「見送ってくれるのか？」

椎名が久しぶりに笑顔を見せた。

「鍵掛けないといけないから……」と無愛想に答えた。

この部屋での椎名との初めての会話かもしれない。

「まだ顔色悪いし、明日も一日学校休め。牧内先生には俺が伝えておく」

玄関で靴を履きながら言う。

「じゃあ、ゆっくり休めよ」

俺が何か返事をするのを待ったのか、束の間の時間が通り過ぎる。部屋が明るくなってから目をそらせていた顔を見上げる。

せっかく合わせようとした視線はすれ違い、ぼんやりとした漆黒の闇が自分の唇を追っている事に気づく。

そんなに見つめるくらいならキスでもしてみろよ。

下唇を少し吸い上げて濡らし、視線をそらせて挑発する。

自分の副担任相手に俺の頭も相当いってんな。

結局何も言わない俺に見送られ、椎名は廊下を出る。

ドアノブに手をかけて閉めようとしたが、あと十センチのところ
で勝手に腕が止まる。

隙間から、背を向けて歩いていく背を眺める。

廊下を曲がる刹那、椎名の右手が、もう乾いてるであろう自身の唇に、何かを確かめる様に触れているのが見えた。

微熱（後書き）

初コメントを頂きまして天にも上る喜びでしたが、残念ながら年齢表示が「14歳」になっておりましたドキ——Σ（。D。;）

感想頂けて有難いのですが、重ね重ね申し上げますがこの小説は15禁です。性描写が無い場面でも教育上不適切な内容なため15歳未満・義務教育中の方の閲覧を固くお断りさせて頂いております。

今回感想頂いた方。本当にごめんなさい。

という事で、キーワードに「教育上適切な事ひとつもなし」と「15禁」を追加しました。次回からこのキーワードで検索できますッ

（|| D || ;）オイオイ

でも感想頂けて、少なくとも一人の方には読んでいただいてるんだなッって事で安心致しました。（解析の不具合でずっと読者数が0人だったので不安……）

左肩越しの悪魔

夢を見ていた。

波の音一つ無い、静かなクルーザーの甲板にいる。

目の前に男が一人立っている。

でも俺は男の顔を見ることが出来ない。

短い人生の中で、唯一愛したといえる人。

この人を理由に、どれだけの笑顔と涙が自分の身体を透り過ぎていったらうか。

その人の隣に身を置く事をこの世の全てと考え、今では名を呼ぶ事さえ許されない、自分から一番遠くにいる人と思う。

「おまえの美しさは人を惑わす。もう、俺にもいつにも近づくな」
この言葉が自分の中に反響するのは何度目だろう。

「これは俺が捨てておくよ。朝から――」
突然現れた副担任が、手にぶら下げるビニール袋から鋭いガラスの破片がのぞいている。

それが自分の足だと気付く。

血管が透けるほど白くヌメヌメとした深海魚お尾ひれが、尖るガラスに閉じ込められて、凍っている。

返してくれ！ そう叫びたいのに声が出ない。

「ユーキのことめっちゃくちゃにして…壊して…」

「心も身体もぐちゃぐちゃになるには充分な時間ですよね――」

どこかで聞き覚えのある声と共に、袋の中のガラスに細かいひびが入り砕けていく。自分の足首から海水が溢れ出す。

廊下を歩いていく椎名の背を追う。

海水が滴るビニール袋を返して貰わなくてはいけないと思う。
突き当たりで曲がった椎名を追って、奥の廊下を曲がる。

裏口の前に立って、携帯をいじっている落ち着いたスーツの眼鏡
をかけた男がいる。

とてつもない恐怖が全身を襲う。

見れなかったはずの、眼鏡の奥の瞳と目が合う。

それはいつか見た深海魚の目だった。

光の反射しない真っ黒な瞳。

冷やりとした海上の空気に、再びクルーザーの甲板にいることに
気付く。

前に立つ深海魚の目をした男が笑う。

「こんな所で何をしている？ 早く深海に戻らないと爆ぜるぞ」

眩しい。俺は光から逃げ、倒れこむように、波のうねりの中に落
ちる。

でも既に光にあたった俺の白い肌は、ピキピキと細かいひびが入
り、中から小さい泡が漏れ出す。

「ユーキのことめっちゃくちゃにして…壊して…」

「心も身体もぐちゃぐちゃになるには充分な時間ですよね——」

嫌だ。壊れたくない。深海に帰らしてくれ。

海の底に引きずられるように沈む身体は、バラバラに割れていき、
ガラスの欠片になる。

「これは俺が捨てておくよ」

駄目だ。捨てるな。俺の身体なんだ。

自分の身体はもう物体ではなく、沢山の泡の集まりになっていた。
海の揺れに乗って、俺の身体だった泡が四方八方へ離れていく。

遠くで自分の声がする。

「ようこそ深海へ。もう明るい水面には戻れないよ」

いつのまにか半分開いていた目から、熱い海水が頬を伝った。

寝返りをうつと、部屋は太陽の光で明るかった。

まだ目の周りが熱い。

一年以上かけて、やっと忘れられそうだと思っていた人が夢に出現した事を思い、落胆する。

毎晩悪夢にうなされて眠れない夜が続き、導眠剤に頼っていた頃に逆戻りするのかと不安になる。

あの薬まだ残っているだろうか。

横になったまま携帯を開くと、二件のメールが来ていた。

一件は野木から体調を心配するメール。

もう一件は……やはりシノではなく、椎名篤樹。

『昨日買って行った食事、冷蔵庫にまだ入ってるから食べろよ』という、母親のようなメールだった。

野木に無事に生きてる事と、今日一日休む内容のメールを返した。副担任には、いろいろ悩んだ末、何も返信しなかった。

冷蔵庫の袋を開けてみると、中は幕の内の様な弁当と、フルーツの詰め合わせのパックだった。

コンビニで買ってきたと思っていたのに、ちゃんとした料亭の品らしき物が出てきて驚く。

やはりキングに関わりがあるだけで、手を伸ばせば美味しい料理にあり付けるのだろうか。

キングと椎名がどんな生活をしているのだろうと一瞬考えたが、底の深さに怖気づいてやめた。

昨日椎名にキスした自分の奇行思い出し、脳ミソが沸く。本当に何を考えていたのだろう。ずっと前に乾いてしまったっている自分の唇を指でなぞった。

悪夢のせいで精神的疲労が残るものの、体調は回復しており、昨日一日寝たおかげで眠気もまったく無かった。

今日一日だらだらと過ごす事に決めた俺は、シノから借りていた洋画のDVDを見て、やり残していたRPGに手をつけた。

夕方になり、煙草を吸いながら、ボーっとテレビを見ていた。今頃まだ野木達は授業中だろうな。

そんな事を考えていると、携帯が鳴った。表示を見ると、客からだった。

「ユーキ君？」

「好岡さん!？」

久しぶりに聞く声。

「久しぶり。元気だった？」

「ほんと久しぶり! 全然連絡くれないから寂しかったよ——」

嘘ほざけ、接待モードの俺。着信表示見て一ヶ月ぶりに思い出したくせに。

「今晚空いてる? 夕飯一緒にどう？」

「嬉しい! 絶対行く!」

風邪で学校を休んでいる自分の立場を忘れて、突っ走り出す。

「何食べたい?」という吉岡の声に、一回忘れたはずの病み上がりという立場を思い出して和食がいいと答えた。

「じゃあ、吉乃伊の個室予約しとくよ」

これで今晚の夕飯が最高級饅^{はも}会席に決定した。

吉乃伊の食事は申し分無かった。

さすがに敷居の高い料亭だけあって、料理・雰囲気共に最高。病み上がりの高校生を癒すには勿体無い夕飯だった。

やたらと高価な焼酎が出てきたのは、料亭を出た後、なし崩し的にホテルに行くための好岡の策略だったのだろうが、まあ想定内なので、その酌に乗ってやった。

ホテルで何度か身体を重ねた後、車でマンションの前まで送ってもらった。

車から降り、運転席の方に身を乗り出して、いつものように業務終了のキスをする、とお小遣いだと言って一万円札を五枚くれた。

万札をポケットにねじ込む。業務終了後だが、心からの感謝を込めてもう一度深いキスをした。

好岡の大きな手が顎を伝って首筋にふれる。

かなり酒が入っているせいで、気分が良かった。目に映る全ての物がユルユルと揺らいでいる。

ふらつく足で、マンションのエレベーターを降り、自分の部屋が並ぶ廊下に出た。

廊下の壁にもたれ掛っている男が鋭い目をこちらに向ける。

「最悪……」

酩酊している俺は思った事が口から漏れ出す。

それが聞こえたのか聞こえなかったのか、男は壁から背中を離し、こつちを向いて何も言わずに少し首を傾げて、俺を見下ろす。

「キングの買物って暇なんだね——」

まさか椎名が今日も訪ねて来るとは思わなかった。

「風邪ひいてんのに、こんな時間までどこ行ってたんだ？」

静かに問う椎名に、俺は視線も合わせず隣を通り過ぎた。

「椎名さん、昨日詮索しないって言ってなかったっけ——」

いつもならシカトで通すが、身体に入ったアルコールの分だけ口数が多くなる。

「これは自分の体調管理もできない生徒に対して、教師として聞いてるんだ。さっきの車の男は？」

鍵を取り出す俺の後ろで厳しい声が詰寄る。

「お父さん」

適当すぎる返答に、自分でも相当泥酔していると自覚しながら、鍵を回した。

どう考えても、四十前で赤いポルシェに乗ったスーツ姿の男は父親にしては若く見えるし、だいたい高校生の息子をこんなに泥酔させる父親はいない。

ベッドではパパと呼んでいるので、あながち間違いとは言い切れない事だけが救いと言える。

「おまえは自分の父親とディープキスして、金を貰うのか？」

「椎名さん、人のキス現場覗き見る癖、直したほうがいいよ——」
舌打ちをして、吐き捨てる様に言うと、ドアを開けて玄関へ入る。

椎名にキスを見られるのは二回目だ。

まあいい。どうせこれだけ酔ってれば明日には全部忘れてる。

どんな酒でも三杯目を飲んだ後の記憶は、次の日に残さない様に俺の脳ミソはカスタマイズされている。

「他の男と寝る為に、学校を休ませたわけじゃない」

ドアを押さえて後ろに立つ椎名の声が、急に抑揚を消して深みを増した。

ほらまただ。

あの時と同じだ。

『おまえはいつからあの店に出入りしてるんだ?』

クラクラと安定しない頭が、視聴覚室の机の上にプリントが散らばっている映像をロードする。

深海の底深くまで引き摺りこまれそうな、静かでどこまでも響く低い声を耳にするのは二度目だ。

自分が知っている、優しい目をした汚れを知らない教師の声ではない。

純粹に怖いと感じる。

「あの男と寝てきたのか?」

ゆっくりと問う声が後ろから近づく。

身体が凍てつく。

冷や汗が耳の後ろを流れるのがわかる。

生唾を飲む体内の音がよけいに緊張を高める。

背後から椎名の両腕がゆっくりと肩にまわる。ビクリと身体が痙攣して動かなくなった。

左耳に冷たい息を感じる。

後ろでドアが閉まる音。

廊下の電気が締め出され、辺りが闇に落ちる。

「なあ、黛。答えろよ」

闇は人を狂わせる。おかしくする。別の人格を呼び覚ます。

俺が昨日椎名にキスしたように。

この闇は昨日のよりもずっと深い。

この世の者では無い人格を呼び覚ましてしまう。

眠っていないのに、夢を見ている。

闇の中で悪魔に後ろからそっと抱きしめられている。

この闇は深海に違いない。
すごい水圧と冷たさで息が出来ない。

「せ……んせい。やめ……くだ……い」
音を響かせない重たい海水は、精一杯吐き出した言葉をいくつかの泡に変える。

落ち着け。

夢だ。飲みすぎたんだ。

明日になれば、目が覚めれば、全部忘れてる。

悪魔が左後ろから俺の顔を覗きこむ。

横目で見下ろしているであろう左頬が表面温度を下げていき、視線があたっていると感じる。

落ち着け。

明日になれば……

左の肩越しの悪魔が、耳に唇を触れさせ、ゆっくりと囁きかける。

夢が覚めれば……

「どんな事して来たのか……先生に同じ事して教えてくれないか」

……全部忘れてるから。

左肩越しの悪魔（後書き）

長い。無駄に。

でも書き溜めた分なので、こんな時間に更新できましたワア——○

（。・・▽・・。）○——イ♪

最近やっど書き溜めるといいう事を覚えたダメ56。書き溜めるといいう事がこんなに心に余裕を生み出すとは。○（●・ω・○）。。うるうる

でも読み返す時に自分の文章読んで落ち込むのが難点。

ちゃんと読み直せる文章書くか、全然読み直さないか！……勿論後者でお願いします！

甘美な悪夢

また悪夢を見た。

いつものように、光の届かない真っ暗な海の底にいる。

思うように動かない足で重たい海水を掻き分け、何かから必死に逃がっている。

途端に強い力で腕をつかまれ、身体を押し返す水の抵抗を感じながら海底に押し倒される。

背中に当たる平面が冷たくて痛い。

痛みで反射的に開いた口の隙間から、ゴボゴボと大量の気泡を吐き出すと同時に、ひんやりとした海水が荒々しく流れ込む。

口腔が浸水して息が出来ない。

暗闇の中でもがき苦しむ。

冷水に溺れて、意識が朦朧とする。

見えるはずも無い海面を見上げると、ずっと遠くに小さな光がある事に気付く。それも光は一つでは無く、無数に煌き、ランダムに瞬いている。

ここが深海ではなく、夜の海面だと知る。見上げているのは海中ではなく夜空だ。

俺は息を荒げてたまま、水面に身体を横たえ、プカプカと浮遊している事に気付いた。

夜の海の水は俺の冷えた身体より温かく、眠たくなる程気持ちがいい。

波の穏やかなうねりに身を任せると、時々水面の裏側へ僅かに引き込まれ、口内に生温かい海水が浸入してくる。身体の内部に温い水が染み渡り、脊髓を溶かしていく。

耳元で一定のリズムを刻む小さな水音と、全身を隙間無く埋めて皮膚を滑る無数の泡がくすぐったくて心地よい。

ふと自分の身体を見下ろすと、肌を撫で付ける水圧が、海面から伸びる二本の手によるものと見知る。

その透けた腕の持ち主が、この海の分身、この海そのものである事を俺は何故か認識している。

そうだ。俺は海に捧げられた生贄だったと思い出し納得する。このまま海に同化して朽ちていく事を覚悟している。

白く透けた二本の腕は、水面で俺の身体を沈めたり浮かせたりして弄ぶ。

俺は怖がるどころか、その気持ち良さに口元を緩ませ、飲み込めなかった海水が口の端から頬を伝う。

自分の吐息が熱くなっていくのがわかる。

右の太腿の内側がやけにくすぐったいので、首を傾げて見下ろす。海面からヌルリと飛び出した腕が右膝を曲げて持ち上げ、暗色の髪が俺の青白い内股に舌を這わせて舐めている。

月明かりに照らされて浮かび上がる整った表情が知っている顔である事に安心して、また波に身を任せる。

海の分身はこいつだったのか、と生き物のように熱い舌を動かしている柔らかそうな薄い唇を眺めている。あの唇の感触を自分が知っている事を思い出す。

自分の下肢が愛撫されている艶めかしい状況を見ているだけで身体が溶かされて、更に快楽に溺れる。

薄くやわらかい肌を吸い上げていたその顔と視線が合う。

そいつは俺が見ているのを知って、少し唇の端を上げながら目を

細めた。そして挑発するように、横目で視線を合わせたまま白い皮膚に軽く歯を立てた後、ゆっくりと海中に姿を消した。

どこに行ったのだろとぼんやりしていると、また二本の透き通る腕が伸びてきて優しく水中に引き込まれる。

「もっと溶けないと、一つになれない……」

生温かい海水が耳の中に進入してくると同時に、そんな低い声が囁く。

唇にサラサラとした肌が触れるのを感じて、その温もりをもっと吸収したいと思い、腕をまわして舌を這わせた。

さっき自分の太腿にされた様に、吸い上げたり歯を立てたりして感触を楽しんでいると、肌の温もりは消え、代わりに生温かい海水がまた口の中に広がる。昼間の太陽の熱を残した海面の水は、深海の凍えるように冷たい水とは比べ物にならない程早く、身体に染み渡る。

徐々に身体が溶け始めている。

何故こんなに心地よいのだろうと思う。

体温よりほんの少し高い水温に抱かれて、海面すれすれを漂っている。

どんどん身体が溶け出して海と同化していく。身体の内部からとろけるのはこんなに気持ちいい事なのか。

この上、全て溶けてしまつて海の水そのものになったら、どんな悦楽に浸る事ができるのだろうかと期待に酔いしれる。

海水が水没し始めた脳は徐々に電気信号の伝達を停止し、思考を止めて静まり返る。

自分の身体にはもう必要無いと思い、深くまで潜り込んでいた最後の空気を吐き出し、目を閉じる。

すると瞼の裏に、また知っている顔が出現する。

それは自分が生涯をかけて愛した人、もう名を呼ぶことさえ許されない人の顔だった。

誰かが眠っている病院のベッドの前に立ち、とても辛そうな目で、俺を睨んでいる。

ベッドに横たわっているのが誰なのか、俺はよく知っている。

そして次に目の前の人が発する言葉も知っている。

「おまえの美しさは人を惑わす。もう、俺にもこいつにも近づくな」
全てを知っている。

悲しい瞳の訳も、後ろでベッドに横たわる人影の訳も、俺がここに
いる訳も。

全部俺のせいだと。

何故自分は生まれて来てしまったのだろう。それだけが分からない。
い。

許されるはずも無いのに、ごめんなさい、ごめんなさい、と何度
もうわ言の様に口走る。

また海水が頬を伝う。

忘れられると思い込んでいた愛しい人の名を呼ぶ。

「ごめんなさい……許して。……兄さん」

この言葉と同時に、身体を支配していた全ての感覚はぷつりと切れ、浮力を失った身体は自重に耐えれずゆっくりと海の底に沈み始める。

深海に引きずり込まれ、視界はまた元の闇に飲込まれていく。

カタンツ。

小さな金属音で目を覚ました。

自分の部屋のベッドの中で朝をむかえていた。

起き上がって昨日の事を思い起こそうとしたが、ひどい頭痛がして、自分が二日酔いするほど飲んだ事を思い出した。

どうやら好岡に部屋まで送らせたらしい。

先程の金属音は鍵をポストに入れた音か。外から鍵をかけてくれたのだろう。という事は、ついさっきまで好岡がここにいたのか。ちゃんと寝る時用の部屋着に着替えている。

床に昨日の夜着ていた服が綺麗に畳んで置いてあるのを見つけて、ああ見えて几帳面なんだなと夕飯をおごらせたスーツ姿の男を思う。腰から下の痛みは料亭を出て、ホテルに行った証拠だろう。

吉乃伊で飲んだ三杯目の黒糖焼酎以降、キッチリ記憶がない。

記憶がある事といえば、今朝方見た悪夢だ。

ベッドから足を下ろして、俺の脳ミソもついに終わったなと悲観する。

自分の副担任が月明かりの中で自分の内ももを舐めている妖艶な姿が目には焼きつき、自己嫌悪と苛立ちが同時に湧き上がる。

それにしても、なんて気持ちいい夢だったんだろうと一瞬浮かれたが、慌てて下着が汚れていないかを確認した。

幸い心配していた事態では無かったが、そんな事を危ぶむ様な淫らな夢に自分の学校の教師を登場させてしまい、一人羞恥に顔を熱くする。

クローゼットを荒らし、いよいよ本格的に導眠剤を探し始める。

なかなか見つからず、気がつく和学校へ行く時間だった。

二日続けて休んでいるので今日はさすがに休めない。

朝から網膜に焼きついた昨日の悪夢を忘れようと勤めたが、運の悪い事に午前中から数学の授業で副担任と顔を合わす破目になった。椎名の姿から目をそらす事が出来ず、上目遣いで黒板を書く背中を追う。

不定積分の方程式を説明している同じ口で、やわらかくて薄い敏感な肌を吸い上げたり舐めたりしていたと思うと、脳ミソが溶け出てきそうで鼻と口を手で押さえた。

自分が変態だったなんて知らなかった。最悪だ。

ウリで男と寝ても、夢にそういう対象として客が出来た事はなかった。それも客でもない、ただの公務員を淫乱な夢に動員させた。

また月明かりに照らされた整った横顔を思い出して、こんな夢一つに翻弄される馬鹿らしさと、忘れられない悔しさで顔が歪むのがわかる。

まだダイレクトにベッドで交わっている夢の方が若さゆえの要求不満を理由に出来て、自分へのダメージが少なかったのに、と自分の脳ミソを悔やむ。

まさか教え子の夢の中でそんな事をさせられているとも知らずに、椎名は淡々と授業を進めていく。

「じゃあ、次は笹川の後ろだから——黛君か。問題読んで」

夢に出てきた人物の口から突然自分の名前が吐き出されて、我に返った。

俺は慌てて立ち上がり、とりあえず教科書を初めて開いた。

「……す、すみません。……聞いてませんでした」

小さな声で言うと、教室がざわめいた。

学年トップを維持している俺の醜態を初めて目にして、クラス中が驚き面白がった。

俺だってこんな事初めて言ったし、逃げ出したいくらい恥ずかしかった。

椎名は心配そうに顔をしかめたが、特に怒る事もなく、問題は後

ろの席の生徒に回された。

「大丈夫か？」

やっと授業から開放され廊下に出たところを、椎名に呼び止められた。

昨日の夜、水面の上から俺を見つめた瞳に魅入られる。赤い舌を青白い皮膚に這わせながら、横目でこちらを見つめて挑発する。

どれだけ追い出そうとしても、忘れようとしても消えない月夜の情景。

「うっさい。だまれ」

声押し殺すように言うと、椎名の身体を押しつけて廊下を歩く。近くにいた女子がいつもと違う俺のオーラを感じ、一歩後ずさった。

舌打ちをして下唇を噛締める、畜生ふざけんな。

そう思いながら、たった一晚の甘美な悪夢にまた堕ちていく。

甘美な悪夢（後書き）

相変わらず読者解析がずっとゼロ人のまま（；´ ڐ´） 3トホホ・
・いつまで続くんだろうか、この不具合。そして本当に不具合なの
だろうか……Σ（＊。 ڐ。＊）クッハアー！！！

でも、システムが復旧した時に本当に読者数ゼロだと落ち込んで続
きが書けなくなるので、復旧する前に何とか完結させたるか、と思
いますムフツ（ ڐ ． ＊ ）

ということとで平日更新のこの小説ですが、ブログの方は一足先に明
日7月11日の夜9時半に予約投稿という形で、一話進んで公開さ
せて頂きます。ちょっとだけ気になる〜と言う方、もしいらっしや
いましたら明日の夜9時半以降にこちらへどうぞ↓<http://fnol6.blogspot.fc2.com/>

月曜にはちゃんとこちらも更新いたしますので、それからでも充分
と言う方月曜をお待ち下さいヾ（≧▽≦） ウォンツチューー！！

友達の友達

「なあシノ——。客と寝る夢とかって見たことある——？」
吐き出した煙が青空に吸い込まれて雲になるのを眺めながら聞いた。

「は？」

「おい黛。おまえやっぱ熱さがってないわ。なんで学校出てきたんだよ」

屋上といえども絶対学校では煙草を吸わない俺が、一本くれ言い出したのをきっかけに、俺を危惧していた親友二人は顔を見合わせる。

「ユーキ、本当に風邪だったんだね。三木さんと週末デートだって言ってたから……僕てつきりエッチのし過ぎで体調壊したんだと思ってた。ごめん……」

シノは眉をひそめて真剣な顔つきで謝りだした。

そして「食べれ」と言いながらコンビニ弁当から唐揚げを箸で取って、俺の口の前にもってきた。

残念ながら食欲はまったく無い。昨日の饗会席がまだ腹にいる。

「見たことある？」

「え？ ああ、客と寝る夢？」

どうしても答えが聞きたくてもう一度聞いた。

シノは差し出していた唐揚げを自分の口に運びながら「う——ん」と右上を見上げた。

「あるよ。テスト前でウリしてなくて要求不満な時とか——、あとすぐ好みの客と寝た後とか」

「そうか……」

要求不満でも好みの客と寝た後でも無いのになあ、と思いながら、やはり自分の診断結果は変態だと確信する。商売で男と寝る時点で

薄々気付いてはいたが、いざ自分で診断結果を下すとダメージが半端じゃない。

「あつ。さっきの僕じゃなくて、友達の話だけど……」

何かに気付いたように、シノが小さな声でさっきの返答に言葉を付け加える。

いや、どう考えてもおまえだろ、それ。

「いや、どう考えてもおまえだろ、それ」

コロッケパンを食べていた野木が呆れたように俺の思いをそのまま口に出す。

「違うって！ウリしてる友達が前言ってたのを思い出しただけ。僕の話じゃない……」

すねた様に口を尖らしてそっぽを向く。珍しいな、そんな顔。

「じゃあ、友達って誰だよ。バーに来てる奴だろ？ 名前言ってみろよ」

野木がシノをからかいだした。

「知るか！ 友達の友達の話だよ！」

「馬鹿か。小学生かよ……」

「うっせ。金が欲しいくせに怖くて身体売れない奴に言われたくない」

「ああ？」

自分の重症度に落ち込んで聞き流していたら、だんだん二人の会話の雲行きが怪しくなってきた。

気がついたら、シノがダークサイドの方に入れ代わっているし、

野木が上から見下ろすように眉をしかめている。

「金のためとか言って、ただ遊びたいだけの淫乱なガキにどうこう言われたくないね」

野木の一言にきれたシノがゴミの袋を地面に捨てて、立ち上がる。初めての展開に俺は慌てふためいた。

いつもなら、副主将としてクラブをまとめている野木がこんなに

人に絡んでいく事は無いし、シノだって客商売が長いのだから、かわれてもサラリと受け流すくらいの事はする。

自分が始めた会話からこうなった事に少し責任を感じながら、止めに入った。

「おい！ やめとけ二人とも。野木も大会前からってイライラしすぎだ。シノも言っている事と悪い事がある。野木に謝れよ」

「黙れよ、ユーキ。お前こそガキみたいに失恋忘れるために身体売ってるくせに、偉そうにすんな」

いつもとは違うシノの低い声と、人を見下す冷たい眼差しが俺から言葉を奪う。

だいたい、シノの言う事は何も間違っていないので、その通りだと沈んだ。

「お前が黙れシノ。悪い、黛。コーヒー買ってきてくれ」

二人にしろという事だろう。野木がわざと明るく言い、財布を取り出した。

「でも……」

俺に責任が無いわけじゃない。

「おまえ病み上がりなんだから、面倒な事に巻き込まれんな」

笑って野木は俺に千円札をつかませた。

「わかったよ。でも野木も大会前だからちよっとは考えろよ……」

そう言って屋上を後にする。

野木のブラックコーヒーを買い、昼休み終了ギリギリまで時間を潰して、再び屋上のサビた扉をあける。

「じゃあ放つとけよ！！」

二人がいるはずの貯水タンクの裏から怒鳴り声が聞こえて、シノが早足でこちらに歩いて来た。

そのまま俺と目も合わせず、すごい音を立てて扉を閉めて出て行った。

あのシノを本気で怒ったらどんな恐ろしい人格になるのだろうかと思っていたが、結果は野木の言ったとおり。潤んだ瞳をした、小学生のように幼い表情のただの菅原志乃だった。

「俺が休んでる間に何かあった？」

コーヒーと釣銭を野木に渡しながら聞いた。

「まあ、いろいろと。ややこしいから黛は首突っ込むな。おまえもいろいろ大変みたいだし……」

そう言うとき野木は俺を見ながら笑顔で自身の首元を、人差し指でトントンと叩いた。

俺が自分の胸元に目をやると、制服の第一ボタンが開いていた。どうやら好岡に付けられた情痕が見えているらしい。

痕は付けない約束だったのに、と思いながらボタンを留める。

それにしても、どれだけぼんやりしているんだ俺。こんな情痕が万が一、三木にでも見つかることやこしい。

まあ週末までには内出血の一つくらい消すさ。

少し口の端を上げたところで、授業の始まりを告げるチャイムが鳴った。

週末、予想外に三木から会えないというメールが来た。

一瞬もう飽きられたかとヒヤリとしたが、理由を聞くとサークルの合宿だということで、精一杯拗ねて寂しがる内容のメールを送り返しておいた。

今のヒヤリを忘れないためにも、いつ三木に飽きられても大丈夫なように他の客を捕まえる決心をして、この週末の夜はDEEP BLUEに入り浸る事に決めた。

土曜の夜にDEEP BLUEの扉を開けると、週末の割には人が少ない気がした。

カウンターの中に吉野を見つけ、いつもの『適当に美味しいやつ』というカクテルを作ってもらおう。

店内を見渡すと、あれ以来学校で言葉を交わさなくなった野木とシノの姿は見当たらない。

しばらくスツールに腰を下ろして、ある程度店が混み合うまで、カウンター越しに吉野と話をしていた。

一時間程して、店内を見回すとようやく賑わってきている。

さて、そろそろ獲物でも探すか……そう考えていると、吉野が小さく「仕事に戻るね」と言い残し奥のキッチンへ消えた。

その消え方が少し不自然に感じたが、入れ替わりに隣に座った男の姿を見て納得がいく。

「黛。ちよつといいか？」

変な悪夢にうなされて以来、ろくに顔を合わせれなくなった副担任が真剣な面持ちで隣に座る。

この一週間、俺の様子がおかしいと思ったのか、事あるごとに声をかけて来るのだが全て無視している。

今晚も例外では無く、シカトを決め込んでスツールを立とうとした。

「話したくないのはわかってる。でも、ちゃんと謝りたいんだ。その……この前の事……許してもらおうとは……」

「この前？ ああ。授業中に俺が問題答えられなかったやつ？」

椎名の顔が曇った。

「別に気にしてないからいいよ、あんな事。俺がボーっとしてたのが悪いし。教師だからって、いちいち生徒の体調不良を気にしながら問題当てる必要ないでしょ？ 椎名さんが謝る事無いよ。」

そんな理由で避けてた訳でも無い、とまたあの甘美な悪夢が脳にリロードされて少し眩暈を覚える。

こんな事を謝るために、一週間俺に声をかけ続けたのかと思うと、生真面目を通り越して本当にバカじゃないだろうかと一瞬自分の副

担任が心配になる。

「もう俺行ってもいいですか？ キングの買い物が隣にいと、客が寄って来ない」

何故か啞然としている椎名を放って、場所を換えようと自分のカクテルを手に取った時だった。

「兄さん……」

背中の方から、か細い女の声があった。

振り返ると、それは女ではなかった。

まだ声変わりもしていない幼い印象の少年。

その不安げな顔が、いつも悪夢で見る病院のベッドで横たわった少年の横顔に似ていると思った。

友達の友達（後書き）

次回の話はちょっとしたターニングポイントなので少し長くなります。

週末に予約更新したせいでブログの方では一話早く公開していますので、気になる方はよろしければ↓<http://fnol6.blog54.fc2.com/>

読者数が不具合で把握できないため、どれくらいの方に読んで頂いてるのか謎です。・。（ノ、）・。。

また、話別の読者数で各話の反応なんかも確認できずに溜め息もんです。本当に読んでくれている方いるのだろうか。下キ（＊。）。

＊）下キ

「目通してるよ☆」という方、一言でもコメント頂けると天にも上る勢いで喜んで、次話ががんばれます。

デジャビュ

「ゆきにい……」

その懐かしい響きを口にした少年が、一年以上顔を合わせていない血の繋がらない弟だと気付くまでには、少し時間がかかった。

最後に顔を見たのは、病院のベッドだった。

あの時眠っていた幼い表情がまだ少し残るものの、成長期の少年は自分が思っていた以上に一年でしっかりと存在に成長していた。

「和斗^{かずと}。おまえ……こんな所で何してるんだ」

目を潤ませながら不安でいっぱいな面持ちの少年は、混み合うバーの中でそこだけ白く発光するように浮いている。

「ゆき兄のこと見かけたって友達に聞いて……。すごく探したんだよ？ ……龍斗^{たつと}兄さんも全然居場所教えてくれないし……」

一番聞きたくない名前が出てきて急に息苦しくなった。

「おまえみたいなガキが来る所じゃない……。さっさと帰れ！」

「ゆき兄だってガキだろ！ 三つしか違わない」

再会を喜ぶどころか帰れと言われた事に傷ついたのか、和斗は更に泣きそうな顔で俺を睨みつけた。

こんな場所に中学生がいていいはずが無い。

「ねえ。俺の話聞いてる？ さっきから夕飯誘ってんだけど？」

こうやって、明かに未成年だと知っていてわざと近づいてくる輩は、このバーにいくらでもいる。

よりによって先程から和斗の横にしつこく纏わり付いているのは、このバーで危険度ナンバー2の男だ。

ずっと誘いを見殺していた北川に対する付けがこんな風にまわってくるとは思わなかった。

「北川さん！　こんな奴のどこがいいんだよ。この前俺を誘ってくれたのに、もう気移りしちゃったわけ？」

俺は和斗の肩に触れようとしていた北川の手を掴んで、なんとか和斗から話をそらせる。

こんな危ない男に連れて行かれる前に、何とか和斗をこの店から追い出さなければいけない。

「何だよユーキ。おまえが無視するからこうやって他あたってんだろ！」

「無視なんてしてないよ。さっきからずっと見てるのに、北川さん全然気付いてくれないんだもん」

ホスト風の安っぽい面は今日初めて見るが、とにかく和斗から興味をそらせる事が最優先時効だ。

「……じゃあ今晚、相手しろよ」

気まずそうに言う北川が睨んでいるのが俺じゃなく、背中の後ろの椎名である事に気付く。

そういうことか。

いくら和斗のためでも、自分の身を危険にさらさずに済むのならその方がいい。

北川の勘違いにあえて乗っかるように、椎名の腕に手を添えて言う。

「ごめん。今この人と交渉成立しちゃったんだ。北川さんが悪いんだよ？　俺が視線であんなに誘ったのに気付いてくれないから」

勤めて拗ねた表情で言った。

しかめ面をした北川は舌打ち一つして「じゃあ明日でいい……」と、渋々身をひるがえした。

「ゆき兄……。交渉って何……？　相手って……何の相手するの……？」

消え入りそうな弱々しい声に目を向けると、和斗が絶望した顔をして唇を微かに震わせている。

「それぐらい察しろ。行こ！ 椎名さん！」

冷たく吐き捨てて、椎名の腕を取り無理やり奥の廊下へ引っ張る。

ちょうどウェイター姿の野木がスタッフルームから出て来たので捕まえる。

「おお、ユーキ」と状況が飲み込めていない野木は、椎名を見つけ嫌そうに顔を歪めた。

急いで財布から一万円を掴んで詰め寄る。

「悪い。あいつ俺の弟なんだ。駅まで送ってやってくんない？」

こっちに向かってこようとしている和斗を指差して、早口で頼んだ。

「えっ？ 俺今出勤して来たところ인데……。弟だったらお前が送ってやれよ」

「それがちよつと事情があつて無理なんだよ。頼む！ お前しか頼む奴いないんだ！」

この店から出ても、こんな時間に夜の街を歩かせるのは危険だ。

「まあ、今日客少ないから大丈夫だとは思うけど……。いいよ、金とか。いらね」

切羽詰った俺を見て折れてくれた頼りがいのある親友に、クチャクチャの万札を無理やり握らせた後、もう一度椎名の腕を取り奥へ引っ張って行く。

「先生。悪いけど今だけ話し合わせてよ。生徒のピンチを救うのも教師の役目だろ？」

息をあげながら、廊下を曲がった所で足を止める。

焦って余裕の無い俺とは逆に、椎名は呆れたような目でさつきから俺を見つめている。

「先生だって、職員会議で自分の名前挙がるの嫌だろ？」

「それ、脅迫か？」

そんな事をすれば、逆に自分の売春を学校にばらされても仕方ないが、この優しい副担任が絶対それをしない事を俺は知っている。

「そうだよ。キングの買物だって学校にばらされなくなかったら、俺に合わせてくれ。今だけでいいんだ」

真剣な眼差しで見上げると、椎名はため息を漏らした。

そのため息をOKと受け取った俺は、曲がってきた廊下に目をやり、静かに耳を澄ませる。

案の定「離して下さい！」という高い声と、野木の「関係者以外は入るな！」という声が揉めている。

和斗の諦めの悪さは嫌という程知っている。

「あっ！ おいっ！」という声と共に、軽い足音がこちらに走ってくる。

俺はしかたなく覚悟を決めて、深く息を吐き出した。

足音が角を曲がって「ゆき兄！」と呼び止めるのと同時に、目の前の空いている個室へ椎名を引っ張り込み、中からドアを閉めた。

靴音が一度止まってからゆっくり向かって来るのを聞きながら、椎名をソファに座らせて見下ろす。

ドアの前で足音が止まったのを確認して、椎名の肩に自分の腕を回し、太腿に乗るようにして向かい合わせに身体を寄せる。

「先生。……ごめん」

間隔二十センチで黒い瞳を覗き込み、いつか一生口にしなないと思った言葉を口にする。

ドアが開く音と共に、啞然として薄く開いた椎名の口に自分の舌を深く滑り込ませる。

自分とは違う煙草の味を、義務的に舌で一度掻き混ぜる。

「ゆき兄……どうして……」

ドアが開いてから、小さな声が部屋に反響するまでの時間が永遠

のように長く感じた。

あまりにも音を捉える事に神経を注いでいたので、椎名がどんな表情をしているか分からない。

唇を離し、顎に滴った唾液を腕で拭って、ゆっくりと首だけで振り返る。

何を言ったらいいか分からず、呆然と口をパクパクして立ち尽くす可愛い弟がいた。

汚れを知らない純粋な少年。

和斗は、光を乱反射させる眩し過ぎる水面から、まるで覗き込むようにこちらを見つめている。

それはまるで、今まで元気よく明るい浅瀬でサンゴ礁に戯れて泳いでいた熱帯魚が、深海の闇を初めて目に映した様だった。

なんだろう、この情況。前にも見たな。

デジャビュだ。

ダメだ。

和斗。お前はこっちに来ちゃいけない。

日のあたる世界へ、明るい水面へ戻れ。

「ゆき兄……俺と一緒に帰ろう……こんな所にいてちゃダメだ……」
俺の思惑通り、呟く声がさっきまでとは比べ物にならないほど力を失っている。

「邪魔なんだよ。さっさと消えろよ」

深海に迷い込みそうになった可哀想な少年を威圧するように、これ以上ない冷たい声で仕上げの一言を放った。

自分の無力さを知ったように、和斗は落胆して視線を落とした。

「おい。もう気は済んだだろ。いい加減出ろ」

野木の低い声と共に横から出てきた大きな手に腕を掴まれて、和斗の身体が力無くよろめく。

「……木村先生が……ゆき兄の事すごく心配してた。あんなに症状が重かったのに、診察来なくなつて、薬急に止めて大丈夫かつて……。精神科の薬は、急に止めたら、症状が逆に重くなるから、ちゃんと飲まなきゃいけないんだよ……。ゆき兄疲れた顔してるけど、薬飲まなくてもちゃんと寝れてるの？ ……俺は何もしてあげられないけど、木村先生は良い先生だから、何かあったら絶対、先生の所で診てもらわなきゃダメだよ……」

急に思いつめた様に視線を上げて、消えてしまいそうな声で途切れ途切れに言う。

震える唇に涙が伝う。

野木の手腕を引かれて、和斗は俯いたまま姿を消した。

俺はそのままの体制で、消えていく靴音に耳を澄ませていた。

「悪かったな、先生。変なことに巻き込んで」

そう言った途端、強い力で抱きしめられた。

耳の横に來た椎名の顔からくぐもった声がする。

「さっきの話。本当なのか？ 精神科の薬飲んでるって」

真剣で、独り言のような声を聞き流して、何とか誤魔化すような事をいう。

「なんだよ、先生。もしかして、さっきのキスでその気になっちゃった？ お金さえくれたら寝てもいいよ。先生俺の好みのタイプだし」

椎名が身体を離して俺の顔をキッと睨む。口にしなくても怒っていると分かる。

「そのかわりキングには内緒だよ？ 俺殺されちゃうから……」

さっきの質問から出来るだけ遠ざかりたくて、わざと笑って怒らせるような事を言った。

次の瞬間、また強い力が身体にかかって、視界がひっくり返った。俺を見下ろす椎名の背中に、天井が見え、ソファーに押し倒されたと気付く。

まさかさっきの冗談を本気にするとは思わなかった。急に全身が発熱し始める。

上から椎名の薄い唇が降ってくる。

今日二回目のはずのキスが、何故か先程とは全然違って官能的だった。

唇の隙間から侵入してくる舌が、まるで生ぬるい海水が口内に溢れてくるようだった。

口の中を掻き混ぜられる事が気持ちよくて、身体に海が染み込む感覚に、いつかの悪夢がよぎる。

またデジャビュだ。

翻弄されている視界に、天井の落ち着いた小さいシャンデリアが浮かぶ。

ああ、あれもデジャビュだ。

でも垂れ下がったキラキラと光るガラス玉を数える事も出来ないくらい、唇から伝わる熱に夢中だった。

目を閉じて、不自然に光るプラスチックの飾りなんかよりずっと美しい満天の星空を思い出す。

だめだ。溺れる。

「あっ……」

急に唇が離れたので、あまりにも名残惜しくて声が出た。
学校の副担任を前に、自分の今の物欲しげな顔を想像して、顔に熱い血が上る。

「先生……キス上手なんだね。……もしかして元遊び人？」

なんとかこの状況から、意識をそらしたくて小さく言葉を漏らした。

「あの夜キスしたのは……」

なぜ急に見舞いに來た夜の話をなんてしだすんだろう。

そうじゃなくても、この先の事を考えるとじっとしていられなくて、椎名の言葉を遮る。

「先生、ここ。キスマークついてるよ……キングってエッチ上手い？」

すごい音量で体内にこだまする拍動を気付かれないように、とにかく適当に言葉を続ける。

さっき気付いた小さな内出血に人差し指で触れると、椎名の首筋の熱さに更に鼓動が速まる。

「これは……。やっぱり、覚えてないのか……」

覚えてないって何の事だろう。

寝顔を襲ったキスの事なら、自分から仕掛けといて忘れるはずが無い。

「いや。何でもない。忘れてくれ」

真剣だった椎名の瞳が揺れて、すこし気まずそうな表情をした。

そうやって、俺の上から退くとドアに向かって歩いた。

続きがあると期待していた俺は、やっぱりからかっただけなんだと、ドキドキしていた自分を責めた。

「今晚はもう帰れ。あと、明日さっきの北川って奴と寝るのはやめとけ。月曜の数学、抜き打ちでテストするからな。いくら主席でもテスト欠席だと単位ないぞ」

ドアの前で振り返って軽く言い、ポケットに手をつ込んで廊下へ出て行った。

部屋に残された俺はソファアーの上で動けずにいた。

『いや。何でもない。忘れてくれ』

あの夜のキスをだろうか。

それとも今のキスをだろうか。

どっちにしても無理だ。

忘れられるわけない。

遅いよ、先生。

もう遅い。

だって、気付いてしまった。

愛欲という底なしの暗海に、ずっと前から自分が溺れていたことに。

デジャビュ（後書き）

長いΣ（＊。ㄥ。＊）クッハアー！！！！

一応折り返し地点なので……にしても長い。

長々とした文、読んで頂きありがとうございます。

もう一つお知らせとしては、次回もやや長です（〃▽〃）ポッ

勢いつけて来週中の完結を目指しますので、お付き合い下さいますと有難いです（。▽。）ラヴィー！！

受話器の向こう

「もしもし。黛か？」

「……誰？」

「副担任の声忘れたか？　ちゃんと名前表示されてるだろ」

日曜の夜に鳴った携帯は、今日一日俺の脳で何度も残像になって現れ続けた人の声を出す。

「あ、ああ、先生か。眼鏡かけてなかったから見えなかった……」
ベッドからゴソゴソと這い出て、テーブルの上にある眼鏡をつかむ。

「お前本当に目が悪いのか——。俺に顔ばれない無い様に、わざわざ学校でだけかけてるのかと思ってた」

「どうでもいい時は眼鏡なんだよ。ウリする時はコンタクト。ほら……眼鏡だとベッドで、いろいろ邪魔だろ……？」

昨日好きだと気付いた人間に言う言葉では無いが、予想外の電話で舞い上がり思考が飛んだ。

「……。お前今晚はちゃんと家にいるのか？　まさか今ホテルのベッドで、あの北川って奴の隣なんて言うんじゃないだろうな」

「そんな事聞かためになんかわざわざ携帯かけてきたの？　心配しなくてもあんな危ない奴に近づかないよ」

その心配が教師としての勤め以外に何の意味をはらんでいない事を知っていても、少し嬉しい。

「そうか。ならいいんだ。明日本当に抜き打ちするからな——早く寝ろよ。じゃあ切る……」

せつかくの声を聴けたのに、いきなり訪れようとする別れに俺は心底焦った。

「あっ！　まっ！　ちょっと待ってよ」

「なんだ？」

「え——、あ——つと。あ、そだ！　これ何て読むの？　先生の、

椎名先生の下の名前。……アツキ？　タカキ？」

ずっと気になっていた事を聞いて、話を延ばす。

「アツキだよ」

今日何度も思い起こした優しい声。

「そっか……アツキか。じゃあアツキ先生か……」

独り言のように好きな人の名前を呟き、のぼせる。

乙女か俺は。

「どした？　寝惚けてるのか？」

「寝惚けてないよ」

「そうか。じゃあ早く寝ろよ。切るぞ」

させるか。

「ねえ、先生。なんか話してよ。俺が眠くなりそうな事。薬飲んだんだけどまだ眠くなくてさ」

朝からクローゼットの中身を全て出して見つけた、残り少ない導眠剤を、ベッドに入る前に口に放り込んだ。

昨日和斗によってカミングアウトされたばかりの導眠剤の存在を自分の口から吐いてしまったせいで、案の定椎名の声が少し曇った。

「薬、効かないのか……。話って言われてもなあ。じゃあ、お前が授業中全然聞いてなかった不定積分の方程式だな」

「嫌だよ。そんなの寝れない」

「いいのか？　明日テストに出るぞ？」

本気で生徒の眠気を不定積分で誘おうとする数学教師に呆れた。

「俺学年トップだよ？　じゃあさ——椎名先生はどうして教師になろうと思ったの？」

とりあえず、相手の事を知る第一歩として典型的の質問。

今日一日椎名の事が頭から離れずにいたが、あまりにも自分が持っている好きな人の情報の少なさに、しょうがなく持ち合わせた少ない幻影を何度も繰り返し再生する羽目になった。

「そういう話か……。別に話すほど大した理由じゃないしな」

「いいじゃん。それ聞かないと寝ない」

少し前まで毛嫌いしていた人間に対する態度とは思えず、自分の我侭振りに一人失笑する。

「……。昔偶然出会った奴がさ、人生なんて忘れるためにあるんだ、みたいな事言うから……そうじゃないって証明して教えたかったんだよ。自分自身がちゃんとした人間になって、そいつに尊敬されるような教師になって、人生は忘れないためにあるんだって教えてやれば、そいつはもっと綺麗で美しい人間になれるって思ったんだ。少しでも、そいつに光を見せてやりたいってな。どうだ？　興味無い話で眠くなったら？」

椎名らしいと思った。

「なんない。本当に大した理由じゃなくて眠気飛んだよー。なんだよ、それ。女に堕ちて教師目指したのかよ」

椎名に救ってやりたいと思われた綺麗な女の形が浮かび、少し嫉妬する。

「ほっとけ」

椎名の後ろで『アツキ……』と遠くから呼ぶ声がした。

声を聴けて浮かれていた気分が一気に底深く沈む。

キングの声だろうか。少し背筋がヒヤリとする。

俺は電話が嫌いだ。

隣にいるように近くで声がするのに、実際は受話器の向こうで全く俺の想像のつかない世界が広がっている。

相手の背中からする小さな音や声が、ふとした瞬間近いと錯覚していた存在をグッと遠くへ連れ去る。

隣にいるのは声だけであって、その人の思いも温もりも、受話器の向こうの世界の所有物なのだと言い聞かされる気がする。

「そろそろ切るぞ」

名前を呼ばれたせい、早々に電話を切ろうとする。

やっぱり近くに居る様で遠い。

「あ、あのさ……。先生のこと電話でだけアツキ先生って呼んでいい？」

「なんだそれ。くすぐったいからアツキでいいよ。教室で呼び捨てにしたら単位は無いと思えよ」

「じゃあ、ア、アツキもさ、俺の事下の名前で呼んでもいいよ」
「ユキヤか？」

自分の名前を知ってくれていたことに、こんなに喜びを感じた事はない。

頬が熱くなっていくのが分かる。

真っ赤な顔で火照る自分を想像して、電話で良かったと、電話嫌いの矛盾した考えがわく。

「あ、うん。ユキヤ。客とかからはユーキって呼ばれてるけど、本当はユキヤなんだよね……」

恥ずかしくて、熱い頬に掌をあてながら呟く。

「じゃあユキヤ。いい加減寝ろ」

「うん……。おやすみ。先生……。じゃなくてアツキ……」

「ああ、おやすみユキヤ」

大好きな人の新しいパターンの声色を脳にセーブして自然にニヤける。明日の朝までに何度この言葉を頭の中でリロードするのだろう。

一度電気信号に変換されてから俺の耳に届いている事が悔やまれてならない。

「あ！　ちょ、待って！　ストップ！」

「何だ、またか？」

慌てて携帯画面を睨み、通話中録音を開始するボタンを押す。

「ん……。はい！　いいよ。もう一回。」

録音中であることを示す、緑色の棒グラフが横に伸びていく。

「おやすみ。先生」

「おやすみ。ユキヤ」

相手が切ったことを確認してから、自分も電話を切る。

録音できているか確認してみると、ちゃんと自分の声に続いて一言だけ、好きな人の声が脳を溶かしそうなフレーズを口にしている。やばい会話を録音して人を脅迫する時にしか使わないだろうと思っていた通話録音機能に自分が救われるとは思わなかった。携帯を閉じてため息をつく。

今日一日俺はベッドに沈み込んで悩んだ。

ベッドの上が深海の底のように冷たく、現実に身体を存在させるためだけに一日浅い呼吸だけをその上で繰り返した。

この椎名に対する気持ちをどうするかではなく、どうやって忘れるかをだ。

ずっと昔に同じように恋に堕ちた時の事を思う。

自分が相手を好きになってしまった事で、自分も、好きになった相手も、その周りの人間まで傷つけて、結局俺にとっては世界が一度終わったのと同じくらい最後には何も残らなかった。

それどころか世界は終わったまま、ずっと何も無い暗闇の中で苦しみと悲しみに悶え苦しみ、葉の力に頼らなくては生きていけない程崩れ落ちた。

俺にとって本気の恋愛は苦しみと少しの浮つきとその後の世界の終焉の前兆でしかない。

電話一つに浮ついた自分を呪う。

喜んで海底から浮けば浮く程、次の波で沈み込む闇は深い。

あの時も叶う訳がないと分かっていて、夢を見た。

同性だった以前に、恋愛対象としてはタブーな人間を好きになっ

てしまった。

今回も同じだ。

同性以前にキングの買い物が好きになるなんて、どうかしている。

また浅い息を吐き出し、冷たい海底のベッドに身体を沈める。

もう一度携帯を開けて再生ボタンを押す。

目を閉じる。

「おやすみ。ユキヤ」

海底に初めて響く温かな声が、全てを緩和する。

噛んだ親指の爪に、微かに熱の混じった冷たい息がかかり、こんな身体でも生きているのだと久し振りに実感する。

少し身体が浮いた気がした。

翌朝、あと五分で校門という所で、また携帯が鳴った。

椎名かと思ってドキドキしたが、以外にもシノだった。

「もしもし？ ユーキ？ 今いいか？」

「どうしたんだよ。こんな朝早く。電話してくるなんて珍しいな」
いつも基本メール主義のシノは、いつも通りの明るい声だ。

その後ろから、ざわざわと若い声が無数に響いている。

「なんだよ、今学校か？ 俺ももう着く」

言ってる傍から校門が見えてきた。

「ちよつと謝りたい事があってさ――。この前ユーキにひどい事言
っただろ？ ガキみたいに失恋忘れるために身体売ってるくせにつ
てさ。僕ユーキがどれだけ苦しんだのか知っててあんな事……ごめ
んね。ユキヤ」

「なんだよ。そんなことか。いいよ、本当の事だし気にしてない。

それより野木には謝ったのか？ あいつにこそちゃんと謝れよ」

「いいんだよ。あいつは……。もうそんな事……。覚えてもないよ」
シノの声が強い風の音でかき消される。

「とりあえず、もう校門見えたし、話は学校でな」

そう言って携帯を閉じ、足を速める。

そういえば、シノの奴、ユーキじゃなくてユキやつて言ったな。
それぐらいの事だった。会話で気になった事といえよ。

俺は電話が嫌いだ。

隣にいるように近くで声がするのにな、実際は受話器の向こうで全く俺の想像もつかない世界が広がっている。

相手の背中からする小さな音や声が、ふとした瞬間近いと錯覚していた存在をグッと遠くへ連れ去る。

隣にいるのは声だけであって、その人の思いも温もりも、受話器の向こうの世界の所有物なのだと言い聞かされる気がする。

受話器の向こうに、俺は行けない。

その日初めて目にする純白は、自転車置き場のトタンの屋根からヌツと飛び出た、深海魚のような肌色の細い腕だった。

トタン屋根からぶら下がる制服を着た足から落ちた靴が、俺の足元に転がっている。

その日初めて目にする親友は、学校の屋上から飛んで、自転車置き場のトタン屋根の上で横たわっていた。

その日初めて目にする真紅が、錆びたトタンを伝い、コンクリートの地面に落ちた。

受話器の向こう（後書き）

ちよつと変な気起こしてレイアウトを変更してみました。一応深海をイメージしたのですが：どんなもんでしょうか？？

更に更に！拍手タグやHPへのリンク等も調子に乗って付けてみましたのでよろしければゞ（ $\geq \equiv \nabla \leq$ ）ウォンツチューー！！

コメント頂けて天にも上る気分なので、週末も頑張って更新しようかと更に調子に乗っておりますΣ（＊。㐤。＊）クツハアー！！！！

シノ

どうすれば良かったのだろう。

また無限ループに陥る。

あの時電話を切らずにいれば。

あの時もっとシノの話に耳を傾けていれば。

あの時風の音でシノが屋上にいると気付いていれば。

何度考えてもその全てが自分には不可能だったと結論付く。

あの会話に微塵の違和感すら感じなかった自分には。

何度頭でシミュレーションしても、飛び立とうとするシノの肩を
掴めずにいる。

でもシノと最後に話したのは俺だ。

最後の最後に止めてやれたのは俺だった。

じゃあ、どうすれば良かったのだろう。

やっぱりダメだ。

どうやっても屋上から踏み出すシノの後姿に手が届かない。

シノがどんな理由で自殺しようとしたのかも検討がつかない。

野木と喧嘩はしていたが、そんな理由であのシノが死のうとする
はずがない。

よく考えてみれば、自分はシノの何だったのだろうと思う。

親友とは名ばかりで、シノの事を何も知らない。

同じ身体を売る者としての親近感から、俺が一方的に友達だと思
っていたのだ。

本当に親友だと思っていたのなら、自殺するくらいの悩み事を相談しないはずが無い。

あれから、どんな風に授業を受けて、学校で一日を過ごしたのか覚えていない。

気がついたら、シノが救急車で搬送された病院に着いていた。

エントランスの案内を見て集中治療室の場所を確認し、エレベーターに乗り込んだ。

こんな所に出向いても、身内でもない自分がシノに会える訳では無いのは分かっている。

エレベーターを降りて、廊下を見渡すと知った顔を見つけた。隣の担任の吉永だ。

向こうも制服姿で駆け寄る俺がすぐに目に付いたらしく早足で寄ってきた。

「吉永先生！ 菅原君は……」

「黛君、落ち着いて。菅原君は今ここにはいないの」

「それって、どういう……」

最悪の事態が浮かぶ。

病院へ運ばれた時、まだ息があると聞いていたのでそれに希望をかけていた。

「今ね。菅原君はオペ室で手術中なの」

「オペ室……」

何の手術か想像もつかないが、とにかくまだシノがこの世にいる事に安堵する。

「ね？ 望みが無いわけじゃないのよ。でもまだ手術に時間もかかるし、家族の方も来られてるから心配しなくて大丈夫。今日はもう帰りなさい」

「望みが無いわけじゃないって……」
望みがあるわけでもないのか。

吉永にエレベーターまで送られ、俺は十分もしない内に行き乗ってきたエレベーターに乗り込む。

一度一階のボタンを押したが、二階にオペ室の表示を見つけ迷わず押した。

二階に降りると、オペ室は何室かある上に、手術中の患者名が掲げられているわけでもないの、途方にくれてウロウロと歩き回った。

一番奥のオペ室がある廊下の突き当たりを曲がって、足が止まった。

オペ室の前の長いすに着物を着た品のある女性が座っている。

女は白いハンカチで鼻と口を押さえているので顔が殆んど見えない。

女の前には若い男が地べたにうずくまり、土下座して頭を廊下につけている。

その男は俺と同じ制服を着ていた。

「俺の……責任です……」

うな垂れて呟くような涙声で、野木だと気付くのに少し時間がかかった。

着物の女は、何も言わずにそっと目を閉じた。強く瞑った睫毛から透明な液体が溢れていて綺麗だと感じる。

その凜とした横顔が誰かに似ていると思った。

俺はその場から何も言わずに立ち去った。

一目散にエレベーターに向かい、何度も下を指す矢印を押して、すぐに開いた箱に逃げ込んだ。

動悸がして息苦しい。目の前がくらくらする。

なぜ野木はあんな事をしていたのだろう。

あの女性がシノの母親なら、一番に謝らなければならぬのは俺だ。最後の最後にシノが声を聴くことを選んでくれた俺なのに。

俺はそんな勇氣もない。

逃げたかった。

とにかくこの場から離れたかった。

酸素濃度が薄れてきているエレベーターの扉が開いたので、急いで飛び降りる。

入れ違いに乗り込んで来た男が「おい！」と言って腕をつかんだ。薄い空気に眩暈を感じながら見上げると、椎名の心配そうな顔だった。

「おい。大丈夫……か？」

「あ……菅原なら今オペ中で……」

「いや、お前がだよ。顔真っ青だぞ」

俺……か。

そういや……俺はどうなんだろう……大丈夫なのか。

急に襲った嘔気に口を手で押さえて、その場にしゃがみこむ。

薄れる視界の中で、駆け寄る看護士の手を振り払う。

とにかくこの病院から離れたい。

「ちょっとは落ち着いたか？」

車の運転席から椎名が俺の顔を覗きこむ。

俺は買って来てもらった烏龍茶の缶を両手で包み込み、俯いたまま震えの残る唇にあてた。

暗い立体駐車場の無機質なコンクリート壁が、白い院内とは違い、

発作後の身体を落ち着ける。

「本当に診て貰わなくていいのか？　せつかく病院にいるんだから……」

全部の言葉が終わる前に、俺は大きく首を振った。

ため息をついた椎名は言葉が続ける。

「車で家まで送るとして。帰ったら、その……安定剤みたいな物は家にあるのか？」

少し考えてから、それにも首を振った。

残り少ない導眠剤は安定剤とはいえない。

一年以上前に処方された精神安定剤は、とっくの昔に底をついていた。

「じゃあ、一昨日お前の弟が言ってた病院に今から寄って、薬貰って帰ろう。平日だからまだやってるだろう」

そう言って、ポケットから車のキーを取り出した。

さっきより大きく首を振る。

「ダメだ。このままじゃお前も屋上から飛びそうな顔してる」

横目で俺を睨んでから、椎名はハンドルの後ろにキーを差し込んだ。

「今朝二年の生徒が屋上から飛び降りたと聞いて、お前の事なんじゃないかと思って、俺がとれだけ……」

そこまで言って顔を歪ませ、後の言葉がエンジン音にかき消される。

「嫌だ。行きたくない」

「ダメだ。我俣言うな」

「嫌だ。……あんな所に……行っても全然楽にならない……」

喉の奥から声を搾り出す。

力が入り震える手に大粒の水滴が落ちて水面をフルフルと揺らす。

「どうしたら楽になれるんだよ……どうやったらここから抜け出せ

るんだよ……どうやったら全部忘れられるだ……。先生教師だろ？
教えてくれよ……。ねえ、先生……」

何年かぶりにガキみたいに嗚咽について泣いた。

もう駄目だ。俺。

「しんどくて……暗くて……怖くて……苦しいよ。……助けて……
先生。……お願い……ねえ、先生……」

椎名の腕が伸びてきて、サイドブレーキ越しに俺の頭を肩に抱き
寄せる。

狭くて暗い車内で啜り上げる涙声と低いエンジン音が轟く。

襟元が俺の涙でぐっしより濡れたワイシャツを震える手で掴んで、
何も考えられなくなった頭を埋める。

先生。

先生。どうして。

どうしてこんなに苦しいんだろう。

どうしてこんなに怖いんだろう。

どうやったらこの深海から浮かび上がれる？

どうやったら明るい水面を見ることができる？

教えてよ、先生。

ねえ先生。

もっと知らない事が知りたい。

もっと見えない物が見たい。

もっと言えない

事が言いたい。

聞きたい事がまだ沢山あるのに、先生
もシノみたいに俺の前から何も言わずにいつか消えるのか？

そんなの嫌だよ。

先生。

答えてよ。

先生。

ねえ

先生。

シノ（後書き）

文章力のなさゆえ、文字列の崩しで主人公の崩れを現すと言う暴挙に出た私Σ（。・D・。）ガビーン!!!!

もう手遅れな自分に合掌Ψ（＊・V・＊）Ψイタダキマシユ♪

拍手設置させて頂きましたら、さっそくカウントが入ってウハウハでございます（。・W・。）ププツ

ちゃんと読んで下さっている方がいるんだな〜♪♪

好き! もう、ほんと抱き締めたい!!! キュピ——（。☆D☆。）——
——ン

深海魚の夢

「では、今回は前とは別の薬を出しておくから。急に止めたりしないようにね。あと――眠る時の薬も必要だよね？」

パソコンに何かを入力しながら、白衣を着た初老の男が優しく尋ねる。

シノの手術が成功して一命を取り留めたという連絡が椎名の携帯に入ってから、シノの命同様、俺も何とか手放しかけた落ち着きを蜘蛛の糸一本で取り戻した。

しかし病院の駐車場の車内で子供のように泣きじゃくったせいで、精神的にも体力的にも疲労が激しく、この小さな精神科の病院に着いた後も放心状態だ。

「黛君？」という声に驚き木村医師の顔を見上げる。

「今日は一人で来たのかい？」

笑みを残しながら、またパソコンに向き直る。

「あ。えっと――。学校の先生に連れて来てもらいました」

魂が抜けきったような自分の声を聞いている。

「そうか。その先生とちょっと二人で話をしたいんだが……構わないかな？」

何を話すのだろうと考えたが、もうどうでも良くなって「はあ」とだけ言った。

内科だったら余命宣告あたりだろうが、ここは精神科なのでそれは無いだろう。

「先生と二人で話したいって」

待合室で座っていた椎名に言うのと、立ち上がり俺の肩に手を置いて代わりに座るように促された。

椎名が診察室に入ってから優に十五分が過ぎた。

患者本人である自分より時間がかかるというのはどういう事なんだろう。

後ろの壁にもたれかかり携帯を取り出す。

携帯の使用禁止と大きく張り紙がしてある前で堂々と電源を入れた。

小さな病院の待合室は診察時間終了十分前で受付の看護師も含めて、俺以外誰もいない。

メールが来ていないかチェックすると、一件の受信が表示された。
『今週末どこ行きたい？』

送信者の三木という名前を見て、ああいたな——そんな奴、とため息をつく。

全てを忘れるためなら、週末派手に遊ぶのも悪くないな。

何も返信しないまま電源を切ると同時に、診察室のドアが開き「
ありがとうございます」——という椎名の声が聞こえた。

会計を済ませる間も椎名は特にいつもと変わらない様子だった。
俺も診察室でどんな話をしたのか聞く気も全く無かった。だいた
い本人に知られたくない会話だから俺を遠ざけたのに、俺が知った
ら意味が無い。

病院のドアを開けて外に出ると、駐車場から駆けてくる姿に足が
止まる。

厄日だ。

診察時間ギリギリに駆け込んで来ようとする少年も足を止めた。

「ゆき兄……」

どうしてこのタイミングなんだ。

神様も友達が自殺未遂を起こした日くらいは、俺をそっとしてお
いてくれるくらいの気遣いがあってもいいと思う。

駆け寄ってきた少年は、俺の両肩に手をやって不安いっぱいの顔で覗きこむ。

「やっぱり体調悪いの？ 目真っ赤だよ？ 木村先生なんか言ってた？」

一方的な弟の質問攻めに、俺は溜め息をついて隣を通り過ぎようとする。

「どうしてコイツがいるんだよ！」

質問事項が終わったと思ったら、次は椎名の姿を見つけて怒り始めた。

和斗はやはりまだ情緒不安定だ。だからここにいるのだけど……。それが自分のせいであると分かっている、その記憶からは目を背けたい。

「あなたも、恥ずかしくないんですか？ こんなに精神的に弱っている人につけ込んで……。金で身体を買ったりして！」

「おい！ やめろ！ この人は関係ないだろ！」

困った顔の椎名に詰め寄る和斗の肩をつかんで、こっちに体を向けさせる。

お前の相手は俺だろ、和斗。

「どうしてこんな奴庇うんだよ！ 兄さん！」

こんな質問一つ、深く受け止めてしまいまともに答える事が出来なかった。

和斗より俺の方がずっと重症だ。

「もしかして……好きなの？」

和斗の声が急に神妙さを増す。

あまりの勘繰りの良さに息を呑む。

「そうだよ！ 好きで好きで仕方ないから、無理言っ隣にいてもらってるんだ。悪いかな？」

こんな形で椎名への気持ちをカミングアウトするとは思ってもみ

なかった。

横目で椎名の表情を見上げたが、前回のシチュエーション同様の状況を逃れるための嘘だと思っっているのか、無表情だ。

「……嘘だ。だって……だってゆき兄は、龍斗兄さんの事まだ……」
「おい」と椎名が止める前に、和斗の首元を掴んで壁に突き飛ばしていた。

椎名の前でそれ以上言ったら殺してやる。

和斗が重心を崩してよろめきながら後ろに下がり、壁に背中をぶつける。

車のドアが閉まる音がしたので、駐車場に目をやると、この世で一番会いたくない男が、見覚えのある車の外に立っている。

和斗がこんな所まで自転車や徒歩で来るはずが無い。誰かに車で送ってもらうに決まってる。その誰かを予想するぐらいの事が何故今まで出来なかったんだろう。

「和斗。お前とはもう家族でも兄弟でも無い。戸籍上も、もうそうなってる。だから俺に関わらずに、頼むからさっさと消えてくれ」
怒鳴る気力も無く淡々と放った後、立ち止まってこちらを見ている男から目をそらしたまま、椎名の車まで足を速める。

「いいのか？」

「さっさと出してよ」

低いエンジン音が唸りだす。

疲れきった体に車の振動が心地よく、エンジン音が止んで、初めて自分が眠っていたのだと気付いた。

「ちよっと待ってろ」と言い残し、椎名は車から降りて『阿津野』と看板の出た、見るからに高級そうな日本料亭の門をくぐって中へ入って行った。

しばらくして出てきた椎名の手には、見舞いの時に持ってきた物と同じビニール袋が二つかかっていた。

携帯で誰かと話している。相手はキングだろうか。そう思いながらまた目を閉じた。

自分の部屋に着いて、椎名の買ってくれた阿津野の弁当を二人で食べた。

食欲が無く食べ物を口にする事自体苦痛だったが、食べない訳にもいかず、たいした会話も交さないまま無理やり口に詰め込んだ。好きな人との急接近に普通なら天にも上るくらい浮かれるのだろうが、俺の場合、今日は今すぐベッドに直行したいくらい疲れているし、浮かれた分だけ後で自分を呪う事になるので複雑だった。

食後に今日貰ったばかりの薬を導眠剤も含めて何種類か飲む。どうやらこの行為を確認するために部屋に上がりこんだらしい椎名は、薬の種類と個数を確認した後ジッと隣で俺を見つめていた。

どうしても俺が寝るまでいる、と言い出した椎名を放っておきシヤワーを浴びる事にした。

髪の毛をバスタオルで拭きながら部屋に戻ると、片膝を立ててテレビを見ている椎名の背中が目に入って、手を止めた。

自分の部屋で好きな人がテレビを見ている。その背中を眺めている。この光景が、こんな自分が普通だと思える日常がきたら、どんなに幸せだろう。

「少しは疲れ取れたか？」

「……うん」

振り返った椎名に今日初めてと思える微笑を返した。

こんな会話が普通になったらどんなに幸せだろう。

この人が普通に隣にいる生活はどんなに楽しいものだろう。

その日常が自分にとってどれだけ手の届かない尊いものかという

考えに及ぶ前に、思考を停止できたのは食後の薬が効いてきた証拠だろうか。

「もう寝ろ。今日はいろいろあったしな」と言われ、時計を見るとまだ十時前だった。

シャワーのせいで先程までの眠気が飛び、絶対まだ寝れないと思ったが、自分がベッドに入らない限り椎名が帰らないと分かっているため、渋々眼鏡を外してベッドに横になる。

「そんなに見られたら絶対寝れない」

子供を寝かしつけるかのように俺の横に腰を下ろし、見下ろしている。

「鍵外からかけて、郵便受けに放り込んでくからな」

椎名が帰る時の話をしたので、急にズキリと気持ちが揺れた。

「ねえ、先生。先生ってどんな人が好みなの？」

「は？」

他愛の無い話で胸のズキリを落ち着かせる。

「例えばさ——教え子と付き合うとかはダメなの？」

「ん？ まあな——。高校生とは教育上問題大有りだな
やっぱりダメか。」

「じゃあ、教え子じゃなかったら——どんな人がいい？ 美人でスタイル良くてモデルみたいな女？」

「……さあな。あんまり考えた事ないけど……」

「もし俺が、教え子じゃなくて、男じゃなくて、あと五歳年いって、美人でスタイルが良いモデルだったら、俺と付き合う？」

自分でも訳が分からない質問に「なんだそれ？」と大好きな笑顔が返ってくる。

「あっ、でも中身が俺のままじゃ性格悪いからダメか……。じゃあ俺が、教え子じゃなくて、二十歳過ぎてて、性格も良くて、先生の好みのタイプで、更にモデルの女だったら、俺の事好きになる？」

幸せだろうな、そうだったら。
でもそれじゃあ、もう俺じゃないもんな。

「薬が効いてるみたいで良かった……」

椎名は目を細めてながら、俺の濡れた前髪を指で掬う。前髪の向こうに覗いていた好きな人の優しい表情が少し近くなった。

あの瞳にいつも俺が映っていたらどれだけ幸せだろう。

深海魚が夢を見ている。

絶対に瞳に映すことの無い、明るい海面を。

薬が作り出した、みなもの向こうに映る青い空の幻影を。

それでもいい。

目が覚めた後、この反動で身体がどれだけ深く暗海に沈み込んだとしても。

今だけでいい。

今だけ夢を見させてほしい。

こんな時に限って薬の効きが抜群によく、瞼の重さに耐えられない自分がいる。

身体が海面すれすれをプカプカ浮いてるかのように揺れて気持ちがいい。

自分の中だけで響いているのか、口に出しているのかも分からない声でつぶやく。

俺が、教え子じゃなくて……高校生じゃなくて……男じゃなくて……

……身体売ってなくて……こんなどうしようもない性格じゃなく

て……

……先生が……キングの買い物じゃなかったら……

そしたら……そしたら、俺の事好きになってくれる？

そしたら……目の前の俺にキスしてくれる？

いつのまにか繋がれていた左手が僅かに強く握られた。

——そうじゃなくても、好きになってる——

そんな幻聴と共に、唇に柔らかい温もりが落ちてくる。

——おやすみ。ユキヤ——

宝物である携帯のボイスメモが一度再生され

小さな金属音を合図に

夢が終わる。

深海魚の夢（後書き）

ちよつと甘い話書いてると、口がジャリジャリするー（ゝ・ω・
ゝ）モキュン！

次は浮き上がってこないくらい沈めてやるソイヤー（p ㏊）
q！！

いい加減にしろよ、自分。

もー病気だ。これ。

朝から人様のBL小説を拝読してありましたら、運悪くバッドエンド。ってか好きな人が死んじゃう話で、しばらく自分も小説書けな
いくらい沈みました……（；。㏊）ギョットネ！

しばらく浮かべなかつたので、他の甘々なBL読んでやつと浮き上
がった次第でございます。

どうかこの小説バッドエンドにはなりませんように……頑張れ自分
（人ゝ㏊o）

まあ既にストーリーは決まってるのですが♪

コメントや拍手がゼロになったりすると……ある日突然主人公が死
ぬかもしれません（＊。▽。＊）オドシカ！？

ゞ（㏊㏊㏊；）オウイ

足

寝返りをうって毛布を肩までかける。

先程まで汗がにじむほど火照っていた身体が嘘の様に冷たい――が、裸のままいる自分が悪い。

「冷房弱めるか？」

後ろから男の声がする。

「大丈夫だよ」

いつもの落ち着いた自分の声に、さっきまで芝居を演じていたベツドモードの俺が消えた事を知る。

二週間ぶりに紫色に染まった両手首をさする。

携帯を開く音がする。

「そういやユーキに聞きたい事があったんだ――」

三人掛けのゴシック調のソファ―に身を預けている男が、携帯のボタンをカチカチと押す音と重ねて話します。

一仕事終えて身体がだるく、寝かせて欲しい気持ちを抑えながら「なに？」と聞いた。

「北川って知ってるか？」

予想外の名前が飛び出した。

「あいつ俺と高校一緒だったんだ――。お前あいつの事誘ったんだって？　寝たいって言ったのか？」

しょうもない事言ってるな。

「あ、それ？　北川さんが俺の友達嫌がってるのに連れて行こうとするから、気そらせるために言っただけ。嘘に決まってるじゃん。だいたいそれから一度も会ってないよ」

少し後ろに振り返る仕草をして言った。

事実なので何の後ろめたさもない。

「だろうな。そんな事だと思った……。あいつは近づかない方がいい」

言われなくてもあんな危険な奴に近づかない。

身体が切り刻まれるのはごめんだ。

「あともう一つ聞いていい？ この椎名って、どこのどいつ？」

首だけで振り返って、天蓋のカーテンの間からソファァーを覗く。

クッションにもたれて足を組みながら三木が見つめているのは俺の携帯だった。

携帯の中身をチェックするなんて子供じみた真似するとは予想していなかったので履歴を触らずにいた。それに別に椎名と付き合っている訳でも無いから、わざわざ隠蔽工作をする必要がない。

「ああ、それ高校の先生。体調崩して休んだりしたら心配して電話してくんだよね——」

何故か声が少し上ずった。

「ふ——ん。それって月曜に夜まで一緒にいた男か？」

起き上がったもう一度見ると、三木は無表情のまま俺の携帯をまだチェックしている。

「あの日さ。ユーキ携帯の電源切ってただろ？ なんで繋がらないんだろうと思って俺マンションまで行ったんだぜ？ 駐車場に車あったの気付かなかった？」

「あれは……あの日は友達が自殺しようとしたりして、精神的にしろんどかったから家まで送ってもらったんだ。……それだけ。ほんとに何も無いよ」

やましい事は何も無いのに動揺を隠しきれない。

「へ——。ただ送ってもらって、夜の十一時過ぎまでね——」
スカーカーだよ。

「クラスの副担任だよ？ それに、あの先生はそんな事するような

人じゃないよ。ただ生徒の一人として俺の事大切に……」

その人を忘れるために、わざわざこうやって好きでも無い男と一日遊んでベッドで何時間もからまってんだよ。

気がついたら、接待モードどころか嘘もつけない馬鹿な素の自分に戻っていた。

「やけに真剣に庇うね。まさか本気で好きになっちゃった、とか？」ニヤリと笑った三木に何も言えず、また背を向けてベッドに身体を横たえる。

これじゃあ『その通りです』と言ってるようなものだが、そろそろ三木と縁を切るいいタイミングなのかもしれないと思い始めた。次の客を捕まえて、飽きられるのを待つつもりでいたが、どれだけ他の男と寝ても椎名の事を忘れられないんじゃないや自分が苦しいだけだ。

さっきもベッドの中で、目の前で揺れる肩が椎名のものならどれだけいいだろうと思って、馬鹿みたいに興奮した。

思わず首筋に「せんせい」と呟きそうになって、ひどい自己嫌悪に陥った。

どう別れを切り出そうかと考えていると「まあ、いいや」と軽い声がして、携帯を閉じる音が鳴った。

三木も金で繋がった関係と割切っていてくれたのだと感心し、安易に別れを切り出さなかった事に内心ホッとした。

次の金蔓も見つかっていないままでのサヨナラは本当に心から悲しい。

「でもユーキはすぐに嘘つくからな……」

そう小さく呟くのが聞こえたが、嘘と言い出せば金が欲しい事以外全てが嘘でなので、これも聞こえてないってことで嘘にしておく。

「俺、先週合宿行っちゃって言ってただろ？」

「どこ行って来たの？」

「京都の上の方」

何も無かったかの様に会話が再開されたため、俺は嬉しくなって、寝そべったまま上半身だけ両肘をついて起き上がった。

「その合宿で一緒だった奴にお前と同じ苗字の奴がいてさ——」
自分の顔から表情が消えるのが分かる。

「あれ、お前の兄貴だろ？ 黛 龍斗って。 兄弟いないっての嘘だったんだな」

三木が大学生なのは知っていたが、興味が無かったので大学名を聞いた事は無い。

まさかアイツと同じ大学だったなんて想像もしなかった。

「俺、帝大の医学部なんだよね——言わなかったっけ？」

俺の表情が凍りついた事に気を良くしたらしく、笑って話を続ける。

「そいつも、二人弟がいて上の弟はお前の高校の二年って言ってたしな」

嘘だ。あいつが、あの人がそんな事言うはずない。

もう家族じゃない。最初にそう言ったのはあの人だ。

「俺の事……その人に話したの？」

三木は満足そうに目を細めた。

「話してないよ。でも知り合いが同じ高校の二年だから知ってるかもって嘘言ったら、すごく興味深そうにしてたぜ」

「そう。残念だけど知らないや、そんな奴……人違いじゃない？」
よくある名前でも無いのに、そんな誤魔化しがきかないのはわかっている。

なんでそんな事言ったのだろう。

俺の事、弟だなんて。

あんな風に俺の事突き放しという。

どうしてそんな事言えるんだ。
せっかく忘れられそうだったのに。

「そうか？ 下の名前もお前と一緒にだった気がするけど……まあ、じゃあ今度そいつ紹介するよ。エッチの上手い恋人がいるって自慢してあるんだ」

会話の本当の意味が分かった気がして息を呑んだ。

「三木さん……それって、脅し？」

「さあ、どうかな。ユーキ次第だと思うけど」

なんで龍斗の奴、本当の事言わないんだよ。

そんな弟いないって。弟は和斗一人だって。
バカだよ。

そう言ってくれば、三木が何しようと放っておけるのに。

龍斗にどう思われても関係ないって、やっと思えそうだったに。

俺の事、弟なんて言ったら。

そんなこと言ったら。

まだそんな風に思ってくれてたんだって知ったら。

何犠牲にしても、ずっとそう思われたいって願ってしまう。

「見せたい物があるんだ。来いよ」

三木が静かに言って立ち上がった。

俺も傍にあった下着と服を着て天蓋付きベッドから降りた。

ここはホテルではなく、三木の家族が昔住んでいたという別荘だ。家具の殆んどが部屋に備え付けの重厚感のある造りで、どの部屋も品格のあるクラシカルな雰囲気統一されている。豪邸と呼ぶに相応しい建物だった。

今は大学に近いという理由で三木が一人で住んでいるらしい。

一日遊んで最後に映画を見て夕飯を食べた後、ホテルより落ち着くからと初めてここに案内された。

後ろを歩いて行くと書斎らしき部屋に案内された。

中に入るとツンと鼻をつく薬品の匂いがした。

部屋の奥にあるアンティークであろう大きなデスクの後ろは、壁一面が棚になっている。

その棚には隙間無くギッシリと大小の標本ビンが飾られている。

標本ビンの中の透明な液体には、数え切れない変わった形の魚や動物の内臓と思しき物、見た事も無いような物体がユラリと浮かんでこちらの様子を伺っている。

デスクの上のスタンドランプの光源を鈍く反射させ、深海の中を照らしたように、いつもは人目にさらさない塊が不気味に存在を主張している。

「親父は今政治家だけど、元内科医でさ。こういうの集めるのが趣味だったんだ。俺も結構気に入ってる。全部種類ごとに分けて並べてあるんだぜ——。半分以上は深海魚だけど」

椅子の真後ろにある真正面の棚の上から三段目だけが、大きな標本ビン一つだけで他に何も置かれずにあるため、そこだけ神棚のようになそのビンを尊く感じさせている。

その大きな標本ビンの中身が、俺の身体を凍りつかせる。

三木はそんな事には気もとめず、デスクの引き出しから小さな箱を取り出す。

俺の前で箱を開けて、何か光る物を見せた。

「いいだろ？俺のブレスとお揃い」

そう言いながら背後にまわって、俺の首にヒヤリとする重たい金属を巻き、後ろでカチャリと止めた。

「これ、専用の道具が無いともう外れないからな。ああ、やっぱユーキの白い肌にすごくよく似合う」

そう言って吐息をもらしながら、左耳の後ろに唇をあてた。

「あれ、って……人の……足？」

三木の行動も目に入らず、ただ視界を吸収していく目の前のビンの中身を聞いた。

「そうだよ。……でもあれは標本じゃない」

後ろから俺の両肩を抱き締めた三木が、左の肩越しに静かに言う。
こうされると、なぜか背中にいるのは悪魔だと感じる。

「あれは、俺の弟の足だ」

凍てついた身体がギシギシと痛む。

冷たい血液が身体中に循環し始め、気が遠くなる。

悪魔が耳朵に唇をつけて直接言葉を吹き込んでくる。

「あのビンと同じサイズの物を今注文してあるんだ。ユーキ、お前の分だよ」

ガラスビンの中に浮かぶ自分より少し小さな二つの足は、血管が見えそうな程青白く、ビンの中の空間だけがこの世では無いように思わせていた。

「俺……殺さ、れる……の？」

震える声を喉の奥から搾り出す。

その夜悪魔が俺に見せようとしたのは、標本ビンの中の足でもなく、もう外れない太いシルバーのチェーンネックレスでもなく、ずっと前から俺が探していた自分の居場所だった。

いや、探す振りをしてずっと目を背けてきた深海の更に深奥。

あの標本ビンの中と同じ世界。全てを忘れられるずっと朝の来ない暗黒の世界。

居場所を教えられた深海魚が、ゆっくりと息を吐いて目を閉じる。

悪魔は笑う。

「そう簡単には殺してあげないよ。ずっと……ずっとユーキを俺の傍で飼ってあげるから」

足（後書き）

いやー沈んだ沈んだ！εーd（ー▽ー、）ファイ）
昨日の浮いた雰囲気から一転…。

浮上してくるんだろうか、ユーキよ……ドッセエー（。ω。ノ）ノ
ーエエエー！！

何とか皆様への感謝の気持ちを表すべく、56の出来る数少ない
お礼の一つといたしまして週末の更新をさせて頂きました。いやー
焦った焦った。何とかUP出来ました。

ただしアホの56は早くも書き溜めが底をつきかけてギリギリな
更新になっておりますアホタレ！（。▽。）ノ

時間に追われるせいで自分の文章も全然色気も何も無くて納得い
かへん感じになってまいりました。

そんな文章を人様の面前にさらすのは申し訳ないのですが、いつ
も時間をかけて錯覚にかかっているだけで、実はいつもの駄文と何も
変わんねって自己暗示をしながら執筆しておりますΣ（。㇏。；）
アホオルデ！！

次回更新は次の平日火曜日になると思います㊦〇ペコ

サヨナラ放送室

授業が終わって生徒がまばらになった校舎と、陸上部が動き始めた運動場に目をやる。

ここからでは真下の自転車置き場は見えない。

ざらつく手すりに視線を移すと、水色に塗装されている鉄の上に靴跡があった。

シノのがつけた靴跡だろうか。

どんな気持ちでこの手すりに足をかけて乗り越えたのだろう。

今の俺には、この手すりを乗り越えてここから飛んだら自由になれる気がした。この汚れた身体を脱ぎ捨てて、暗い闇から抜け出せるような気がした。

「ユーキはここへ戻ってくるよ。お前の居場所はここだからな」

一晩中ベッドに繋がれていた手錠を外しながら三木は「学校行つておいで」と言った。

「戻って来なければ、お前の兄弟やその周りにユーキの事教えてあげるだけだし。そうなつても帰りたい場所があるなら、ここには戻って来なくていいよ」

逃げると思わないのかという自分の質問に、三木はいつもの笑顔でそう答えた。

短い付き合いなのに、自分の事をよく理解していると思った。

全てを忘れたいと居場所を探していた自分には、あの豪邸に帰らない理由が思いつかなかった。

制服の襟の下に隠れている太い鎖に手をやる。

屋上の入り口の錆びたドアが開く音がした。

振り返ると野木だった。

シノの事があって以来、昼休みは一緒にいたりもするが最低限の会話を交すだけで、シノの事も病院で俺が目にした事も話さずにいる。

「お前も俺の前から消えんだな……」

立ち止まってぼんやりと俺の顔を見つめたと思ったら、いきなり喋りだした。

「何？ 俺はシノみたいにここから飛んだりしないよ？」

あれ以来、初めて野木の前でシノの名前を口にした。

「でも消えるんだろ？」

さすがだな——と感心した。確かシノと言い争いをした時も野木は俺の異変に気付いていた。

「止めるのか？」

「止めないんだろ？ 俺じゃあ。シノも止められなかった」

野木の瞳が宙をさまよい、寂しそうな表情になったのを見て、自分のためにそんな顔をしてくれる親友を心から愛しく思った。

屋上を後にした俺は、椎名に会いに行った。

メールで放送室にいと聞いたので二階に向う。

放送室のドアをノックして中に入ると、椎名が放送機材に背を向けて、教室と同じ生徒用の机でプリントを広げていた。

「居残りしてる生徒みたいだね」

「ここが気に入ってるんだ。落ち着くし、好きな音楽が聴ける」

放課後の放送室は窓から夕日が射し込み、クラシックが流れているのにとっても静かで、椎名のプライベート空間と化していた。

「黛が会計してくれないせいで、実行委員会がまわらないんだ」

そう嫌味を言いながら、プリントをそろえて机の上でトントンと

やる。

座っている椎名に上から覆いかぶさるようにして、いきなり唇を重ねた。

椎名とキスをするのは三回目だ。

最初は和斗に見せるための嘘のキス。だから二回目が本当の最初のキスといえる。

そして三回目のこのキスが最後のキスだ。

夕日でオレンジ色に染まる好きな人の髪の毛を、そっと掌で撫でた。少し硬い髪の毛からでも椎名の温もりを感じる。

全部欲しい。この髪も、唇も、肩も、身体も、声も、もちろん心も、全部。

唇に触れるだけのキスなのに、何度も角度を変えて唇を動かして身体感覚全てを使ってこの感触を脳に憶えこませる。

この瞬間を一生忘れないくらい堪能して、この記憶だけでこれから生きていく。

先生ありがとう。

この思い出だけで、俺はこれから茨の海を歩いていける。

唇を離して椎名の表情を確認すると、特に驚きもせず俺を見上げていた。

「どうした、急に」

微笑む椎名の肩に顔をうずめる。

「ねえ、先生。俺と一緒に逃げない？ 逃避行ってやつ。俺こう見えてちゃんと貯金してるから、結構遠くまでいけると思うんだよね——東南アジアとか余裕だよ？」

どうしてこうも現実味の無い夢ばかり俺はいつも見るのだろう。

「葉はちゃんと飲めてるか？ 疲れた顔してるけど」

「そんなことないよ。先生の方が疲れてんじゃない」

顔を上げて椎名の顔を至近距離から眺める。

少し痩せた気がする。初めて会った時の汚れの無い明るさに影が射しているように思えた。

「キングってどんな人？ 先生にひどい事したりしない？」

また椎名の顔の隣に頭をつけて聞く。

俺だったら、椎名にこんな疲れた顔絶対させないのに。

怖い気持ちと、お互い干渉しないと約束した事もあるって、今まで聞けずにいたキングの事を最後のチャンスだと思って口にした。

「そんなこと、お前が心配する事じゃない」

「でも、飽きられたら殺されちゃうんだよ？」

その言葉は自分自身に言い聞かせているように思えた。

飽きられていつか殺されるかもしれないのは俺も同じだ。

人に飼われるという事を体験して、初めて椎名の身が本当に心配になった。

「それで逃げようなんて言ってくれたのか？」

「うん……。それに先生と一緒にいたいし……」

最後にさりげなくでいいから、ちゃんと告白しておきたかった。

「殺したりしないよ。キングは……」

ポンポンと好きな人の掌が自分の頭で弾む。

「でも今までの奴等だって……」

「あの人だって……変われるさ」

何でそんなにキングを庇うんだよ。そう言おうと顔をあげると、椎名が見た事も無い照れ臭そうな表情をしていた。

その揺れる瞳を見て、ああ、この人はキングの事が本気で好きなんだと分かった。

相手に気付かれぬまま告白して失恋した。

どうか先生の好きな人が三木のような男ではありませんように。
そして相手も椎名の事を好きになって、二人でずっと幸せでいて
ほしいと切に願った。

俺の好きな人を幸せにできるのは、もうキングだけなんだ。

俺じゃない。

俺に椎名は救えない。

――あんたに俺は救えない。自分の人生も守れないような奴に、俺
の人生をどうこうされたくない。俺の心配より、自分の心配しろっ
て――

いつか副担任相手に吐いた暴言が、そのまま俺自身に返って来た。

いつのまにか音楽が止まって、外から運動部の掛け声だけが小
さく響いている。

「先生。俺さ、好きな人と一緒に住む事にしたんだ」
身体を離して本題を伝えた。

「そ、そうなのか。どんな人なんだ？ いい人か？」

「うん。いい人だよ。俺の客だった人……」

最後の会話で出来るだけ嘘をつきたくなかったので、俯いて小さ
く答えた。

「そうか。……まあ、その方が黛も精神的にも落ち着くかもしれな
いな……学校では俺が見れるけど、家に帰ったら一人ってのも心配
してたんだ。誰かと一緒の方が安心だ」

「うん。それ言いに来ただけ。じゃあ、俺行くよ。仕事の邪魔だし」
嘘でも椎名を安心させられた事はよかったと思った。

ドアに向かおうとしたら、左手を握られた。

「もし、何かあったら相談しろよ。ユキヤのためなら俺は何でもす

る。それだけは絶対に忘れないでほしい」
強い眼差しに吸い込まれそうになる。

どうしてそんな事言うんだよ。

ただの生徒にどうしてそこまで言えるんだよ。

何で名前で呼んだりするんだ。

電話で言ってくれたら録音できたのに。

最後の最後にそんな事言われたら、寂しくなるだろ。

「先生……さっきの話……」

逃げようって言った話。一緒にいたいって言った話。
あれ全部……

「全部……」

本当だから。

本当に先生と逃げたい。一緒にいたい。

先生……大好きだよ。

「冗談だから……。さようなら」

そう言っ、この世で最後の温もりを手放した。

サヨナラ放送室（後書き）

二日ぶりの更新でございます。

今日も何なのこれ？な文章を皆様のもとへお届けいたします。オラ
アアーΣ（。▽。ノ）ノーツ！イツケエエー——！！！！

明日からちよい痛い内容になる予定……。

目指せ来週始め完結！！

本当は今週始め完結って言ってたけど、何の躊躇も無く変更致しました（＊。▽。＊）オイコラ！

あともう少しお付き合います（人、ん、〇）

新しい傷古い傷（前書き）

やや痛い描写がありますので、苦手な方はご遠慮下さい。

新しい傷古い傷

三木は自分に似ていると思った。

自分も一歩間違えば三木のようになっていたと思うし、今でもその危険を充分孕んでいる様に思う。

好きな人を傷つけるまで束縛して、愛に飢えて自分を見失う。

一年半程前、俺は一度そうなりかけた。

元々隠し子だった俺が、母親に新しい父親を紹介されたのは小学五年生の時だった。

新しい家には新しい家族が待っていて、龍斗という三つ上の面倒見のいい兄と、和斗という三つ年下の可愛い弟が出来た。

初めて家族の温かさに触れて、これが幸せというものなんだと実感した。

そして、時が経つ内に自分が異常に兄の龍斗に執着している事に気がついた。

自分以外の誰かが、例えそれが弟の和斗でも、兄の気を引く事にイライラした。

ベタベタと甘える自分に、龍斗がどんどん甘くなっていくのが快感だった。

その感情の正体はずっと分からないままだった。

ところが俺が小学校を卒業し、龍斗が高校に入学した年、あるきっかけでその感情の正体が判明した。

隣で龍斗に勉強を見てもらっている時、急に押し倒されてキスをされたのだ。

男同士で兄弟なのに、俺の上に覆いかぶさるようにしてどんどん深くなっていくキスや、服の中に潜り込む掌が全然気持ち悪く無かった事に驚いた。

龍斗が何故そんな事をしてくるのか最初は分からなかったが、何度か同じ事があってから、龍斗に対する気持ちが好きという感情なんだと理解した。

相手を常に自分の近くに縛り付けたい、自分以外に触れてほしくない、この気持ちが好きという事なんだと思った。

それ以来、俺はそれまで以上に龍斗に執着するようになった。

常に自分の事を見ていて欲しいと言ったし、自分以外の人間の事を考えるのなんてやめて欲しいと、はっきり口にした。

高校生の龍斗に恋人が出来るなんてもっての外で、女の名前が自分の前で作る事や、男の友達でも家に連れて来るのは嫌だった。

龍斗は俺がどんなに無理な我侬を言っても、少し困った顔をするだけで、最後には必ず優しい表情で頷いてくれた。

ところが最初のきっかけとそれから何度か同じ事があり、それ以降急に龍斗は俺の身体に触れなくなった。

その事に俺はとてつもない不安を覚えた。

具体的に身体を繋げるという事がどういう事かも分からない中学生のくせに、とにかく龍斗に求められなくなった事に焦りを覚えた。

わざと同じ部屋で寝たり、抱きついたりしても、龍斗は辛そうな顔をするだけで、全く俺の身体に目を向けなくなった。

なぜだろうと、理由を血眼になって探し、嫌われそうな要素は全て排除した。

とにかく龍斗を自分の隣に繋ぎ止めておくことに必死だった。共働きの両親が不在がちで兄弟三人でいる事が多かった家の中で、和斗の存在を邪魔だと思うくらい兄への独占欲は高まっていた。

そうやって何年かが過ぎて、俺が高校に入学した春に事件が起った。

弟の和斗が自殺をはかったのだ。

幸い風呂場で手首を切ってから見つけるまでの時間が早かったため、一命は取り留めた。

龍斗しか目に入っていなかった俺は、和斗がそれまで精神科に入院していた事も知らなかった。

和斗の目が覚めて自殺しようとした理由を聞く前に、それが自分のせいだと知らされた。

兄に思いを寄せていたのは自分だけではなかったと知ったのだ。

病院のベットで眠る和斗の前で、龍斗は俺に言った。

「お前の美しさは人を惑わす。もう俺にもこいつにも近づくな」

その後、俺の母親が姿を消した事を聞かされた。

どういう理由でこのタイミングなのかと思ったが、今考えれば和斗の事件や俺に理由があるのかもしれない。

母親が置いていった離婚届で離婚が成立したため、もう戸籍上も兄弟では無くなったと言われた。

だから龍斗が俺の事を、未だに弟だなんて言うはずがない。

あんなに冷たい態度で俺を突き放しておいて、そんな風に思っているはずがない。

放っておけばいいんだ。あんな奴。

俺が身体を売っていると知っても、きっと龍斗は関係の無い事だと笑うはずだ。

大学の奴や周りの人間にばらされても、和斗以外に弟はいないと

言えればいい。

でも和斗はどうだろう……。まだ精神科に通うぐらい心を病んでいる。

そんな事に耐えられるだろうか。

それに…それに龍斗が、もし本当に俺の事をまだ弟だと思ってくれていたら……。

家を出た時、既に高校の授業が始まっていたので、血の繋がらない父親が名前を変えずに黛を名乗ることを許してくれた。それだけでなく、一人で暮らすと言い出した俺に、卒業までの学費と最低限の生活費を出してくれると約束してくれた。出張で殆んど家にいなかった父親だが、血の繋がらない自分にここまでしてくれて本当に感謝している。

そうやって血の繋がらない父親に迷惑をかけながら通っていた高校だが、辞めるつもりだと夕食の時に三木に話した。

自分にとって何の意味も無い事のように思えたし、そんなことのために元父親に迷惑をかけたくない。何より椎名と顔を合わすのが苦痛だった。

ポタージュを口に運びながら、明日から学校に行かないと言うと、三木は特に理由も聞かずに「じゃあ近いうちに退学届け取り寄せとく」と言った。

毎日の食事は宅配で届くので、家事と言ってもさほど無いだろうが、一日家にこもる人間の気晴らしくらいにはなるだろう。

あと携帯を替えたいと話すと「俺の使えよ。俺が新しいの買う」と嬉しそうに自分の携帯を俺に差し出した。俺が他の世界と繋がりを絶つ事が余程嬉しいらしい。自分も兄に対して同じ感情を抱いた

事があるのを思い出した。

三木と以外連絡を取ることもなくなるのだろうか、別にそれでも構わないと思い、三木の携帯を受け取った。

自分の携帯は今日学校の帰りに既に解約してきていた。

「椎名って先生にはちゃんとサヨナラ言ってきたのか？」

ニヤニヤしながら聞いてきたが、椎名の話を三木の前でしなくなったので黙っていたら、明らかに気分を害しましたという顔になった。

三木は椎名がキングの買い物であることに、気付いていない。

ここから逃げるつもりは無いが、これ以上周りの人間の弱みを握られるのは重たい。

椎名がキングの買い物である事を学校にばらすと言い出しかねないからだ。

もう一生会わない振られた相手を心配し続けるのは辛い。

風呂の湯を張るために脱衣所に入ると、後ろから三木がついて来た。

「今からお湯入れるよ」と言う俺の言葉を「ああ」と聞き流し、浴室へ俺を引っ張っていった。

いきなり腹を蹴られて、タイルの上に派手に転がる。

唸り声を上げて腹を抱えて倒れている俺のチェーンネックレスを三木が掴む。

首の鎖に力がかかって皮膚にめり込み、無理やり上半身を起こされて、風呂場の壁に背中をぶつけて座らされる。

予期せぬ衝撃に混乱して、息を荒くしていると、拘束する場所を教えているように紫色に染まっていた両手首に、また手錠がかけられた。

俺の両手首を捉えた手錠を、シャワーを掛けるポールに麻紐で巻

き付け、座ったまま頭上で両腕を固定される形にされた。

「な、なに？ 俺こんなことしなくても逃げないよ？」

俺の言葉に耳をかさず、何も言わずに風呂場から出て行く三木に不安を募らせる。

何をするつもりなのだろう。このまま朝まで放置だろうか。それともここでベッドモードにならなくてはいけないのか。

昨日も書斎から帰った後、ベッドに手錠で繋がれて散々だった。今日学校へ行けたのが不思議なくらいだ。

再び姿を現した三木は、黒い小さめのボストンバッグを手にした。俺の足元にバッグを下ろすと、中からガラス同士がぶつかる嫌な音がした。

三木は屈みこみ、俺が穿いていたハーフパンツを脱がせ、右ひざの上に乗る、自分の体重で俺の右足を押さえ込んだ。浴室のタイルの冷たさに下半身の体温が奪われる。

三木はそのままの体制でボストンバッグから透明な液体が入ったビンや大小のガーゼ、薄い箱をいくつか取り出した。

それら全てが素人目からしても手術室で使用されそうな物ばかりだったので、俺は一気に血の気がひいて呼吸のリズムが合わなくなる。

昨日見た標本ビンの中の足を思い出す。

「やっ……。何？ 何するの？」

俺は恐怖に震えて首を振りながら、動かせる左足を使って身体を三木から離そうとする。

三木はそれを見て微笑しながら、ポケットからソムリエナイフを取り出した。

「本当は今日するつもりじゃなかったから、メス持って帰って来ないんだ。だからこれで我慢して」

そう言って、グリップの背に折り畳まれていたブレードを爪で引き出した。

「まあ消毒くらいはしておくよ。気分が良ければ表面麻酔でも使っ
てあげようと思ってたけど……俺を怒らせたユーキが悪い」

目の高さからビンを傾け、俺の内太腿とブレードにドボドボと液体を流す。

鼻をつく匂いを浴室全体に放ちながら、生温い薬品がやっと体温と同じ温もりを得たタイルに広がっていく。

「ユーキ。お前は俺の物だ。それを忘れないようにお前の身体に一生消えない証を付けとくよ」

無表情で軽く言ったあと、グリップが下にくるようにソムリエナイフを握り直した。

次の瞬間。鋭く光るブレードの反射光全てが俺の濡れた白い太腿の中に消えた。

「っ！ うあああああああっあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああっ！！」

新しい傷古い傷（後書き）

イタタタタ・・・。（P D q）。

ただただ痛いだけの今回。

まあ夏だし？ゾツとして涼しくなったり？（' ' #）シネー！！

特に性描写もなく・・・というか、たいした性描写も無くここまで来ました（。▽。；）

今最終話2～3話前を執筆中で性描写を入れるか悩んでおります。
どうなんだろう……。どちらのほう喜んで頂けるのか——【わ
かりま線】——

ちなみに次回はこれでもかというくらい沈みます。

覚悟されたし！キュピ——（。☆ D ☆。）——ン

茨の海

目の前にある大きな空瓶を眺めていた。

ガラスに映る自分の顔を、見える方の目で覗き込んだ。

重たい鎖の上に映る右目の眼帯と、少し腫れて古血が固まる口角が痛々しい。

ネガフィルムのように淡色に映し出される世界で、首の周りの鎖状の擦り傷や顔の青い内出血の痕が見えないせいで、まだまともに自分の顔が見られると思った。

高校に行くのをやめて、三木の家に住むようになって一ヶ月程が過ぎた。

身体には前の傷や痣が消える前に、日々新たな痕が増えていく。

中には内股の傷のように、もう一生消えずに自分の身体に刻み込まれているものもある。

その傷は俺の内腿の柔らかい皮膚をS字状に引き攣らせ、飼い主のイニシャルを彫っている。この刻印のために皮膚を裂かれてしばらくは、歩く事さえ困難だったが、幸いというべきなのか、それを刻んだ飼い主自身が医者のお卵であったため、病院でされるのと同じ処置を受け、一週間もしない内に傷は塞がった。

それでもまだ時折痛む事がある。

三木の暴行はベッドの中でも、それ以外でも日に日に酷くなっていった。

特に先週北川が家を訪れて帰った後は、色目を使ったなどと言い掛かりをつけて乱蹴された。それ以来俺を痛めつける事に興奮を覚えたのか、台所やリビングの床などに急に押し倒されて無理やり犯

される事が多くなった。最初は逃げたりやめて欲しいと懇願したりしていたが、それが逆に相手の興奮を煽る事に気づいて、今ではただ災難が身体の上を過ぎ去るのを目を瞑って待っている事にした。散々蹴ったり殴ったりして、俺が意識を失いかけたところで服を脱がされる。そうかと思えば、昨日の夜の様に優しくベッドで抱いて、耳元で愛してるなどと囁いたりする。

三木に対する恨みや憎しみは全く無かった。

それどころか、もう一人の自分を見ているようで、この人は俺がいなくちゃ駄目なんだという使命感のような感情までも持つようになった。

兄の龍斗もこんな気持ちだったのだろうかと思う。

今はただ自分がいつか入ることになる大きな空の標本ビンを毎日のように見つめている。

手を触れるとガラスのヒンヤリとした感触が、異世界への通じている事を思わせる。

ここへ早く入りたい。

いつからか、そう思うようになっていた。

あんなに気味悪く思っていた、標本ビンだらけの書齋が、今では俺の唯一落ち着く場所になっている。

壁一面に飾られたガラスの向こうから沢山の深海の生き物が自分を静かに見つめている。

一日の大半がこの静の時間に費やされる。

一瞬、隣に置いてあるビンの中の白い足の指が、自分を誘うようにピクリと動いた気がして一歩下がった。

最近頻繁にこういう事が起こる。

自分の標本ビンの隣にある三木の弟の足の標本であったり、他のグロテスクな形の深海魚達が、待ちくたびれて自分を迎えに来るよ

うにざわめき、ガラスの向こうの世界に引き摺り込まれそうになる。

毎日の様に三木に飲まされる身体が火の様に火照るよく分からない薬と、精神科の薬との飲み合わせが悪いために見える幻覚じゃないかと、自分で勝手に診断している。

薬漬けの脳ミソでは、幻覚が病気のせいなのか薬のせいなのかよく分からない。

もしかしたら幻覚なんかではないようにも思う。

急にゾクリと背筋に違和感が走る。

昨日腕に出来たばかりの煙草を押し付けられた火傷をさすりながら、急に冷えた身体を丸めて部屋を出た。

夕方になっても外は明るく蒸し暑い。

顔をしかめて玄関から少し歩き、門の横にある郵便受けに向かう。やはり太陽の下は苦手だ、早くさっきの部屋に帰りたい。

郵便受けを開けて夕刊と何通かの封筒を取り出した。三木宛のダイレクトメールに目を通していると、自分の数メートル先で人の気配がした。

閑静な住宅街で人に会うのは珍しい。

顔を上げると門の外に男が立って、こちらを食入る様に見つめていた。

クタクタの安そうなスーツを着て、暗色の短髪の男が眉をひそめている顔を、いつもの半分の視界で確認したが、しばらく誰だか分からなかった。

DEEP BLUEの個室で、同じ表情で見つめられた事があったと気付き、やっと自分の副担任だった男の顔と重なった。

「黛……」

懐かしい響きと声に、一ヶ月とは思えないほど昔のように思う過

去が呼び覚まされた。

俺は自分が本気で好きになった人の顔も忘れてしまいうくらい、おかしくなってるんだと知った。

今でも毎晩、隠れて好きだった人の声を聞いている。

そのために古い携帯を二三日に一度ちゃんと充電している。

自分を下の名前で呼ぶ愛しい人の声と、いつかの温かい唇の感触だけで、崖っぷちギリギリの平常心を何とか繋ぎ止めている。

二三言、言葉を交し、歩いて一番近い喫茶店に二人で行くことにした。

椎名を家に上げる訳にいかず、とにかく腕の火傷や青痣を隠すために真夏にパーカーを着て、鍵も掛けずに家を飛び出した。右目の眼帯と首や頬が紫色に染まった自分の姿を玄関の鏡に映して悲しくなった。こんな姿を好きな人の前にさらすのは辛い。

どこかで幸せに暮らしていると思っていて欲しかった。

家の門から外に出るのが一ヶ月振りなので、やたらと挙動不審に陥った。

運よく喫茶店は客が一人もおらず、夜はバーになるだろうと思われる暗くて落ち着いた雰囲気だった。それでもカウンターの中でコーヒークップを拭くマスターの目が気になったし、棚を閉めるちょっとした音にも身体がビクリと反応した。そんな俺を椎名が眉をしかめたままジッと見下ろしていた。

一度席に着いたが、極度の緊張で気持ち悪くなりトイレへ駆け込んで、たいして食べていない昼食を全て吐いた。

「高校……本当にやめるのか？」

トイレから帰って席に着くと、俺を驚かせまいと静かに問いかけ

た椎名に、コクリと頷いた。

最初に目を合わせてから一度も椎名の顔を見ていない。見られている視線は感じるが、俯いてコーヒークップを見つめたまま、暗闇が広がる左目に神経を集中させた。

「男同士の方が話しやすいだろうって牧内先生も言ってくれて、俺が直接渡すために今日寄ったんだ」

そう言いながら、鞆の中からA4サイズの茶封筒を取り出して、テーブルの上に置いた。

退学届けは一度前住んでいたのマンションに送付してもらってから、三木がマンションの部屋まで取りに行くと言っていた。

マンションの部屋は最低限の物以外は殆んど放ったままにして出てきた。一応今月分までは家賃が引き落とされる予定だが、その後は残してきた荷物を全て処分して引き払う事になっている。

まさか退学届けを直接渡しに来るとは予想外だ。

どうやって俺の居場所が分かったのだろう。

携帯も解約したし、誰にも事情を話さず三木の家に住むようになった。

どうやって居場所を知ったのか聞きたい衝動に駆られたが、今は出来るだけ何も話さず目の前の退学届けを受け取りたかった。

「他の先生とも相談して、黛は勉強が出来るから高卒認定くらいはいつでも取れるだろうし、お前が本当に望んでるならこれ、渡すつもりで来たんだ」

一ヶ月前は他の生徒より少しは特別な関係に思えた椎名が、今では厳しい顔つきの副担任以外の何者でも無いように感じた。

それでも、元気でいてくれた事に安心した。

飽きて消されずに済んでいるということは、キングに椎名の気持ちを通じてうまくいっているのだろうか。

椎名は俺の反応を待っていたが、何も話す事がないので暇を持て余した。

「何か言ってくれないか？ ……お前、好きな奴と一緒に住むって言ってなかったか？ お前の事をそんなひどい姿にする奴が……本当に好きなのか？」

何か言おうとしたが言葉が出なかった。

一刻も早くあの部屋へ帰りたい。

あの深海のように暗くて静かな部屋の、綺麗なガラス瓶のなかへ。今すぐ椎名の目の前から消え去りたい。

こんな姿をさらしていたくない。

椎名の腕がこちらに伸びてきて、眼帯に触れようとした。

僅かに震える指が見えない左目に届きそうになった時、ちょうど俺の携帯が震えた。

もちろん相手は三木で、このタイミングでの着信が、どこかで監視されているのではないかという恐怖を植付けた。

テーブルの上で震えてる携帯を慌ててつかみ、急いで耳にあてる。

「もしもし……」

『何で家電出ないんだよ。今どこだ？』

「ご、ごめん。夕刊取りに行行って気付かなかった……」

『二分以上鳴らしたんだぞ？ まあいい。もう家に着くから話は帰ってからだ』

まずいことになった。

どうしてこんな時に限って早く帰ってくるんだ。

酷い怯えように椎名が言葉を失っている。

また動悸が始まって息が荒くなる。

慌てて携帯を閉じ、勢いよく立ち上がり、店を出ようとドアに向かう。

「黛！ その……一緒に住んでる奴に会わせてくれないか？」

「そんなこと……そんなことしたら……殺される」

茨の海（後書き）

今までで一二を争うぐらい沈めたりしました……。まあ最後の山越えなので、次回が頂上予定！！

山越えと言えば、16は毎日キャンプ気分の全寮制高校に通っていたのですが、その時に寝言で

「わかった！わかった！！ 牛乳買ってきたらいいんやろ！？ ……あの山越えて」って言った奴がいます。ええ。衝撃でした。

何しろ山越えて牛乳の買出しを強要された事が無かったので……。

この小説もあと一歩なので頑張ります！（#。D。）アノヤマコエテ！！

今日は午後からお出掛け予定なので、出掛けるまで次々回分の執筆に励みます。

さあ、予定だらけの今週。週末更新出来るか！？

私が一番知ってるー（。V。）ドアホウ！

キング

夕食の皿を片付けながら横目で三木の様子を伺う。

椎名を店に残して家に走り帰ってから、十分もしないうちに三木は家に帰ってきた。

今のところ三木は電話に出れなかった話には触れずにいる。

「今日どこに行ってたんだ？」

コーヒークップを静かに置いて睨みつける三木の視線を外しながら、両手を後ろの調理台についてもたれ掛った。

「どこにも行ってない。ずっと、家にいたよ。……聡が帰って来た時、俺いたでしょ？」

想定していた質問をスイッチに頭が臨戦態勢に入る。

外出していた証拠は無いはずだ。少々無理やりにでも話をこじつけて逃げ切る。

「ユーキ、GPSって知ってるか？」

息が詰まる。

GPS付き携帯。

本当に監視されていたのか。

早くも切り札を出されて、言い訳の路線変更を強いられる。

「担任の先生が退学届け直接持って来てくれたから、喫茶店でちょっと話してただけ……。ホントにそれだけ」

「この場所誰にも教えず来たんじゃないのか？ ……あの椎名って男だろ。ホテルのベッドの中で話し合いか？」

椎名にこんな傷だらけの汚れた身体を見せれるはずがない。本当は会うのさえ苦痛だったんだ。

「そんな事本当にしてない！ GPSで場所見たんでしょ？」

「GPSなんて付いてない。……帰って来た時、ユーキの身体が熱くて汗ばんでたから変だと思ったただけだ」

はめられた。

帰って来て早々玄関の廊下で押し倒したのはそれを確かめるためか。

陶器が割れる酷い音が部屋いっぱいに響いき、床に白い破片が咲く様にいくつも落ちた。

テーブルの上に残っていた食器を手で払いのけて三木が立ち上がる。

今回の怒りはそう簡単に治まりそうに無い。恐らく身体もただでは済まない。

足元の鋭利に割れた皿に目をやりながら、また新たな傷が肌に刻み込まれる事を覚悟した。

痛みに怯える太腿が本能的に一步後ずさる。

伸びて来た手に首元の鎖を掴まれ、皿の破片が散らばったフロアリングの上に身体を叩き付けられる。

すぐに上半身を起こしたが、一度思い切り破片だらけの床に顔をぶつけたせいで、額から生温かい液体が流れるのを感じる。

手で触れて見てみると、サラサラとしたどす黒い赤色が掌から滴った。

三木は無表情だ。

冷たい氷点下の視線が俺を見下ろす。もう何を言っても無駄だ。

「やっぱり必要無いな……これ」

俺の足元に屈みこんだ三木は、手元に落ちていた皿の破片を取って俺の足首にあてる。

「いこと……いこと」

そう言いながら、両足首のくるぶしの上辺りに線を引くように破片を滑らせ皮膚を浅く切る。

俺の両足に切断する場所を示した赤い線が入った。

「や……やめてよ」

「お前が悪いんだ。……それに痛いほうが気持ちいいんだろ？」

冷気を含む声と共に、足首を見据えていた眼がゆっくりと這い上がり俺の視線と一致する。

「本当に退学届け受け取るために会っただけだよ……」

「ふーん。じゃあ、その退学届けはどこにあるんだよ」

言葉を失い下唇を噛む。

結局肝心の物を受け取ることなく、喫茶店から走って飛び出してきたのだ。

頭から信じる気の無い三木は、俺の腹の上に馬乗りになって、チーンネックスレスに両手をかける。

三木の拳に力が入り、鎖がギシギシと喉元を締め付ける。

あまりの圧迫感と激痛に、首からネックスレスを離そうと指で掻き掻るが、太い金属が皮膚にのめり込んでいて離れない。

息が出来ず、苦しくて顔が歪む。

頭と顔に血が溜まり始めて熱くなる。

殺される。

俺はここで死ぬんだ。

白む視界の中に、辛そうに顔をしかめている三木の顔があった。

ああ、この人もきつと辛いんだ。

昔の俺と一緒にだ。

好きな人を自分のものにしたいくて、もがき苦しんでいる。

もう一人の俺だ。

意識が途切れる寸前で首の圧迫感が離れた。

自分から遠ざかる足音と台所のドアが閉まる音を聞きながら、何も考えれずにただ天井を見つめていた。

起き上がると床に碎け散った純白と、どこから流れてきているのか自分の腕を伝う真紅が対照的で美しかった。

もう駄目なのだと気付いてしまった。

身も心も、もうとつくに限界だったのだと知った。

他の人間と見た目は一緒でも、自分の身体は茨の海を渡りきれないように出来ない。

もう帰ろう。

あの暗い深海の部屋の、透明な標本ビンの中に。

でも俺一人じゃ意味が無い。

もう一人の可哀想な俺も一緒に連れて行ってあげなければいけない。

酷く疲労した身体を持ち上げ、深海の底に向かった。

開いたままのドアから、壁一面に並べられた標本ビンを背に机に突っ伏している三木が見えた。

近くまで歩み寄り、少しパサついた茶髪をそつと撫でる。

まるで今から自分が標本になるのを待つかのように、温もりや息吹を感じない。ただ苦しそうに背中が上下している。

三木の後ろへまわり、棚に並べられた標本ビンに片っ端から手をかけた。

小さめのビンはホルマリンの飛沫と共に床に碎け散ったが、比較的大きな標本ビンは落ちてても割れずに透明な液体をドロリと吐き出すだけだった。

床の上が海水に満ちていく。

今まで暗闇に潜んでいた奇妙な形の深海魚達が、とても嬉しそうにヌメヌメした肌を初めて空気にさらす。

ポケットが震えている事に気付き、携帯を取り出した。

三木以外からの着信を不思議に思い、開けて画面を確認する。

——椎名 篤樹——

驚くどころか呆れた。

うちの副担任は生徒の携帯をどこまで勝手にいじれば気が済むのだろう。

ただこのタイミングに、感じる事が最後になるであろう運命という響きを思わせた。

「ユキヤか？ 今家にいるのか？」

ちゃんと謝らなければいけない。

神様がくれた最後のチャンスだ。

いろいろ心配をかけた上に、先立つ不幸をお許し下さいってやつだ。

今ならシノの気持ち分かる気がする。屋上から飛ぶ前に俺に謝ってくれたシノの気持ちが。

俺と一緒に……そんな言葉が終わる前に自分の声で椎名の話を読んだ。

「先生。いろいろ本当にありがとう。……でもゴメン……俺……もう疲れたよ」

そのまま腕の力を抜くと、腕にぶら下がった掌から回線が途切れ

ないままの開かれた携帯が水面の上に落ちた。

叶わないが、もう一人だけ最後に声を聞きたいと思う顔が浮かんだ。

その人には今でも自分を弟と呼んでくれる事を素直にありがとうと言いたかった。

大きな自分の標本ビンを手に取り、頭上から床に叩き付けた。今までで一番大きな音韻を残し、分厚い破片が顔の辺りまで飛んでくる。

しゃがみ込んで水面に散らばったガラス片の中から、一番握りやすくて鋭角に割れたものを選んだ。

「それで俺を刺すのか？」
立ち上がると、いつのまにか顔を上げていた三木の虚ろな瞳があった。

「ここを出て、ユーキは帰る場所があるのか？」
目の縁を赤く染め、濡れた頬を見て心が痛んだ。

ごめんね。三木さん。
辛かったよね。

もっと早くこうするべきだった。
こんなにも俺はこの人を追い詰めてしまっていた。

「三木さん。俺と一緒に死のう。もう俺も三木さんも生きてちゃ駄目なんだ」

「それも悪くないな……」

こんなに優しい三木の微笑みを見るのはいつ以来だろう。

本来とても魅力的だった少し茶色がかった瞳と日に焼けた健康そうな笑顔に自分の表情も緩む。

俺も久し振りに笑みがこぼれた。

筋肉で引き締まった張りのある三木の首に、鋭く尖ったガラスをあてる。

しっかりと掌を握りこむと、ガラスが皮膚の中まで食い込み、新たな血液が手首を伝う。

「俺も、すぐ逝くから……先に逝って、待ってて……」

なぜだろう。

最後の時なのに三木の瞳が、廊下の方を見つめている。

振り返ろうとした時、背中でガラスを踏み割られる鈍い音がした。同時に肩をものすごい力で引っ張られ、そのまま身体ごと後ろに持っていかれた。

ガラスの破片とホルマリンの中で深海魚が泳ぐ床に、よろめいて尻餅をつく。

俺の目の前に現れたスーツの背中が、いきなり三木の胸元を掴んで窓際まで引き摺って行った。

状況を飲み込めず、窓の下で背中を壁につけて弱々しく男を見上げる三木と、それを見下ろす男を眺めている。

その横顔に見覚えがあった。

気が付くともう一人スーツ姿の男が目の前に立っており、俺を見下ろしていた。

「ユーキ君大丈夫？ 立てる？」

明るい声で顔を覗きこみ、手を差し伸べて来る。

パーマがかかった金髪を後ろでくくり、女のように柔らかな顔立ち。いつもはカウンターのの中にいるバーテン姿の顔が、やたら高級そうなスーツを着込んでいるため、思い出すのに時間を要した。

「吉野さん……？」

「すぐ来るから、ちょっと待ってて」

俺は真紅に濡れた手を引っ張られて立ち上がり、窓際へ向かう吉野の背中を目で追った。

DEEP BLUEのバーテンである吉野がここにいる。

という事は、やっぱりあれは……。

「お前には今から消えてもらう。お前の父親とも取引して了承済みだから逃げても無駄だ。俺の気分を損ねた事をあの世で悔やめ」
三木を見下ろしていた男が痛く感じるほど冷たい声を発した。

「あんた……キング……か」

消え入りそうな三木の小さな声が傍観している俺の耳にも届いた。

いつか見たキングの横顔。

あの時とは違い、暗色の髪は短くなっている。

それでも高価そうな落ち着いた生地のスーツや、シルバーの眼鏡のフレーム、それ以上に存在自体が放つ極上の冷たいオーラが変わっていない。

何故キングがここへ……そう考える前に、最後に残っていた足の標本ビンが床に落とした。

鈍い音を立ててフロアリングの上に二度弾み、白い足を少し粘

性のあるホルマリンと一緒に一つ外に吐き出した。

その真っ白な足首がとても寂しそうに見えた。

せめて俺一人でも、この足首の持ち主の下へ行かなければいけない。

そうしなければこいつが可哀想だ。

俺の居場所はそこなんだ。

台所から持ってきたマッチ箱を取り出して、マッチ棒に火を点けた。

ホルマリンがどういう薬品かはよく知らないが、火気厳禁だろうという事は想像がついていた。

俺の身体一つ焼失させるくらいには燃えてくれるだろう。

「おい！」

こちらの異変に気付いて三木を囲んでいた人影が慌てている。

小さなマッチの火から視線を上げると、キングがこちらに腕を伸ばしていた。

怖くて見る事の出来なかった瞳に目を凝らす。

吸い込まれそうな漆黒の瞳にハッとする。

「やめろ！ ユキヤ」

毎晩自分の名を呼んでいた携帯のボイスメモ。

そういう事か……。

俺、騙されてたんだ……。

クラスの副担任で、キングの買い物だと思って、俺が本気で好きになった男……

アツキ……

篤樹……

キングの買い物じゃなくて……

椎名 篤樹……あんたがキングか。

「うそつき」

唇の動きだけで呟き、マッチ棒から指を離した。

キング（後書き）

εー（。Д。ゝ；）フウ・・・

.....。

まあ……そういう事です。

やっとここまで来れました（ゝ・ω・ゝ）モキュン♪

いや。最初から気付いてたよという方……甘い甘い♪

えっ？私？ 私なんて始まる前から気付いてましたよ。フッフ。

・・まあ……私が考えたんですけど……（∥Д∥；）ウツ！ウゼエ
エエー！！

そんなこんなで頂上越えまして、後は下り坂。

でもこれが案外難しい。

歩いて下るより転がって落ちた方が早いので勢いに乗って転げ落ち
ます。（ゝゝゝ）b逝ッテヨシ！

あと少しですのでお付き合い下さると幸いです。

ユメノアト

一面火の海の中に立ちすくんでいる。

空気に接する身体の表面全てがチリチリと痛むのに、何故か精神的にはとても穏やかで静まっている。

オレンジ色に揺れる炎の向こうから腕が一本伸びてきて、強い力で俺の身体ごと持って行こうとする。

抵抗しながら炎の向こう側へ引きずり出された俺の服に点いた火を、腕の掌が乱暴に叩いて消す。

また強い力で引っ張る腕に抱きこまれ、火の中のように熱い誰かの胸で意識を失う。

そんな夢を見ていた。

目が覚めると、見た事も無い部屋のベッドに寝ていた。

何故か身体のいろんな所にガーゼが貼られたり、包帯が巻かれたりしている。

それに片方の目が見えない。

それに声が出ない。

ただしこれは何も喋る気が無いのであまり苦にならない。

部屋には常に、もう一人誰か男がいる。

知らない男二三人が交代でベッドの横の椅子に座り、監視する様に俺を見ている。

男と目が合うのが嫌なので、反対側にある窓からいつも外を眺め

ている。

外の風景から、ここがマンションの一室であるらしいことがわかる。

窓の外には何の変哲も無い閑静な住宅街が広がっており、マンションの門から覗く道路を時折人が行き交うだけで、殆んど車は通らない。

俺を監視している奴等は、俺がトイレに行くときもトイレのドアの外までついて来るので落ち着かない。

それに俺が何かに触れる事を好まない。特に隣で果物の皮を剥いているペティーナイフなど鋭く光る物に対して何気なく手を伸ばすと、触ろうとしていた物を俺の前から遠ざける。

食事は毎日三度しつこいくらいに出されるが、食欲が無いのであまり口にしない。

食後にいくつかの錠剤を飲む為にちゃんと食べないといけない、と金髪の男が口元までスプーンを持ってくるので嫌々食べる程度だ。そいつは俺の身体のガーゼや包帯を何日かに一回剥がして、隠れていた傷らしきものに消毒をする。

最初のうちは肌に触れられるのが嫌だったので、手で払いのけて抵抗していたが、かなり粘り強い。

「いやだ！」

久し振りに聞いた自分の声は、全てを拒絶する言葉だった。

そもそも何の前触れも無く急に身体に手が伸びてくるのが嫌だ。襲われる様な衝動に駆られて怖くなる。

他人が不意に椅子から立ち上がったたりする大きなアクションや、突如大きな音が鳴ると、身体が勝手にビクつく。

ところが金髪の男は女みたいに優しい顔をしておいて、あまりにしぶとくガーゼに手を伸ばしてくるため、諦めていたようにさせておく事にした。

話せるようになった俺に男達がいろいろ話しかけてきたが、喋りたいとは思わなかったので、ずっと窓の外を眺めていた。

何故こんな状況に自分がおかれているのか思い出そうとするが、身体中のガーゼや包帯の下が急にジンジン疼きだすし、それが体内をこだまして酷い頭痛を引き起こすので考えないようにしている。

一日の大半を窓の外を眺めて過ごしている。

日に二回マンションの前に止まる郵便配達のバイクや、夕刊を配る新聞配達のバイクを見て時間が経過した事を知る。

そうやって何日も過ぎていったような気がする。

身体に張り付いたガーゼの枚数が少し減った頃、夕飯の後に隣に座っている眼鏡をかけた男が「風呂に入るか？」と聞いてきた。

夜はこの男の担当らしく、いつも日が暮れてから俺が眠るまで、ずっとこの男が隣にいる。

外が暗くなりカーテンを閉めるので窓からの風景を見る事も出来ず、隣で本を読んだり何かのプリントに目を通して男の横顔を眺めているので、顔を覚えてしまった。

その男の掌と指にも、俺と同じように包帯が巻かれている。

湯船には浸かりたかったが、浴室へ行くと縛られたり身体に新しい傷が増えるから嫌だと丁寧に断った。

相変わらず口から出るのは何かを拒否する言葉ばかりだ。

具体的に浴室で何をされたかと聞かれれば上手くは説明出来ないが、足が、太腿が、浴室へ行っただけいけないと警告を鳴らしている。

男は何故か辛そうな顔をしていた。

俺が風呂に入らない事がそんなに悲しいのか。

毎日渡された温かい濡れタオルできちんと身体を拭いているのに。

変な奴だ。

男の表情が辛いというより悲しそうに見えたので、少し心配になって男の髪の毛に触れ、頭を撫でた。

あたたかい。

すると男の顔に微笑みが戻ったので安心した。

しばらくして、いつまでも取れない足首のガーゼに何となく触れてみる。

特に痛みが無いので、テープを外してガーゼを捲る。

すると踝から十センチほど上に真横に線を引いたようにかさぶたが現れた。指でその線をなぞってみると少し凹んでいる。

反対側の足首にも同じ傷跡があった。

なんだろう、これ。

ガラスの中に浮かぶ白い足首の映像が頭の中で映っては消え映っては消え、いつのまにか顔をしかめていた。

隣で書類を読んでいた男が突然立ち上がった音に驚いて、身体が縮む。

男は怖い顔をして何も言わないまま、見上げる俺の手を退けて両足首のガーゼを張り直した。

光る物だけでなく、自分の身体に触れる事もタブーらしい

ある夜、ベッドサイドテーブルの引き出しの中に見覚えのある、手の平程の小さな機械を見つけた。

鼓動が高鳴るのを押さえつつ、二つ折りになっている機械を開けた。

一つの面にボタンがギッシリと並んでいて、反対の面には画面がある。三毛猫の顔がアップで映し出されている下に時間と日にちが表示されている。

俺はこの機械が喋るのを知っている。

大好きな声で俺の名前を呼ぶ。

その声が聞きたくて、ドキドキしながら適当にボタンを押すが画面の表示が変わるだけで全く喋らず静かなままだ。

確かにこの機械に間違ったのに、と思いながら機械を何度もたたんだり開けたりしてみる。

「どうかしたのか？」

例の夜担当の男が聞いてきた。

「これ……俺の宝物なんだ。毎晩喋ってくれてたのに……今は全然話してくれない……大切にしてたのに壊れたのかな？」

顔の前で必死に機械を触りながら、初めてまともな会話をした。

「貸してみろ」

そう言って、俺の機械を取り上げた。

大切な物なのに人の手に渡ってしまつて不安になる。

心配になるので、上半身を前屈みにして画面を見ながらボタンを押す男の顔と小さな機械を交互に見た。

本当にこの男に直せるのだろうか。大事な物なので早く返してほしい。

男はいくつかボタンを押して、最後に「これかな？」と言って中央の丸いボタンを押しながら機械を耳にあてている。

機械が何か喋ったらしく、眼鏡の奥の瞳が曇った。

壊れていなかったと分かつて嬉しくなった俺は、男の手から無理やり機械を奪い取り、ベッドの中に潜り込んだ。

布団の中で、先程男が最後に押した中央のボタンを押して、機械を耳にあてる。

『おやすみ。ユキヤ』

少し鼻にかかった優しい大好きな声で機械が呟いた。

一気に身体が溶け出すように緩和する。

大きく溜め息をつき、何度も同じボタンを押す。押した回数だけ

機械は俺の名を呼ぶ。

ユキヤ……。俺の名前はユキヤっていうのか……。

そのまま眠ってしまったおうとニヤついたまま目を閉じると、布団の上から何かが圧し掛かって重たい事に気付きベッドから顔を覗かせた。

さっきの男がベッドの布団に両腕をつき、顔を伏せていた。

どうしたんだろうと起き上がり、男の肩にそつと手をおく。

その肩が僅かに震えている。

急に身体 of 具合が悪くなったのかもしれないと慌てる。

「もう……。もう、やめてくれないか？　俺が悪かった。……やっぱり手放すべきじゃなかった。……だから頼む。……もう許してくれ」

頭を抱えて独り言の様に呟く男を見て、俺は焦った。

途切れ途切れのかすれた声が泣いているのかもしれないと連想させた。

俺のせいかな？　俺が泣かせたのか？　どうしよう。

「ご……ごめんなさい」

原因が掴めないままとにかく謝罪し、以前した様に男の髪に手をやり頭を何度も撫でてみる。

それでも男が顔を伏せたままなので、どうすればいいか必死に考えを巡らせた。

駄目もとで、子供の様にキスしたら泣き止むかもしれないと思いついた。

自分の顔を男の方に寄せると、男は少し驚いたように顔を上げた。その隙について、男の唇に自分の唇を重ねた。

男の髪の毛をもう一度そつと掌で撫でた。少し硬い髪の毛からでも温もりを感じる。

全部欲しい。この髪も、唇も、肩も、身体も、声も、もちろん心も、全部。

このぬくもりだけで、俺はこれから茨の海を歩いていける。

いつかそう誓った事を思い出した。

それを皮切りに、鮮やかな記憶が淡色だった脳の中に凄い勢いで流れ込んできた。

どんどん満ちてくる海水に浸った脳は、渴きを潤しゆっくりと浮き上がった。

目を見開いたまま、ゆっくり顔を離した。

「ユキヤ……」

その声が先程小さな機械から発せられた音と同じ音色だと気付く。透き通る水で覆われた、漆黒の瞳を見つめる。

「せん……せ……い……」

長い夢の後

一度終わった世界が

また始まる。

ユメノアト（後書き）

土日結局更新できませんでした。・。（P D q）・。ユルシテクラサイ：

昨日の晩、ついに小説の完結を待たずして読者数解析が復旧され、それを見てゲロするという事件が発生しました。

ブログの方をメインで考えておりましたので、こちらの方は拍手数・コメント数から察するに10人前後の読者数を予想しておりましたら、平日は毎日70人程の方に読んで頂いていたと知り、まあ軽一度肝を抜かれた次第でございます（´∀、）b逝ッテヨシ！

ウ○チを投げていたら、予想外に檻の外から沢山の人に見つめられていたゴリラの気分です。そんなつもりじゃなかったんです！ホントマジごめんなさいってゴリラもきつと思ってるはずΣ（＊。D。＊）クッハアーー！！！！。（こんな表現しか出来なくて本当にごめんなさい！でもこういう奴なんです……私）

こんな小説を、こんなに沢山の人の前にさらしているのか悩みどころですが。もうあと三話程で完結なので恥を忍んで書いています。オラアアーΣ（。▽。ノ）ノーツ！イケエエー！！！！

次回作の連載を始める前に目を通そうと思って買ってあった「小説の書き方」という本を、とりあえず神棚に移して毎日拝もう……。

ああ、もうこれで何か安心だ！アホタレ！（。▽。ノ）ノ

あと少しなのでお付き合い下さいますと幸いです。

キングと買い物

「あつ。……ちよつと辛かったかも……」

「そんな事無い。美味しいよ」

タンドリーチキンの下味に使ったカレー粉が思ったよりも辛かった。

きっと椎名は無理して美味しいと言ってくれているのだと思い、持っていた水のコップを置いて、微かな苦笑いを返す。

記憶が戻り、ベッドルームから出るようになって二週間程が過ぎた。

マンションの部屋は俺が想像していたよりずっと広くて、恐らくこの階のフロア全てを占めていると思われた。

一日本を読んだり、テレビを見て料理のレシピをメモしたりして過ごしたりしている。

毎日二回、今まで料亭の物とはいえ外で買ってきた食事に頼っていた椎名のために、有り余る時間の一部をキッチンで過ごす事に費やした。

三木の家でも一人で暮らしていた時でも料理の経験は無かったが、せっかく家において貰っておきながら、何もしないのは気が引けるため、全ての家事を請け負う事にした。

割と物覚えには自信がある方で、料理をするようになって一週間ちよつとでかなり腕は上達したと自分では思っている。

最初はよく昼間に訪ねてくれる吉野に材料を買って来てもらっていたが、ここ二三日は歩いて十分程のスーパーに自分で買出しに行く。

食器洗いを済ませ、ガラステーブルを拭きながら向こうのリビングに目をやる。

椎名がクリーム色のレザーソファに座って、壁半分の面積を埋める様な大きさの薄いテレビから流れるニュースを見ている。

クラシックを聴くための大層なスピーカーセットや黒い大理石の床に敷かれた毛足の長い白い絨毯、壁に掛けられたテレビと同じくらい大きな絵、どれをとってもやはりこの人はキングなんだと認識させられる。

その反面、夏休み中で時間はややルーズになったものの毎朝クタクタのスーツを着て出勤していく姿を見ると、ああ俺のクラスの副担任だとも思う。

しかしシルバーフレームの眼鏡や、品のある黒のクレリックシャツを着た、たくましい背中の凛とした存在感が、今までセンスが無いと思っていた数学教師とは大きく違う印象を与えていた。

あの背中が毎日普通に眺められる生活をどれだけ楽しいものかと夢見た事があったが、何だか思っていたのとは違う。あの時の感覚と全く変わらない。

毎日近くについて眺めている背中が、自分が触れられない遠くのもののように感じる。

俺の記憶が戻ったあと、あの腕で一度きつく抱き締めてくれた。

「心配かけさせやがって」

耳元で聞いたこの言葉以来、椎名は俺の身体の傷に関する事や三木の家での生活には一切触れようとしない。

俺もその時に「ごめんなさい」と一言謝ってからは、椎名の前から姿を消した後に自分の身に起こった事や椎名がキングであった事実に対する事は口にしない。

よって、二人暮らしにしては極端に交す会話の数は少なく、まる

で一度別れたカップルのように気まずい空気が流れている。

勿論椎名はそんな気まずさは全く表情に出さず、今まで通りの接し方で俺の体調や傷の痛みが無いかを大いに心配してくれる。が、それはやはり教師が生徒を気遣う優しさのように思われた。

自分の身一つ守れない手のかかる生徒が、夏休みの間だけ心配性な教師の家に寝泊りしている。

一般的には問題の無いこの状況が、一ヶ月以上前に精神状態を崩した生徒を部屋まで送った教師の背中までの距離と、今の二人の間との距離がまったく変わらないと教えている。

長い時間いろいろ心配をかけたり、かけられたりした間柄ではあるが、椎名はやっぱり俺の副担任で、俺は椎名の大事な生徒だ。それ以上にはなれない。

夕食の後片付けが全て終わってから、ソファーへ行き椎名の隣へ座る。

少し腰を上げて椎名の近くに座りなおして、ゆっくりと上半身を倒し、椎名の二の腕に頬を付けてもたれ掛った。

最初はウトウトとして偶然してしまったこの体制だが、こんなことを毎日しても椎名は特に迷惑がったりしない。

横目で見上げると、視線に気付いて少し微笑みを返される。

その微笑が俺の我儘を困りながらきく兄の表情を思い出させた。

手元にある大きな手に指を絡ませたいと思う、がしない。

きっと手を繋いでも何も言わないだろう。いきなりキスをしても怒らないかもしれない。いや、何度かしたな。

何をしてもし椎名は俺を拒まないだろう。それは俺が精神を病んだ心配な生徒だからだ。

それ以上の感情はない。

それが分かっているながらこれ以上の行動を起こすのは、ずっと前

俺が兄にした事と同じだし、三木が俺にした行動と変わらない。
だから駄目だ。

これ以上はこの人を束縛して傷つけてしまう。そしてまた自分も傷つくことになる。

首元に手をやり、いつの間にか消えていた太い鎖の感触を思い出す。

「ねえ。先生、学校でお昼何食べてるの？」

「ん？ 今はコンビニ弁当とかだな――。授業が始まったら黛達と一緒に。売店のパンとか」

苗字で呼ばれ先生と呼ぶ度に、二人の距離を再確認させられる。

「お弁当作ったら食べる？」

「でも朝早いの大変だろう……」

「そんな事ないよ。夕飯の残りとかになっちゃうけど……」

料理を始めて、自分の作った物が好きな人の血潮に成り、骨と成り、肉と成り、その人自身の一部を構成するという事の喜びを知った。

今微かに隣から聞こえる鼓動が自分の作り上げた物を原動力に響き、頬に触れる筋肉が俺の料理で支えられていると思うと嬉しかった。

「そうだ。明日ちょっと買い物に付き合ってくれないか？ 見せた
い物もあるし……」

「うん。別にいいけど」

スーパ一の往復以外は外に出ないが、もう身体の傷も殆んど消え、ちよつとの事でビクつく事は無くなったので大丈夫だろう。

次の日は日曜で、昼過ぎから椎名の車で出かけた。

駐車場へ向い、ずっと前に精神科に送ってもらったぼろい軽自動車に乗り込もうとすると、隣に停めてあるスポーツタイプの高級車

の鍵が開いたので驚いた。

どこまでがキングの持ち物なのだろう、と暗い駐車場の中で光るボンネットの列に視線を落とす。

一時間程車で走って、海沿いのブランド店が並ぶショッピングモールに着いた。

どう発音するのも分からない英語が掲げられた装飾店に入る。ガラスケースには一つ一つの宝石やアクセサリーが間隔をあけて、美術品のようにディスプレイされており、どう考えても高校生は場違いだ。

俺が一生入る勇気が出ないような敷居の高い店内に入ると、すぐに男性店員が駆け寄り「お待ちしておりました」と奥のソファへ案内された。

しばらく待つと、お待たせいたしましたと言って紳士のような雰囲気男性店員が、トレイの上に宝石箱を乗せて現れた。胸の小さなネームプレートでこの店の店長だと分かる。

「こちらでございます」

男は紺色のリングケースの蓋を開けて前に差し出す。

シルバーに光る大小の二つの指輪が現れた。

どちらも一本ラインが入っているだけのシンプルで品のあるペアリングだ。

「これ……どう思う？」

急に聞かれて驚いた。

顔を上げると、店長の男もにこやかに微笑みながら返事を聞くようにこちらに顔を傾けている。

「えっ!？ どう思うって……え、うん。いいと思うけど」

何でそんなこと俺に聞くのだろう。

だいたい誰が付けるのかも分からない指輪に良いも悪いも無い。椎名の買い物だから大きい方の指輪は椎名の物だろう。小さい方は……俺に聞くてことは俺の物かと浮かれそうになったが、小さ

い指輪を見て俺の指はこんなに細くないと自重した。

「では、こちらでサイズ調整させて頂きます」

蓋が閉められて、男は伝票の様な紙に何か書き込みをして、そそくさと立ち去った。

「じゃあ出よう」

そう言われて店を後にした。

その後何軒か他の店をまわり、何枚か服を買った。それは試着させられたので、どうやら俺の物で間違い無いらしい。

いくら教え子とはいえ、そんな高価な服を買ってもらわなくてもいいと断ったが、いつまでもサイズの合わない椎名の服を着せる訳にもいかなと言われ仕方なく試着室へ入った。

海に沈む夕日を臨めながらレストランの個室で夕食を食べる。

鯛のマリネに箸をやりながら、昼間見た指輪の事を考える。

見せたい物ってあれのことなのだろうか。結局聞くに聞けずにいる。

随分前にDEEP BLUEの個室で見た椎名の首元にあった情痕を思い出す。

キングがつけたものとばかり思っていたが、椎名自身がキングだったので違っていた。

じゃあ誰が……。その答えがあのような小さな指輪をはめる人物と重なる。

どちらにしても俺じゃない。だいたいサイズ調整すると言うくらいなのだから、俺の指輪なのだとしたら俺の指を測るだろう。

そりゃキングだもんな。

キングはかなりやばい奴だが、外見がいいから相手をとっかえひっかえで、あげくの果てに気に入った人間を金で買う最悪な人物だと噂に聞いていた。

外見がいいのは確かだが、一緒に暮らしている限りそんなに遊んでいる様には見えない。

生徒が家にいるからそれなりに気を使っているのだろうか。一歩外に出れば他に囲っている人間が沢山いたりして。

やっぱり夏休みが終わる前にあの部屋を出よう。俺がいるからペアリングの相手と一緒に住めないのかもしれない。

そう決心して、フカひれサラダを皿に取り分けた。

レストランを出て車に乗り込むと、やはり帰途についた。

今日の目的は誰かとはめるペアリングの感想を聞く事と、俺の服を買う事だったらしい。

外が暗くなり助手席で眠たい目を擦っていると、車が交差点をマシヨンとは反対方向へ曲がった。

車が停車した時、窓の外には暗闇の中に懐かしい箱の様な校舎が並んでいた。

「何で……うちの高校？」

椎名の忘れ物でも取りに寄ったのかと思っていたら、車から降りる様促された。

「見せたい物があるって言っただろう？」

そう言いながら、職員用の門をくぐり校内に入っていく。

後ろに付いて行くと、着いたのは旧校舎の屋上だった。

「見せたい物って？」

外灯も無い暗闇の中で、相手の顔も確認できずに聞く。

「そろそろだと思っただけど……」

カチャっという小さい音がして、携帯の青白い光に椎名の顔が映し出される。

その時だった。

大きな爆発音と共に一瞬視界が昼間の様に明るくなり、そしてまた暗くなった。

「花火!？」

「そう。今日七宵川の夏祭りだ」

俺の住む市では夏に河川敷で大きな花火大会と夏祭りが一度に開催される。

遠くからも人が来る、割と大きな祭りだ。

よく和斗や龍斗と連れ立って行った記憶があるが、川沿いはすごい人混みで当時の低い身長では人の頭の間に僅かに火花が見えるだけだった。

「近いだろ?　ここすごい穴場なんだ。実は俺、この高校の出身者でお前の大先輩だったりするんだぞ」

何回かの爆音と同時に椎名の悪戯な笑顔が浮かび上がる。

夏祭りの会場は川の向こう側で、高校は川を挟んで反対側。こちらの川沿いは大きな国道に面しているため、殆んどの人が夏祭りの会場から花火を見る。

ただし花火が上がるのは川のこちら側なので、国道と雑木林を挟んだこの旧校舎の屋上は、まさに花火を真下のように感じれるくらい近い穴場だ。

川の向こう側はさぞかし賑わっているのだろうが、ここは花火の音以外には音源が無くシンとしている。

ここ数年こういった季節の風物詩に足を運ぶほど余裕のある精神状態では無かったので、まさか今日が夏祭りの日だとは思えもつかなかった。

花火は真下から見ても丸いんだな。

大きな爆音とその後続くパラパラという儚く小さな炸裂音。夜空に大輪が咲いては乾ききらない絵の具の様に無数の金色の筋が流れ落ちて消えていく。後に残る幻のような薄煙と、何も無かったか

のように広がる静かな夜空。微かに匂う火薬の香り。それを何度も繰り返す。

単純に心から綺麗だと思った。こんな純粋な気持ちは久し振りだと思うほど、自分の心が今まで荒んでいたんだと気付く。

手すりに両肘をつけて上を見上げる椎名の顔が、不定期に瞬く光に映し出される。

その横顔はまるで夏休みを満喫する高校生のように幼さの残る笑顔だった。

「なんでキングだって教えてくれなかったの？」

花火の華やかさにまぎれて今なら聞けると判断し、口を開いた。

「ん？　だってお前キングの事嫌ってただろ？」

一瞬明るくなった椎名の顔がこちらを向いていたので言葉を失う。

「キングだって言ったら、俺の前から消えずにいてくれたか？」

そう聞かれて、首を振った。

椎名がキングだと知っていたら……もっと遠ざけていただろうな。

しばらく何も話さず、嬉しそうに花火を見上げる椎名の現れては消える無邪気な横顔を眺めていた。

今の椎名は、ただの椎名篤樹だ。

キングでも、教師でも、一度俺が好きになった男でも無い。

ただの椎名篤樹の中に、俺の記憶を残したいと思った。

手のかかる生徒としてでは無く、身体を売る男としてでは無く、椎名を好きになった一人の人間として。

俺は一度この男に告白して失恋して、それから死んだ。そしてまた始まった新たな世界で、椎名を一から好きになっている。

「ねえ……先生」

こういう時に限って花火が止んで静まり返る。

「俺……椎名さんの事、好きなんだ。……教師として、とかじゃなくって……ちゃんと恋愛対象として……」

煙火の散った暗闇の中で、先程までの破裂音とは比べ物にならない程小さな自分の声がする。

夏祭りの日に学校の屋上で告白。自分には無縁だった青春臭くて上等だ。

「—————。」

そして、こういう返事を聞く肝心な時に、花火が中盤のクライマックスを向える。

視界の隅で弾ける飛ぶ火花に照らされて、何かを言う椎名の微笑み。

何て言っているのか、全く聞こえない。

俺の気持ちを察したのか、笑顔で目を細めてから俺をそっと抱き寄せた。

「俺も……。ユキヤが俺に出会うずっと前から、俺はユキヤの事が好きだった……」

一瞬の破裂音の合間を縫って、俺の耳元で深みのある温かい声がする。

椎名も俺が好きだった……？

俺が椎名に出会うずっと前から……？

言葉の意味を理解する前に口を椎名の唇で塞がれた。

椎名とする何度目のキスだろう。

少なくとも生まれ変わってから初めてのキス。

ずっと届かないと思っていた背中に腕をまわす。

その日俺は旧校舎の屋上で、花火の音が消えるまでずっとキスをしていた。

近くで上がる花火の音が聴こえ無くなるくらい意識の遠退く、とろける様なキスを。

相手は高校の数学教師で、俺の副担任で、皆が恐れるキングで、俺が大好きな、ただの椎名篤樹だ。

キングと買い物（後書き）

長い……今までの倍ほどあります。

二話に割っても良かったのですが、次回作の事で頭がいっぱいなのもあり、もう書く事は決まっているので早々に完結させるべく一話にまとめさせて頂きました。

そして、この長さに似つかわしくない、特に色気もなんもないパツとしない内容。

まあ、これで＞完くでもいいような展開ではあるのですが……。どうなんだろう……。

これだけ長くダラダラ書いというて、あんまり自分では納得がいつてない……。（。D。）マジデカ！ まあ私の場合、納得とは時間をかけて見直した事を意味する錯覚に過ぎないのであまり意味はありませんが。

一応あと二話だけ入れる予定です。

そして更新時間が大幅に遅れてしましまして申し訳ありません！！

m（――）mサーセンツシターー！！

歯医者への帰りに祖母宅へ寄ったら、予想外に引き止められてしまいました。

え？ 別にこんな小説待ってない？ ならよし！

そしてそして！ 毎日拍手を下さる皆様！ 非公開なのでお返事は出来ませんが拍手コメ頂いた方！ 本当に本当にありがとうございます！

！皆様が思われる以上に力を頂いております！！ 好 キ （＊V D V 艸） ダ 本当に抱き締めたい気持ちでいっぱいです！

甘い甘い（前書き）

性描写が含まれますので、苦手な方・義務教育中の方はご遠慮下さい。

甘い甘い

「んっ——ふっあっ……あぁっ……ん。……あつきい……」

深く繋がっていた唇をそのまま顎へ伝わせ、耳元に痺れた舌を這わせながら相手の名を呼ぶ。

フットライトだけが床を照らす殆んど闇に包まれた部屋なのに、何故か冷たい深海の中だとは感じない。

熱く上気した息音とベッドが軋む音が空気を揺らす。

ここには確かに空気がある。熱があり、温もりがあり、深海魚の尾ひれでは無い自分の熱気を帯びた二本の腕がある。

波に揺れながらしつとりと汗ばんだ愛しい首筋があり、肩があり、腕があり、身体がある。

温もった体温よりもずっと熱い海水が速やかに身体に流れ込み、満ちていく。指の先にまで熱い水脈を感じる。

生きている。

人魚が人間になれたように、深海魚にも腕と足が生え、火照った身体に生まれ変われるのだと知った。大好きな人が教えてくれた。このまま人魚の様に泡になって、砕け散ってもいいとさえ思う。

顔の横にある少し潤った硬い髪に指をやる。

繋がった身体が、この髪一本でさえも今は俺の物だと、自分の指一本でさえもが大好きな人の物だと思わせ、脳にまで熱い水流が満ちた事を感じる。

熱い。

今までの、どのベットの土よりも、灼熱の火の海よりも。

喉の奥から漏れる甘い声音を遮るように、愛おしい肌に唇を這わす。

「あぁっ……せんせえ……し——なせん……せえ……好きっ……好

きだ……よ……」

自分の唾液でびちゃびちゃになった首筋と口元を離し、うわ言の様な途切れ途切れの切ない声を、熱い吐息と一緒に直接耳に吹き込む。

「その声と呼び方……反則だ」

耳元でそう呟かれ、首の後ろがゾクリとする。ああ、今脊髄が溶けた。

大きな高波にザブリと後ろに押し倒されて、濡れた背中にシーツが冷たい。

学校以外ではアツキと呼ぶ約束だったが、俺の脳は今熱で溶けて流れ出しそうな状態なので、そんな約束形も無くとろけてドロドロだ。

海面で波の揺れに荒い息を吐き出していると、天井に見えるはずもない星空が見えた気がした。

横に倒れた薄暗い視界に映る、絡まる二つの掌。

銀色に薄明かりを反射する金属がどちらの薬指にもはまっている。それが時折カチリカチリと鈍く硬度の高い音を立てて擦れ合う。

徐々に揺れを増すベッドの上で、そのシルバーの輪に思いを寄せる。

俺も左手の薬指でよかったのに……。

夏祭りから三日目の今日、見覚えのある男がマンションに小さな包みを届けに来た。

風呂を済ませ、寝室で酒を飲んだ後、ベッドに二人で腰を下ろして、その包みを渡された。

中のペアリングの内側には、俺と椎名のアルファベットが刻印されており、サイズもどという訳かちゃんと俺の薬指に合うように調節されている。

あの日から俺は椎名のベッドで一緒に寝ている。寝るときだけで

は無く出来るだけ椎名の傍を離れず、ずっと手を繋いで隣にいる。
会話は前より多くなったし、くだけた冗談なんかも言い合える様
になったが、キスをして唇が塞がっている時間も同時に増えたため、
二人の時にはまだ静かな時間も多い。

椎名が……篤樹が、大きいほうの指輪を取って自分ではめようと
したので、慌ててそれを無理やり奪って、俺が篤樹の左手の薬指に
はめた。

次は自分の番と左手を差し出すと、小さな指輪を手にとって見つ
めていた篤樹が俺を抱き寄せた。

「いいのか？ 本当に。今ならまだ元居た場所に戻してやれる……」
もう引き返せない場所に行くこと覚悟し、ぎゅっと目を瞑る。

元居た場所……それは暗い深海だろうか。これから俺はどこに連
れて行かれるのだろう。

どこでもいい。篤樹と一緒になら。

「いいよ。篤樹は……？ 後悔しない？」

触れる事を許されたばかりの背中に両手をまわす。

「もうしてる。ずっとこうしなかった事を……」

「教育上問題大有りじゃなかったのかよ」

身体を話して悪戯に笑った。

「教師なんていつでも辞めてやるさ」

キングにとっては経済的安定度の高い公務員もバイト感覚らしい。
でも篤樹には教師を続けてほしい。

「じゃあ学校で会えなくなるね」

「それはダメだ……ユキヤが卒業するまでは教師でいさせてくれ」
そう言いながら、ベッドから腰を下ろして俺の前にひざまずく。
漆黒の瞳で俺を見上げながら、俺の右手を取ってキスをした。

「さすがに高校生は右手だな……」

右手の薬指が、銀色の輪をぐりぬける。

やっぱり篤樹はキングより教師の方が合ってる気がする。

薬指に宿ったシルバーの光を見つめっていると、また抱き締められて、深く口付けをしたまま二人でベッドに倒れこむ。

指輪以外何も身に付けず、本気で好きになった人と身体を繋げる事がこんなにも満たされる行為だとは知らなかった。

全てが終わった後、ベッドサイドのダウンライトを点けて篤樹が濡れたタオルで身体を拭いてくれた。

ぼんやりとはいえ、身体を明るみにさらすのが恥ずかしい。

殆んど意識の溶けた頭で、今更ながら不安になる。

こんなにも身体がたっぷりと零れ落ちそうなほどの海水で満ちているのに、それが自分だけの様な気がして怖くなる。

自分にはベッドモードになれる程の余裕も無かった。

相手があまりに上手かったせいもあるが、本気で好きになった人と繋がる事にこれ以上無く緊張して、興奮して、溺れて、乱れて、意識が飛んだ。

今頃になって自分は本当に好きな人と身体を重ねることは愚か、付き合った事さえ無いと気付いた。

こんなことで、この先大丈夫だろうか。

篤樹は俺の身体に負担がかからないようにとても気を使ってくれた。それはすごく嬉しいのだが、ちゃんと篤樹は俺の身体に満足してくれたのだろうか。

相手に苦勞しなかったキングを満足さす事なんて俺に出来るのだろうか。

もしかして俺も今までのキングの買い物の様に数ヶ月で飽きて捨てられるんじゃない……。

底知れぬ不安に呑み込まれそうになっていると、俺の足を拭いていた篤樹の手が右の太腿で止まった。

「やっぱり駄目だな……」

俺の不安に答えるような篤樹の言葉に飛び起きる。

すると右足の内太腿に彫られた忘れてしまいたい刻印に、篤樹の驚くほど冷たい視線が落ちている。

恐ろしく冷気を宿したキングの表情に、久し振りにS字状の傷が疼いた。

「ユキヤ……この部分だけ皮膚削ぎ取ってもいいか？」

冷ややかな篤樹の言葉に、自分の過去が愛する人を傷つけているのだと知り、辛くなった。

「い、いいよ。篤樹がそうしたいなら……」

皮膚の中に刃が沈むあの時の感触を思い出すだけで背筋に震えが走るが、篤樹のためなら我慢できる。

本当は指輪の内側ではなく、この身体に篤樹の名前を刻んで欲しい。

「冗談だ……」とキングの表情を消した篤樹の顔が少し悲しげに見えて、冗談なんかでは無いとを感じる。

「あの三木って男は、ああ見えてなかなか頭がいいな。俺はこれかrazつと、ユキヤを抱くたびにこの傷跡を見て嫉妬で狂いそうになりながら灯りを消す……この世で一番見ていたい光景を一生見れない……きつとあの男の迷惑通りなんだろうな」

駄目だと言った言葉の真の意味を知り、悲しくなる。明るい所で俺を抱くのがやっぱり無理という意味か。

初めてだから気を使って暗くしてくれたものと思っていたが、違っていた。

「やっぱりあの男、殺しておけばよかった……」

そう溜め息交じりに顔を歪ませる篤樹の言葉で、三木が生きているのだと知った。

もう一人の自分がまだ生きている。

俺のせいで三木を死なせずに済んだ。

今まで出来るだけ考えないように避けていた課題が思いがけず解決して、心が浮いた。

きっとあの人も、いつか俺のように救われる日が来る。

「……そうだ！」

何か思いついたらしい篤樹は、急にベッドから立ち上がってローテーブルに向かった。

ベッドへ帰って来た少年の様に無邪気な表情の篤樹の手には、先程までアイスペールの中で氷水に浸かっていたアイスピックが握られていた。

「よお。久し振り——」

屋上の心地よい風を受けながら貯水タンクの裏へまわると、思った通り懐かしい顔が二つあった。

「お——。黛」

「ユーキ！　もう体調大丈夫なの？」

何ヶ月振りに見るシノの顔が、暑さのせいか頬が薄桃色に染まっております何だか幼く見えた。

夏休みのど真ん中にある登校日のホームルームを終えてやっと解放されたが、まだまだ午後の屋上は焼け焦げるくらい熱い。

「おお。シノも完全復活したのか？」

「うん。ま——ね！　ご心配お掛けしました」

そう言いながらちよこんと頭を下げた。

三木と一緒に住んで高校を休んでいた一ヶ月間、どういう流れでそうなったのか、俺は病欠扱いになっていて、そのまま夏休みに突入した。恋人のためなら手段を選ばないキングの仕業なのか、学年主席を失いたくない学校側の気遣いなのか、そのどちらもなのかわからない。それどころか「入院してたんだってね。大丈夫？」と心配の言葉までかけて頂いている。

その間に俺とは違い本気で死にかけて入院していたシノが、やっ
と退院していたらしい。

「まあ、お互い様です」

そう言って、俺も二人に頭を下げた。

それ以上は、シノの自殺未遂の件に関して何も聞かなかった。二人も俺が一ヶ月も休んだ事に対して何も触れなかった。

三人でくだらない話を取り止めも無くしていると、もう全てが解決しているのだと感ずる。

「そろそろ熱いし帰るか……」

話しも途切れたところで俺が言うと、何故か二人に緊張が走り気まずい空気が流れた。

「あつ、黛。ちよつと話あるんだけどさ——」

なんだろう、この感じ。喧嘩していた時とはまた違う、落ち着かない雰囲気だ。

まだ野木とシノの仲は完全に戻っていないのだろうか。

「いいけど……野木この後部活だろ？」

「そんな時間かかる話じゃないんだ」

シノにも関係あるのかと思ひ横を振り向くと、俯いたまま耳朶を真っ赤にさせている。

「ごめん、ヒロト。俺やっぱり先に帰ってるよ。じゃあ！」

「おい！ シノ！」

野木が呼び止めるのも聞かずに、顔面真っ赤で下唇を噛締めたままシノが走り去った。

ヒロト？ 誰だヒロトって……。

俺は目の前にいる日に焼けた部活野郎をまじまじと見つめた。ヒロトってお前か？ お前がヒロトか？ 野木ヒロト？

「あ、あのさ……。あつ！ そういや黛、あの三木って奴どうなったよ？」

気まずさを吹き飛ばすために、野木が適当に話を振った。
ただその話はちよつと痛い。

でも篤樹との事はちゃんと報告するべきだし、いいチャンスだ。

「あ……。俺もさ……。その事でちよつと話あんだよね」

「何？ 先言えよ」
深呼吸を一つする。

「俺、好きな人できてさ、その人と付き合う事になったんだ」

「へえ。良かったじゃん」

「で、その相手ってのがさ……。俺のクラスの副担任なんだ」
さすがに最後の言葉は口ごもった。野木と目が合わないように旧校舎の屋上を見つめる。

「え！ 数学の椎名！？ でも……。お前あいつキングの買い物って……」

「あつ！ それ俺の勘違いでさ……。キングの買い物じゃなくて、あの人がキングだったんだよね……」

野木の動きが止まった。

そりゃそうだろう。俺が野木でも思考が止まる。

副担任だし、男だし、挙句の果てにバイト先の悪名高きオーナーだし。更にそいつに数学を教わっていたという事実。

「そ……。そうか。まあ……。幸せそうで良かった……」

さすがに対応が男前だ。弓道部の副主将ともなるとちよつとした事では動じず、かなり高得点な返しをしてくる。

「うん。もう一緒に住んでるしな……。で、そっちの話って？」

もう一押しして副主将を混乱させたところで、話を切り替えた。

「……え？ ああ俺？ 俺の方は大した話じゃねえ。その――俺と

シノが付き合う事になったってだけ。それだけ……」

「えっ……。それだけって、お前……」

真夏の屋上で、肌を焼きながら男二人でシンとしてしまった。

階段を降りながら携帯を開く。

シノめ。何が金持ち以外対象外だ。

いつか俺の家で酔っ払って自信満々に演説ぶっこいてた得意げな顔を思い出して笑える。

『ヒロト君とお幸せに―― また屋上から飛ぶような事があれば、

野木は俺が頂く！！』

部室へ向かう野木と別れて、早速シノにメールを打った。

シノには珍しく、すぐに返事が返って来た。

こいつ、さては野木の事本気だな。

その上、もう篤樹と俺の事を知っていたので驚いた。

恋人同士の情報伝達速度に感心しながら、野木みたくもうちよつと混乱してくれてもいいのに、ともう一度メールを睨んだ。

『ダメだよ――ヒロトは俺専用機だから

P. S 変態キングよろしく』

甘い甘い（後書き）

やっと次回最後だー！！

今日必死で最終話書き終えました。

なのでこんな時間の更新です。

最後の最後に書き溜めが尽きました。

まあアホがアホたる所以です。書き溜めたり、書き溜め無かったり、書き溜め無かったり……（||Д||；）オイコラ……

そうやって夏休みの宿題を最終日に徹夜して仕上げるちびまる子のような人生を送って来ておりますので仕方ありません。もう日曜六時からのアニメがリアルすぎて笑えない。そんな女なんです。

では。明日お会いできると幸いです。

深海魚の夜空

視界いっぱいに広がる闇の中で、無数の光が小さな穴から漏れ出す様にキラキラと瞬いている。

一定間隔でざわめく波の音を聴きながら、水面に身体をあずけ漂っている。

ただし身体が浮いているのは海面では無く、水上ヴィラのテラスにある大きなプライベートジャグジーの水面だ。

水中の青いLEDライトで幻想的にライトアップされた、海面と同じ高さにある浴槽から星空を眺めていると、自分が海面に浮かんでいるように感じる。

一ヶ月程前は暗い部屋の中で標本びんを眺めていた自分が信じられない。

今までの事が前世の記憶を夢で見ていたかのように遠く感じる。

いや、夢だと言うのなら今のこの状況の方が夢に違いない。

満天の星空の下で、波に身体が揺れている。そういう夢を見た事がある。

また同じ夢を見ているのかもしれない。

好きな人の隣に居られる、そしてその人に見つめられる、名前を呼んでもらえる、キスをされる、身体に触れてもらえる。

いつか夢が覚めるように、何の前触れも無くこの世界も消えてしまうのではないだろうか。そんな日がそう遠くはない将来訪れる気がする。

今までのキングの買い物のように捨てられる。今までずっと続いてきた事が俺の番になった途端に変わるなんて事あるはずがない。

あまりにもしつこく、そんな不安を口にするので「じゃあ、一生隣でそう思ってる！」とキングを怒らせたのがいけなかった。

夏休みも残すところあと二週間という日の夜。

「ユキヤ。ちよつとそこまで出掛けるぞ」

明日も仕事があるはずの恋人が、帰って来るなりそう言い出した。喧嘩中で俺が口を利こうとしないのをいい事に、何も言わずにそのままの格好で車に押し込められる。

育ちの違いって怖い、と心底思った。

キングにとってのちよつとそこは、東シナ海を越えて、ベトナムとタイを越えて、ついでにスリランカを越えたインドの沖に位置する。

挙句の果てに副担任なんぞを恋人にもつと、修学旅行のために預けたパスポートなんかを平気で悪用されて、自分の意志に関係なくいつのまにか出国させられて、ファーストクラスから部屋着のまま夜景を見下ろす破目になる。

後ろで足音がしたので、浴槽に手をかけて振り返った。

「勝手にいなくなるなよ……」

大好きな人が不貞腐れた様な顔をして、バスローブ姿で立っていた。

360度海に囲まれたコテージから、泳いでどこかに逃げたとも思ったのだろうか。

篤樹の背中越しにベッドルームがぼんやりと間接照明で映し出されており、荒波に揉まれた様なベッド上の惨劇に、何時間か前までの激しい情事を思い出して頬が熱くなる。

「ごめんなさい」

湯船に入り隣に座った首元に腕をまわして、触れ合わせるだけの

キスをする。

サラサラとした肌が気持ちよくて篤樹の肩に頬をあてていると、その感触が離れて青く発光する水中に消えた。

不思議に思っていると、自分も水面の裏側へ優しく引き込まれ、口内に温かい水と一緒に熱い篤樹の舌が浸入してくる。

身体の内側に温もりが染み渡り、脊髄を溶かしていく。

心行くまで味わった後、全ての息を泡として吐き出し、窒息寸前で水上に顔を上げた。

篤樹の顔を探すと、右足に僅かな浮力を感じ、同時に水面に自分の白い膝が現れた。

水面からヌルリと飛び出した俺の右膝を曲げて持ち上げ、暗色の髪の毛が俺の青白い内股に舌を這わせる。

下に揺らめく光に照らされて浮かび上がる整った顔が、生き物のように熱い舌で内太腿にあるS字状の傷跡を執拗になぞる。

「あっ……」

傷跡を舐められて欲情する俺の頭はいっちゃってるが、俺の彼氏の頭も俺以上に相当いつている。

恋人の過去の傷一つ許せず、ニコニコと少年の笑顔で自分の太腿にもアイスピックで同じ形の傷をわざと刻み込んだりする。

本当にあの時は「何考えてんだよ」と叫びながら血に染まるベッドの上で、その日二度目の意識喪失をするかと思うほど血の気が引いた。

「Sは椎名のSって事で我慢するか……」と満足そうに目を細める篤樹の太腿をタオルで押さえつつ、いくら押さえても染み広がる真紅に半泣きになった。

だから今篤樹の左太腿の外側には俺と同じS字の刻印がある。

身体を重ねた時にちょうど俺の傷跡と擦れ合う様になり、この世でたった二人だけの身体を繋ぐ大切な印だ。

揃いの刻印が随分と気に入ったらしいキングは、さっそくベッドルームの灯りを消す事をその日限りやめて、明るく照らされた俺の身体を隅々まで眺めたり、傷跡をしつこくなぞったり舐めたりしてくるので、俺にとっては過去の辛い思い出だったS字の傷が今では立派な性感帯になってしまっている。

「先生大人なんだから、もうちょっとちゃんと考えて行動しないとダメだよ……」と少し真面目に怒ってみたりもしたが、怒った顔が可愛いとか言って逆に押し倒される。

下手に家で先生と口にしてしまうと、相手の背徳感を刺激するらしく、それからの何時間かがベッドの上の露と消えるので逆効果だという事が判明した。

太腿の傷にしても、今回の旅行にしても、本当に何をしだすか分からない所が妙に子供っぽい。

今まで知らなかった好きな人の新たな一面に、それも好きかも、とまたのめり込んでいく自分がいる。

篤樹が薄くやわらかい肌を吸い上げてこっちを見ながら、少し唇の端を上げて軽く歯を立てたりする。

太腿が愛撫されている艶めかしい状況を見ているだけで、脳が溶けてのぼせる。

自分の足と篤樹の頭の後ろに広がる黒い音だけの海や、その境界線から立ち上がる夜空に、いつかの甘美な悪夢を思い出す。

ただあの夢よりもずっと夜空の星は美しいし、篤樹の姿もあの時より遥かに妖艶で目を奪われる。

あの夢のように自分が今まで深海だと思っていた場所は、夜の海

面だったのかもしれないと思う。小さな星屑に気付かず、暗い深海だと思い込んでいただけのような気がする。

たとえそうじゃなくてもいい。

深海では無いどこかへ好きな人が連れて行ってくれる。

それがどこでもいい。

もっと深い海の底でも、篤樹と一緒にいてくれるならそれでいい。どんなに冷たい海水も篤樹といるだけで熱を帯びる。

隣に篤樹がいるだけで暗い海中も全てが輝いて見える。

篤樹自身が海なんだと感じる。

その中に溺れて、溶けて、泡になって、一つになりたい。

いつか別れを知るかもしれない恐れも

命が衰えて朽ちていく悲しみも

全て篤樹が溶かして忘れさせてくれる。

いつのまにか後ろから俺を抱き締めていた温もりに口元を寄せる。

「篤樹……愛してる」

「知ってる。俺もだ」

深海魚の真っ黒な瞳に星が映る。

下瞼から温い海水が溢れ出し、身体が星空を映した海面に溶けていく。

ただ目を閉じて、温もりだけを感じている。

「君学生？ それ制服だろ」

奥の廊下へ向かう途中、すれ違いざまに強く二の腕を掴んだ手を、振り返って見上げる。

すつきりとスーツを着こなした好青年。

俺の顔を見るなり掴んでいた手をスツと引いて「あっ……。いや……、何も無い」と言って立ち去ろうとする。

「何？ 俺まだ何も言っていないけど……」

こんなバーの個室が並ぶ廊下で声をかけられたら、聞かなくてもだいたい用件は分かるが。

残念ながら俺にはもう買い手がついている。

今から奥の廊下を曲がった裏口前の部屋でそいつと一緒に夕食を食べるんだ。

もう俺はその人の事以外考えられないくらい、その人に溺れている。

スーツの男は苦笑いし、首を振りながら答え、俺から離れていく。「いや、いいよ。その溺れた目見たら誰でも分かる。

俺もキングに喧嘩売る程バカじゃないからな。

君、あれだろ？

キングの買い物」

(完)

深海魚の夜空（後書き）

いやいや。終わりました。

何となく時間をかけましたが、最終的に秘技「まあ、いいか」を使用して、保存ボタンを押してやりました。

最初の予想より遥かに多くの方に閲覧して頂き本当に嬉しい気持ちでいっぱいです。

また拍手や拍手コメ、コメント頂いた方にこの場をもちましてお礼を言わせていただきます。

本当に本当に有難うございました！！！！

この方々無くしては、最終話を書き上げられなかったとヒシヒシと感じます。

こんな腐蝕ダメ人間に最後までお付き合い頂きまして、本当に皆様目の前にいたら有無を言わず抱き締めてます（。▽。）ギョットネ♪ というか四の五の言わずに抱き締められなさい。私に。（

´Д`）キモッ

初めてのBL小説として試作品のような感覚で、キャラ設定もちやんとしないまま見切り発射的に書き始めた物ですので、到底胸を張って自慢できる作品ではありませんが、多くの方に読んで頂き本当に感謝しています。

今後の予定といたしましては、また八月に入ってから短めの連載を書こうかと考えています。

次の連載までの繋ぎとして、一応キングの買い物の番外として後日談を二話程入れるつもりです。

シノと野木の話にしましては、後日談で少し触れるつもりですが、詳しく書くと連載になってしまいますのでどうするべきか悩み中で

す。番外の二話は、シノ視点の物一話と、野木視点の物一話の予定です。

次回作はブログに設置されているアンケートに投票して下さいました方の意見を尊重して、リーマンの受身設定にしようかと考えています。まだ間に合いますので、他にもリクエストあれば投票ボタンポチっとお願いします（・D・´）ポチットナ♪

とりあえず、神棚に祀ってある小説の書き方の本を下ろして、次の連載までに読んで少しでもマシな駄文を書ける様に努力したいと思います（ヾノ・▽・、）ムリムリ

次回の更新は出来れば金曜にするつもりです。

あまり次回の連載までに時間があく場合は、「ああ、こいつ神棚の本読んでないんだな……」と思って可哀想な目で見てやって下さい。ではでは「〇ペコ

↓7／31 この本編とは別にキングの買い物（番外）というタイトルで連載の方に番外編ばかり集めて載せますので、よろしければそちらの方へどうぞ♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3073h/>

キングの買い物

2010年10月8日14時00分発行